

**土地分類基本調査（土地履歴調査）
説明書**

大阪東北部

5万分の1

平成25年3月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）説明書「大阪東北部」

目次

はじめに

1	調査の概要	1
1.1	調査の目的	1
1.2	調査方法及び成果の概要	1
1.3	調査実施体制	2
2	調査地域の概要	3
2.1	地域の位置	3
2.2	地域の行政概要	3
2.3	地域の特性	6
3	調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係	9
3.1	地形概説	9
3.2	地形細説	12
3.3	地形と土地の開発、保全及び利用との関係	15
3.4	地形と災害及び保全との関係	18
4	土地利用の変遷の概要	19
4.1	過去の土地利用状況の概要	19
4.2	土地利用変遷の概要	27
5	調査地域の災害履歴概要	33
5.1	災害履歴概説	33
5.2	災害履歴詳説	35
6	調査成果図の見方・使い方	39
6.1	地形分類図	39
6.2	土地利用分類図	42
6.3	災害履歴図	42
6.4	成果図面の使い方	43
7	引用資料及び参考文献	45
7.1	引用資料	45
7.2	参考文献	47

資料

災害年表

はじめに

国土交通省国土政策局では、国土調査の一環として、全国の都道府県と協力して「土地分類基本調査」を実施し、5万分の1地形図を単位に、土地の自然的条件（地形、表層地質、土壌）等について調査した結果を、調査図及び調査簿として整備・提供してきました。

近年、集中豪雨や大地震の多発により、毎年のように水害や地盤災害が発生していますが、これらの災害の中には、土地本来の自然条件を無視した開発や利用に起因するものもあり、土地の安全性に対する関心が高まっています。

このため、平成22年度から新たな土地分類基本調査として、地域ごとの土地の改変履歴や本来の自然地形、過去からの土地利用変遷状況、自然災害の履歴等に関する情報を総合的に整備し、土地の安全性に関連する自然条件等の情報を、誰もが容易に把握・利用できる土地分類基本調査（土地履歴調査）に着手しました。

この「大阪東北部」図幅の調査成果は、近畿圏地区の土地分類基本調査（土地履歴調査）の1年目の成果として、平成24年度に実施した調査の結果をとりまとめたものです。本調査成果については、行政関係者や研究者等の専門家だけでなく、学校教育・生涯学習・地域の活動等に取り組む団体や住民の方々、居住地域の地形状況を知りたい方、新たに土地の取引をされようとする方々、不動産の仲介・開発等に関係する企業の方々、その他地域の自然環境、土地利用、災害等に関心を持つ方々等に、幅広く利用していただきたいと考えています。

最後に、調査の実施にあたり終始ご指導をいただいた地区調査委員会の皆様をはじめ、ご協力をいただいた関係行政機関等の方々に深く感謝申し上げます。

平成25年3月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

1 調査の概要

1.1 調査の目的

本調査は、自然災害等に対する土地の安全性に関連して、土地本来の自然条件等の情報を誰もが容易に把握・活用できるように、過去からの土地の状況の変遷に関する情報を整備するとともに、各行政機関が保有する災害履歴情報等を幅広く集約し、総合的な地図情報として分かりやすく提供することにより、災害等にも配慮した土地取引、災害時の被害軽減、被災しにくい土地利用への転換を促すなど、安全・安心な生活環境の実現を図ることを目的とする。

1.2 調査方法及び成果の概要

これまでの土地分類基本調査の調査項目に加え、土地の開発等により不明となった土地本来の自然地形や改変履歴等を明らかにするとともに、過去からの土地利用変遷情報を整備し、災害履歴情報を編集するため、主に次の方法により以下の土地状況変遷及び災害履歴情報からなる調査成果を作成した。

調査成果図は、概ね縮尺5万分1の精度で編集し、同縮尺の地形図を背景図として地図画像（PDF ファイル）を作成した。

(1) 調査方法

土地状況変遷情報は、5万分の1都道府県土地分類基本調査成果や国土地理院作成の土地条件図等既存の地形分類図、明治以降に作成された旧版地図、昭和20年頃の米軍撮影空中写真、最新の空中写真等を活用して作成した。

災害履歴情報は、地方公共団体や関係行政機関等が調査した水害、地震災害等の現地調査図等の資料より編集した。

(2) 本調査による調査成果

① 土地状況変遷情報

i. 自然地形分類図

土地本来の自然地形である山地・丘陵地、台地、氾濫原低地、自然堤防、旧河道、湿地、三角州・海岸低地等に分類した図である。なお、現況の人工改変地にあっては改変前の自然地形を復元し分類している。

ii. 人工地形分類図

人工改変地を埋立地、盛土地、切り盛り造成地等に分類した図である。なお、本調査成果図では、人工地形及び自然地形を重ねて「人工地形及び自然地形分類図」にまとめて作成している。

iii. 土地利用分類図（2時期分）

明治・大正期（現在から概ね120年前）と昭和40年代（同概ね50年前）の2時期の土地利用状況を復元し分類した図である。

② 災害履歴情報

i. 災害履歴図

浸水状況、地震被害等の既存資料図を基に、被害分布等の図にとりまとめて編集したものである。

ii. 災害年表・災害関連情報

年表形式の災害記録、災害に関する文献情報等にとりまとめたものである。

③ 調査説明書

調査成果図等の利用の参考とするため、本説明書を作成している。

④ 調査成果図 GIS データ

各調査成果図の GIS データを作成している。

1.3 調査実施体制

(1) 地区調査委員会（敬称略、順不同）

委員長

海津 正倫 奈良大学 文学部 教授（名古屋大学 名誉教授）

委員

（学識経験者）

加藤 茂弘 兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員

高田 将志 奈良女子大学大学院 人文科学系 教授

三田村 宗樹 大阪市立大学大学院 理学研究科 教授

（関係府県・政令市）

奈良県 地域振興部 地域政策課

京都府 農林水産部 農村振興課

大阪府 都市整備部 総合計画課

兵庫県 県土整備部 まちづくり局 都市政策課

大阪市 計画調整局 開発調整部

堺市 危機管理室

神戸市 危機管理室

(2) 実施機関

① 計画機関

国土交通省 国土政策局 国土情報課

② 受託機関

地形分類調査・土地利用履歴分類調査

アジア航測株式会社

災害履歴調査

北海道地図株式会社

実施管理

株式会社 パスコ

2 調査地域の概要

2.1 地域の位置

本調査の対象地域（以下「本図幅」という。）は、国土交通省国土地理院発行5万分の1地形図の「大阪東北部」の全域、北緯 $34^{\circ} 40' \sim 50'$ 、東経 $135^{\circ} 30' \sim 45'$ （座標は日本測地系[※]）、京都府南部、大阪府北東部、奈良県北西部にまたがる面積約 423km^2 の範囲である。図 2-1 に本図幅の位置図を示す。

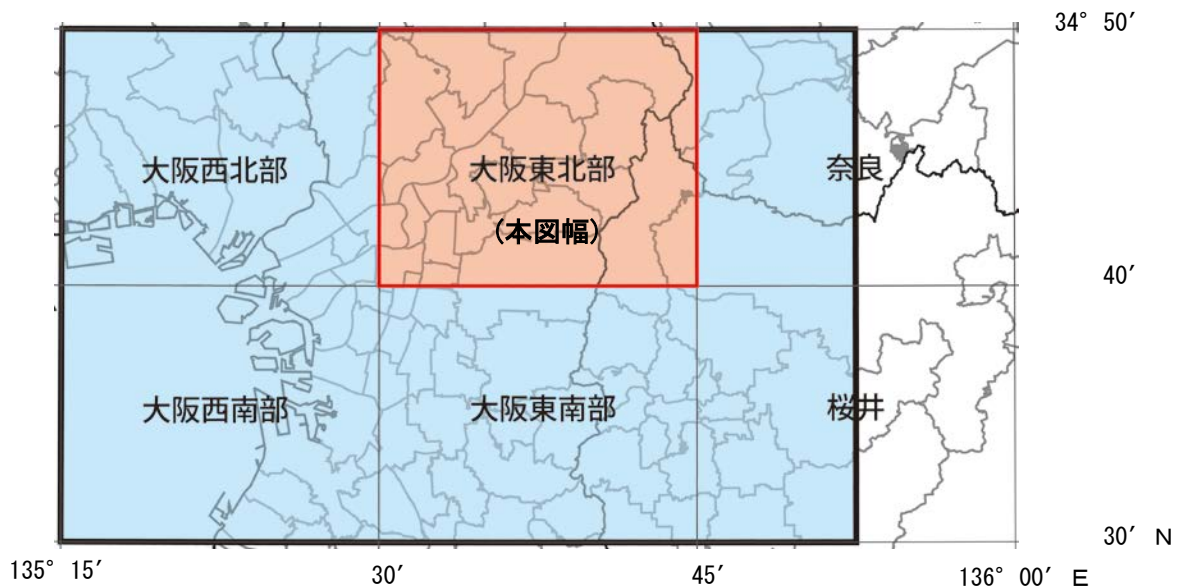


図 2-1 調査位置図

2.2 地域の行政概要

本図幅に関係する市区町村は、京都府の2市1町（八幡市、京田辺市、相楽郡精華町）、大阪府の15市（大阪市、豊中市、吹田市、高槻市、守口市、枚方市、茨木市、寝屋川市、大東市、箕面市、門真市、摂津市、東大阪市、四条畷市、交野市）、奈良県の2市（奈良市、生駒市）である（図 2-2、表 2-1）。

[※]世界測地系（日本測地系 2000）では、 $34^{\circ} 40' 11.7'' \sim 34^{\circ} 50' 11.7'' N$ 、 $135^{\circ} 29' 49.9'' \sim 135^{\circ} 44' 49.8'' E$ の範囲。

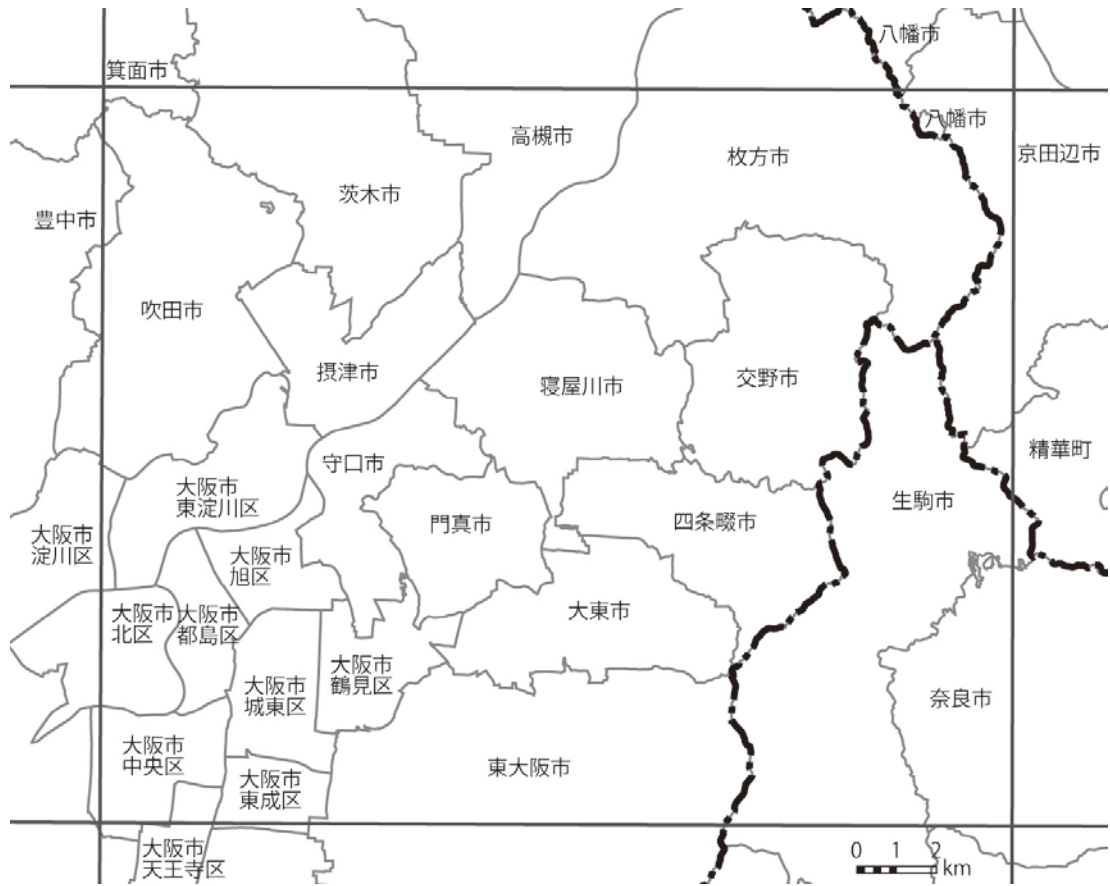


图 2-2 關係市区町村

表 2-1 関係市町村（面積、人口、世帯数）

	図幅内面積	行政面積	行政区域内世帯数	同 人口総数
	ha	ha	世帯	人
京都府	1,197	9,297	70,712	179,419
八幡市	52	2,437	29,316	73,785
京田辺市	1,071	4,294	28,868	69,607
相楽郡精華町	74	2,566	12,528	36,027
大阪府	35,579	64,526	2,039,518	4,547,843
大阪市	6,239	8,858	649,803	1,259,341
都島区	608	605	50,868	103,878
西区	5	520	49,577	86,743
天王寺区	71	480	36,146	72,187
東淀川区	1,328	1,325	93,428	177,064
東成区	321	455	39,569	80,530
旭区	632	630	43,954	91,514
城東区	838	842	76,666	165,361
淀川区	190	*1,264	92,535	172,694
鶴見区	817	816	46,031	111,684
北区	659	1,033	68,660	114,657
中央区	770	888	52,369	83,029
豊中市	186	*3,638	169,155	391,536
吹田市	3,362	3,611	157,948	360,194
高槻市	1,808	10,531	146,939	355,543
守口市	1,272	1,273	65,044	145,376
枚方市	5,083	6,508	166,141	406,931
茨木市	2,690	7,652	114,056	277,341
寝屋川市	2,470	2,473	100,412	238,628
大東市	1,828	1,872	52,311	125,564
箕面市	238	4,784	55,099	132,614
門真市	1,230	1,228	57,552	128,276
摂津市	1,487	1,488	35,866	84,485
東大阪市	3,261	6,181	218,613	507,616
四条畷市	1,870	1,874	21,887	57,262
交野市	2,555	2,555	28,692	77,136
奈良県	5,546	33,002	203,824	483,953
奈良市	1,329	27,684	156,058	364,498
生駒市	4,217	5,318	47,766	119,455
計	42,320	106,825	2,314,054	5,211,215

1. 図幅内面積は、本調査における図上計測値。

2. 行政面積は国土地理院「平成 24 年全国都道府県市区町村面積調」（平成 24 年 10 月 1 日現在）による。

*印は、境界未定のため総務省「全国市町村要覧平成 24 年版」記載の便宜上の概算数値を参考値とした。

3. 人口、世帯数は平成 22 年国勢調査人口集計結果を元に各県で算出された推計値（平成 24 年 10 月 1 日現在）である。

2.3 地域特性

(1) 沿革

本図幅は、西部がかつての摂津国、中部がかつての河内国、北東部がかつての山城国、北西部がかつての大和国に属しており、明治4（1871）年廃藩置県により、大阪府、堺県、京都府、奈良県がそれぞれ設置された。このうち、堺県は、明治9（1876）年に奈良県を合併後、明治14（1881）年大阪府に合併され、廃止された。また、奈良県は、明治9（1876）年に当時の堺県に合併されたが、明治20（1887）年に大阪府より再度分離され、現在の大阪府、奈良県の形となった。

本図幅南西部は、大坂城築城後城下町が整備され、大坂冬の陣・夏の陣で大きな被害を受けたものの、その後城下町の復興が図られ、江戸時代には「天下の台所」と呼ばれるほど商業が盛んな街として栄え、現在もその名残を残している。

また、大阪は古くから水運交通の要所でもあり、本図幅内を北東から南西にかけて流れる淀川は、京都と瀬戸内海さらには外海とを結ぶ重要な交通・運輸軸であった。さらに、江戸時代には商業都市大阪と古都京都を結ぶための京街道が淀川左岸の堤防上に整備され、淀川とともに交通の大動脈としての役割を果たしてきた。また、淀川右岸には、古くから京都と山陽・九州地方を結ぶ山陽道が通り、江戸時代には東海道の延長線上の脇街道である西国街道として整備された。明治期以降は、淀川両岸で大阪と京都を結ぶ鉄道整備が進み、淀川右岸では明治9（1876）～明治10（1877）年にかけて現在のJR東海道本線が、大正後期から昭和初期にかけて現在の阪急京都本線がそれぞれ開業し、淀川左岸では明治43（1910）年に現在の京阪本線が開業した。現在では、それぞれの鉄道沿線での宅地化が進むとともに、駅周辺には大型商業施設の立地も進み、大阪の衛星都市として発展を続けている。

これに対し、本図幅中南部は大阪東部に隣接し、立地的には恵まれた地域であったが、江戸時代の大和川流路付け替え以前は大和川の氾濫原としてたびたび洪水に襲われ、大和川流路付け替え以降も低湿地が広く分布していたため、農業用地としての利用の方が適した地域であった。また、本地域の鉄道路線も、現在のJR片町線が明治28（1895）～明治31（1898）年にかけての比較的早い時期に整備されたが、後発の京阪本線や近鉄奈良線などに比べスピードやサービス面で劣っていたため、沿線での宅地開発は他路線沿線よりも遅れ、高度経済成長期まで待つこととなった。しかし、現在ではJR東西線に乗り入れ、梅田や神戸方面と直接結ばれたことにより、利便性が格段に向上するとともに、京阪奈丘陵に整備中の関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）と大阪、京都・奈良方面を結ぶ路線として重要性が高まり、今後発展が期待される地域となっている。

(2) 気候

大阪の気候を大阪地方気象台の平年値（表2-2）からみると、年降水量は1,342.8mmで、月降水量は3～10月にかけて100mm/月を超え、梅雨期の6、7月と秋霖期の9月にはそれぞれ160mm/月を超えている。月降水量の極小は12月の43.0mm/月で、12月～2月の降雨は40～70mm/月で推移している。年平均気温は15.6℃、最寒月（1月）の日最低気温の月平均は0.5℃、最暖月（8月）の日最高気温の月平均は33.2℃となり、

瀬戸内海式気候に属する温暖な気候となっている。

風速は3、4月に極大となるが、月ごとの変動は大きくない。風向は、年間では北東の頻度が最も高いが、8月には南東の風が卓越し、夏場の高温の一因となっていると考えられる。また、年間日照時間は1,856.4時間で、1～2月に少なく120h/月を少し越える程度となっているが、夏季の8月に極大(202.6h/月)となり、200h/時を超えている。

表 2-2 大阪の気候表 (1981～2010 年の平年値)

要素	降水量	気温			風向・風速		日照時間
	(mm)	(°C)			(m/s)		(時間)
	合計	平均	最高	最低	平均	最多風向	合計
統計期間	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1987 ～2010
資料年数	30	30	30	30	30	30	24
1月	47.1	4.4	8.8	0.5	1.7	西南西	123.2
2月	64.1	4.9	9.6	0.8	1.8	西南西	120.5
3月	111.1	8.2	13.3	3.6	2.0	北東	152.8
4月	102.9	14.0	19.7	8.7	2.0	北東	180.1
5月	148.9	18.7	24.4	13.7	1.8	北東	181.8
6月	195.5	22.6	27.7	18.5	1.7	北東	139.4
7月	174.8	26.5	31.4	22.8	1.6	西南西	160.6
8月	118.0	27.8	33.2	23.7	1.8	南東	202.6
9月	163.1	23.7	28.8	19.9	1.8	北東	153.3
10月	115.9	17.6	22.8	13.3	1.6	北東	156.0
11月	68.6	11.9	16.9	7.5	1.5	北東	139.1
12月	43.0	6.8	11.6	2.7	1.6	西南西	134.1
年	1,342.8	15.6	20.7	11.3	1.8	北東	1,856.4

「日本気候表(気象庁,2011)」による大阪地方気象台の平年値。

統計期間は1981～2010年の30年間。但し日照時間は、1987～2010年の24年間。

(3) 地形及び地質の概要

本図幅の地域は、中央構造線を底辺とし、大阪湾・琵琶湖・伊勢湾を含む三角形の地域(近畿三角帯)の南西部に位置し、南北方向に延びる地塊運動の軸が平行に配列している。本図幅では、図幅中央部から東部にかけてその特徴が顕著にみられ、大阪平野と生駒山地との境部分や生駒山地から本図幅東隣の奈良盆地へと至る丘陵地を削る谷地形に、南北方向の軸が形成されている。また、図幅南西部の上町台地にも南北軸の一端を見ることができる。

本図幅東部を南北に連なる生駒山地は、小起伏から中起伏の山地であるが、大阪平野と境する西斜面は急傾斜の斜面が連続している。生駒山地の北縁及び東側には、開析の進んだ丘陵地が広がり、樹枝状の谷が複雑に入り組んでいる。また、図幅北西部にも丘

丘陵地がみられ、開析が進んだ緩い斜面が多い。これらの丘陵地は、傾斜の小さいならかな斜面が多いことから、現在では宅地開発等により原地形をとどめていないところも多く、また、近年では大阪都市圏の拡大による都市化の進展により図幅南東部の丘陵地において急速に開発が進んでいる。本図幅中部の広い面積を占める低地部は、大阪平野の北東部にあたり、淀川及び旧大和川による氾濫原低地が広がり、特に淀川左岸から南部の大和川にかけては全体に標高も低く傾斜も緩やかなことから大きな湿地帯が点在している。

地質的にみると、生駒山地には領家花崗岩が広く分布しているが、風化が著しくマサ土化している。また、丘陵地には、大阪層群と呼ばれる未固結の堆積物が広く分布し、その厚さは丘陵地では200～300mで、下半分は非海成の礫・砂・粘土層から、上半分は、非海成の砂礫層と海成粘土の互層からなる。低地は、未固結堆積物の沖積層に覆われ、下部は砂とシルト質粘土、中部は暗青灰色海成粘土、上部は砂で構成されている。

(5万分の1土地分類基本調査「大阪東北部」説明書による)。

3 調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係

本調査では土地条件図などの既存資料や空中写真判読などに基づき、自然地形分類図と人工地形分類図を作成した。

自然地形分類図については、現在、改変済みの範囲についても、終戦直後の米軍写真(1/40,000)や明治・大正期の旧版地形図などからもととの地形を復元・図化している。また、人工地形については低地での宅地開発による盛土地、丘陵地などでの大規模改変地(人工平坦地)、人工平坦地での旧谷地点の位置、宅地開発などによる切土地といった改変された地点を、新旧の空中写真や地形図の比較判読の上、抽出・図化した。

3.1 地形概説

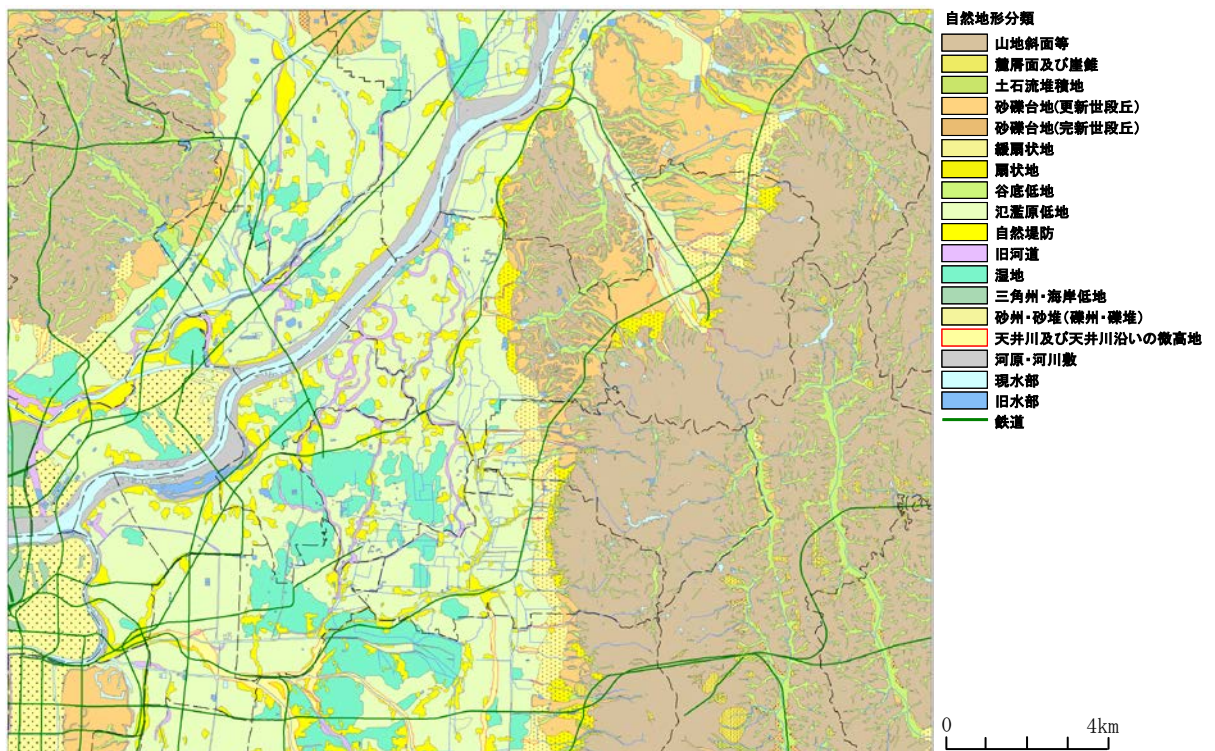


図 3-1 大阪東北部地域の自然地形分類図

本図幅は大阪平野の東北部にあたり、自然地形は山地・丘陵地・台地・低地から構成されている。西半は淀川や寝屋川などといった河川によって形成された低地、東半は生駒山地を中心とする山地・丘陵地で、東西で地形に大きな違いのある自然地形をしている(図 3-1)。

山地は本図幅の東南のみに見られ、山地東側は丘陵地・台地を経て低地へと標高を下げる。しかし西側斜面には断層が分布し、断層崖で低地に接する。北西部には本図幅西側(本図幅外)の山地から広がる丘陵地があり、低地へと標高を下げる。それらの山地・丘陵地の間を淀川と寝屋川の河川沿いに形成された低地が南北に広がっている。本図幅の山地は主に領家花崗岩を基岩としているが、第三紀末から第四紀はじめの大阪層群による堆積岩層が見られる地区があり、主に湖沼性・河成の粘土・シルト・砂・礫層と複数の海成粘土層、火山灰層から構成される。本図幅南部にある山頂付近は浸食されにく

い塩基性岩石の一種が見られる。

丘陵地は本図幅の北西部と東部に広がる。東部の丘陵地は本図幅の山地から、北西部の丘陵地は本図幅西部（本図幅外）の山地から連なっており、いずれも大阪層群によって構成されている。本図幅に含まれる丘陵地は標高が 100m 程度で安定性が高く、人工改変が容易なため、大規模な住宅地に改変され、自然地形がわからなくなっているところがある。

本図幅の台地は、山地北部に山地・丘陵地に連なる形で広がる。大阪層群を主として構成されているが、山地の影響を受け、台地頂上部に花崗岩由来の地層が見られる。淀川支川の穂谷川や黒田川などの河川の影響を受けて開析が進んでいる。

低地は淀川と寝屋川の河川沿いに広がり、淀川の下流域では三角州を形成している。本図幅内の低地は 1,500 年ほど前までは深野池や新開池と呼ばれる古代湖があり、比高が低く、また低地内を流れる河川も多いため、湿地帯が多く見られる。大阪市や寝屋川市、摂津市などの都市圏として住宅が多く広がっているが、比高が低いため過去に水害が多発している。

表 3-1 は、本図幅における市町村ごとに自然地形の面積を集計した結果である。

表 3-1 調査地域内の市区町村別地形分類面積

区分	京都府										大阪府									
	八幡市	京田辺市	相模郡精華町	大原市鶴島区	大原市西区	大原市天王寺区	大原市東淀川区	大原市東成区	大原市旭区	大原市成東区	大原市淀川区	大原市鶴島区	大原市北区	大原市中央区	豊中市	吹田市	高槻市			
丘陵地・山地	山地斜面等	0.45	8.82	0.62	-	-	0.07	-	-	-	-	-	-	0.20	1.31	16.90	0.04			
	麓斜面及び灌漑	-	0.11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.01	0.12	-			
	土石流堆積地	-	0.00	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
	山地・丘陵地 計	0.45	8.93	0.62	-	-	0.07	-	-	-	-	-	-	0.20	1.32	17.02	0.04			
	砂礫台地(更新世段丘)	-	0.03	0.35	-	-	0.35	-	-	-	-	-	-	2.65	-	1.18	0.97			
	砂礫台地(更新世段丘)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.02	-			
	台地 計	-	0.03	0.35	-	-	0.35	-	-	-	-	-	-	2.65	-	1.19	0.97			
	棚田	-	0.02	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.95	-			
	扇状地	-	0.03	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.03	-			
	谷底低地	0.06	1.61	0.11	-	-	0.10	-	-	-	-	-	-	0.02	0.50	5.62	0.12			
低地	河川低地	-	-	-	3.73	-	3.14	2.82	3.51	6.80	4.15	-	0.78	-	-	3.64	10.25			
	河川低地	-	-	-	0.89	-	1.10	0.17	0.74	0.45	0.16	0.73	-	0.18	-	0.88	0.68			
	自然堤防	-	-	-	0.15	0.00	0.43	0.06	0.06	0.07	0.09	0.12	-	0.12	-	0.44	0.12			
	旧河運	-	-	-	0.24	-	1.36	0.01	0.00	-	0.03	2.63	-	-	-	1.67	1.43			
	湿地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.01	-	-	-	-	-	-			
	三角州・海岸低地	-	0.01	-	-	0.01	0.03	-	-	-	0.27	-	0.90	0.00	-	-	-			
	砂州・砂堆(河川・湖沼)	-	0.05	-	-	0.05	4.27	-	-	0.67	0.23	0.30	4.87	3.27	-	0.84	-			
	天井川及び茨井川沿いの灌漑地	-	-	-	-	-	0.96	-	1.11	-	-	-	0.22	-	-	0.19	-			
	河原・河川敷	-	0.47	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.02	2.42			
	低地 計	0.06	1.68	0.11	5.48	0.05	0.29	11.28	3.16	5.42	7.99	1.80	7.92	4.38	0.50	14.47	15.02			
水部	取水部	0.01	0.08	0.01	0.57	-	1.79	0.05	0.45	0.33	0.10	0.51	0.47	0.03	0.71	2.00	0.05			
	旧水部	-	-	-	0.02	-	0.21	-	0.45	0.06	-	0.06	0.09	-	0.00	0.22	0.05			
	水部 計	0.01	0.08	0.01	0.59	-	2.00	0.05	0.90	0.39	0.10	0.25	0.60	0.47	0.04	2.22	0.05			
	合計	0.52	10.71	0.74	6.08	0.05	0.71	13.28	3.21	6.32	8.38	1.90	8.17	7.70	1.86	33.62	18.08			

区分	奈良県										合計			
	守口市	枚方市	茨木市	豊原川市	大東市	箕面市	門真市	摂津市	東大原市	四條郡市	交野市	奈良市	生駒市	総計
丘陵地	-	18.54	4.02	3.84	5.25	0.90	-	-	6.54	12.75	13.75	10.16	30.29	134.42
山地	-	0.30	0.14	-	0.02	0.01	-	-	0.12	0.03	0.18	0.04	1.75	2.82
谷地	-	0.02	-	-	0.25	-	-	-	0.17	0.08	-	-	0.45	0.97
河川低地	-	18.86	4.15	3.84	5.51	0.81	-	-	6.83	12.86	13.83	10.20	32.49	138.21
河川低地	-	11.72	2.09	2.38	0.19	0.81	-	0.60	1.26	1.05	3.85	0.15	0.55	29.81
河川低地	-	-	0.12	0.01	-	0.08	-	-	-	-	0.00	0.10	0.50	0.82
河川低地	-	11.72	2.21	2.38	0.19	0.88	-	0.60	1.26	1.05	3.85	0.25	1.05	30.63
河川低地	-	1.03	-	0.36	1.08	-	-	-	1.64	1.07	1.62	0.11	0.05	7.91
河川低地	-	0.25	-	0.87	0.26	-	-	-	1.06	0.13	1.06	-	-	3.70
河川低地	-	7.75	1.67	1.71	0.61	0.55	-	0.37	0.88	1.65	1.83	2.66	8.13	35.64
河川低地	5.98	7.24	13.64	11.50	8.17	-	6.45	8.47	9.24	1.27	1.80	-	-	112.84
河川低地	1.57	0.91	1.72	1.39	1.16	-	1.20	1.32	2.66	0.13	0.05	-	-	18.11
河川低地	0.72	0.02	0.38	0.82	0.09	-	0.93	0.51	0.17	0.00	0.03	-	-	5.31
河川低地	2.78	0.02	1.62	0.24	0.75	-	3.51	1.11	7.02	0.07	-	-	-	24.48
河川低地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.95
河川低地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	19.57
河川低地	-	0.74	0.05	0.29	0.07	-	-	-	1.96	0.18	1.14	-	-	5.60
河川低地	0.81	1.03	0.08	0.65	-	-	-	0.89	-	-	-	-	-	8.88
河川低地	11.86	18.99	19.17	17.63	12.19	0.55	12.08	12.66	24.12	4.49	7.52	2.77	8.17	238.00
河川低地	0.62	0.98	1.05	0.44	0.35	0.04	0.10	1.32	0.84	0.25	0.20	0.06	0.40	13.46
河川低地	0.23	0.29	0.33	0.21	0.05	0.00	0.12	0.29	0.06	0.05	0.05	0.01	0.06	2.90
河川低地	0.85	1.27	1.37	0.65	0.39	0.04	0.22	1.61	0.40	0.30	0.25	0.08	0.45	16.36
河川低地	12.72	50.83	26.90	24.70	18.28	2.38	12.30	14.87	32.61	18.70	25.55	13.29	42.17	423.20

自然地形及び人工地形分類図の図上計測による

3.2 地形細説

本図幅における山地・丘陵地などの地形地域区分は、10万分の1土地分類調査「大阪府」(国土庁、1976)および20万分の1土地分類調査「奈良県」(経済企画庁、1973)や5万分の1土地分類基本調査(地形分類図)「大阪西北部(大阪府)、大阪東北部(大阪府)」(大阪府、1978)、「大阪東北部 大阪東南部 奈良(いずれも奈良県)」(奈良県、1983)、その他の文献などを参考に、全域で統一した区分と呼称を採用した(図3-2)。

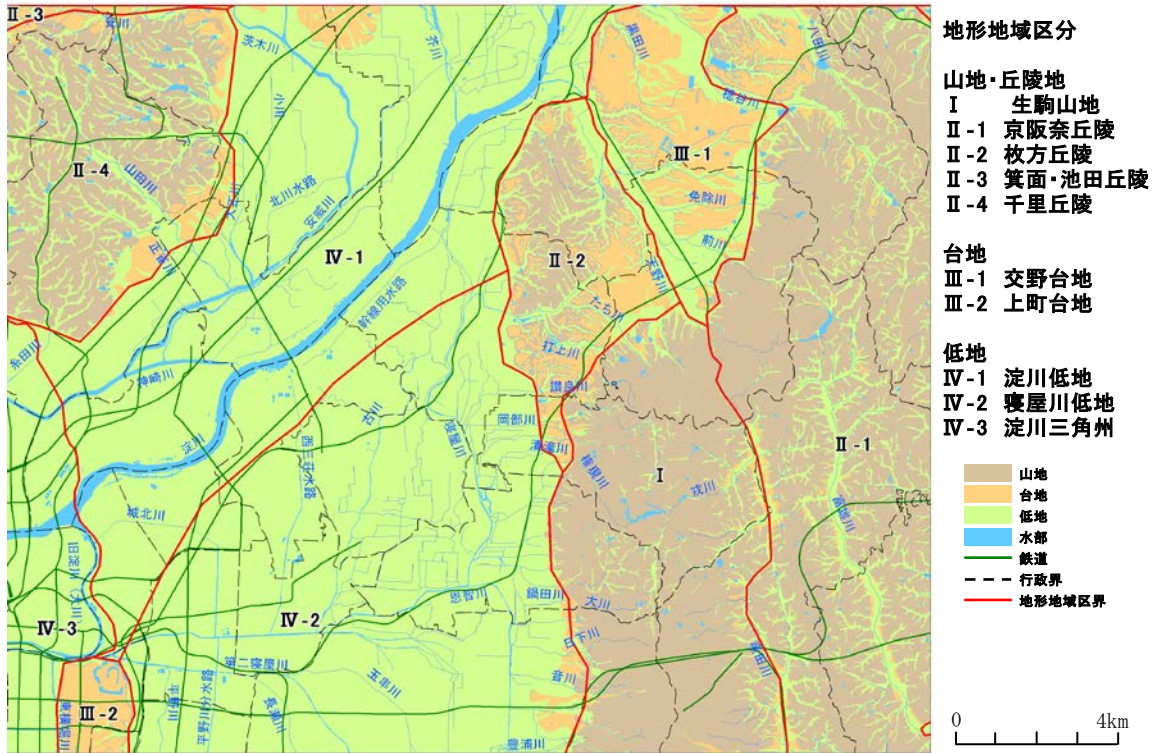


図 3-2 本図幅の地形地域区分

(1) 山地

生駒山地は大阪府と奈良県の県境に位置し、山地中央の生駒山(642m)を山頂とし、山頂部以外は500m以下の低い山地である。山地帯は南部が和歌山の吉野川まで達しているが、中央部にある大和川によって分割されており、生駒山地を指すのは北端からこの大和川までの間である。大和川以南は金剛山地になる。本山地の範囲は大和川より北側の南北約30km、幅約5kmで、本図幅には山頂部を含んだ北半部が含まれている。北部は次第に緩やかになり枚方丘陵に移行する。山地西部の斜面は生駒断層帯が南北に分布し(中央防災会議、2008)、急崖が発達した傾動地塊となって低地に接するが、東部は緩傾斜で、盆地へと移行する。第三紀の火山岩や堆積岩を含むが主に花崗岩で構成される。本図幅では北部の台地、扇状地を山地北限、大和川支川竜田川沿いの谷底低地を京阪奈丘陵との境とし、低地に接する台地までを生駒山地とした。

(2) 丘陵地

京阪奈丘陵は京都・大阪・奈良の3府県にわたって広がる標高200~400m程度の丘陵地で、主に大阪層群によって形成されており、京阪奈丘陵に見られる大阪層群は北東から南西にかけて撓曲や断層によって複雑に変形している。礫・砂・シルト・粘土層から構成されており、層厚の厚い箇所もある。また生駒山地に近い部分では基岩が、領家花崗岩の黒雲母花崗岩などを主体とする。大部分の地区が宅地を主とした人工改変地となっており、住宅地や道路などが多く確認できる。

枚方（ひらかた）丘陵は生駒山地に接する丘陵地であり、丘陵地は淀川支川の打上川やたち川などによって分断されている。最高でも標高80m、平均50m程度の安定した丘陵地で、ほとんどすべてが大阪層群から構成されている。平坦部に段丘層（中位段丘）が発達し定高性が高いため、人工改変を受け宅地などとして利用されている。本図幅では淀川支川天野川を交野台地との境とし、低地、山地に接する台地面までを枚方丘陵とした。

箕面（みのお）・池田丘陵は複数の丘陵地系の複合となっており、東部は箕面市から池田市にかけて広がる扇状地、箕面市から安威川に至る間に広がる北摂山地山麓部やそれに伴う丘陵地から構成されているが、本図幅には東辺の一部分のみが含まれている。大阪層群と段丘の堆積層から構成されている。本図幅では箕（みの）川沿いの谷底低地を千里丘陵との境とした。

千里丘陵は箕面・池田丘陵から連なり低地に囲まれた丘陵地である。丘陵の標高は30~100m程度で、北から南へと標高を下げる。丘陵地は淀川支川の山田川などにより開析が進み小支谷が複雑に発達し、丘陵地頂部から谷底低地までの側壁斜面が25~30°の傾斜になっている地点がある。大阪層群は緩傾斜に堆積しており、土砂地盤の箇所では人工改変が盛んに行われている。大阪市内との地理的關係から開発が活発に行われたため、現在ではかつての自然地形はほとんど見られず、大規模な人工改変地の代表的な地域となっている。本図幅では低地に接する山地・台地までを千里丘陵としている。

(3) 台地

交野（かたの）台地は枚方丘陵に連なる海岸段丘であり、南東部が標高約50m、北西部が標高約20mと南東から北西に向かって緩やかに傾斜している。主に砂礫層と大阪層群の海成の砂質粘土層から構成されており、台地面上には生駒山地を南北に分布する生駒断層帯（交野断層）（中央防災会議、2008）から供給されたと考えられる花崗岩由来の砂礫による扇状地性堆積物や土石流堆積物が見られる地区がある。また交野断層以外にも台地の中央に断層（長尾断層）があり、地形面が食い違う断層変位地形を示している。本図幅では天野川を淀川支川の西限とし、淀川支川穂谷川の左岸と京阪奈丘陵に接する扇状地群までを交野台地とした。

(4) 低地・盆地

淀川低地は大阪平野の北部を流れる淀川沿いに発達した沖積低地で、淀川からの堆積物によって覆われた氾濫原低地である。東を交野台地と枚方丘陵、西を千里丘

陵で囲まれ、南部は寝屋川低地に接している。南東部は淀川三角州へ接続して大阪湾に連なる。淀川の三川合流地点の下流域では、デルタ性の砂州・砂堆が形成されている。吹田市域では、この堆積のために淀川が南に折れ曲がるような形に曲流している地形が見られる(図 3-3)。自然堤防は一部に規模の広いものが見られるものの、数はあまり多くなく発達が小さい。自然堤防の比高は0.5~1m程度あり、低湿地内の微高地となっているので、古くからある集落は洪水を避けて自然堤防上に立地している。明治期までは農業地としての利用が主であったが、現在は住宅地などの利用が主であり、盛土された地区が広く見られる。

寝屋川低地は淀川低地と本図幅南側(本図幅外)の旧大和川につくられた低地との間にあり、寝屋川と寝屋川に合流する岡部川や古川などの支川によって形成された沖積低地で低湿な地域となっている。沖積層のほか、泥炭層が発達している。低地の大部分が標高0~2mと低平で、生駒山麓まで20kmにわたり感潮区間とされている。排水経路が寝屋川の本流のみであり、構成する沖積層の地質は暗褐色の粘土または粘土混じりの砂、有機物などの軟弱な地盤を示すものが多い。寝屋川低地内で盛土などの人工改変の行われた地点では地下水の汲み上げによる地盤沈下が発生している。本図幅内の寝屋川低地は縄文海進のあった約5,000年前は海であったが、後に海岸線沿いに上町台地が形成されたことで約2,000年前には河内湖と呼ばれる淡水湖になり、後にそこが埋め立てられて現在の寝屋川低地になった。そのため現在でも低湿な低地となっている。

淀川三角州は淀川低地の東南部に広がる淀川の堆積作用によって形成された三角州である。大小の砂州・砂堆が形成されたところであったが、淀川からの堆積によって陸化し海側へ拡大していった。沖積層であり、主に砂層から構成されている。現在、低湿であった地区は埋め立てが進み、都市部としての利用が主になっている。本図幅では北西部の一部が含まれている。

3.3 地形と土地の開発、保全及び利用との関係

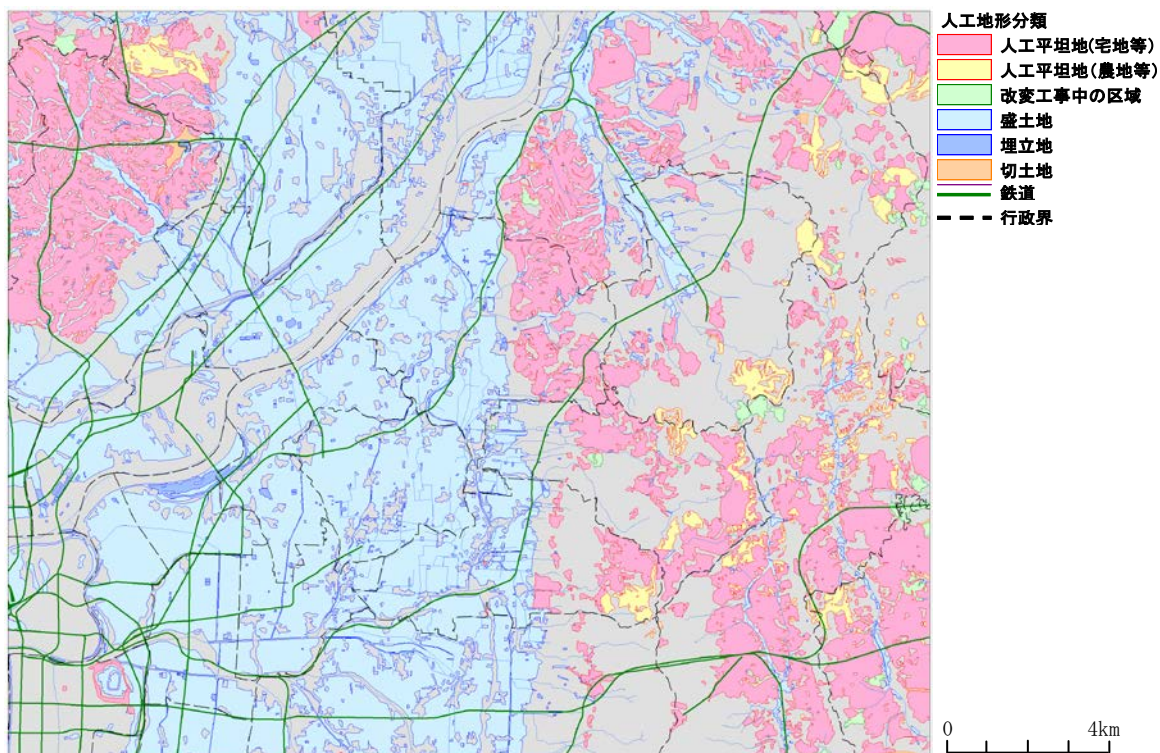


図 3-3 大阪東北部地域の人工地形分類図

本図幅における人工地形を見ると、千里丘陵や枚方丘陵などの丘陵地上にある宅地を目的とした人工平坦地と淀川沿いの低地を中心とした盛土地が目立つ(図 3-3)。淀川沿いには高槻市や枚方市・寝屋川市などの都市部があり、自然堤防や砂州・砂堆などの微高地を除いてほぼ全面が盛土になっている。盛土部分はほとんどが市街地としての利用されており、後背湿地上であっても盛土がなされ、宅地開発されている。本図幅の低地部は比高 10m 未満のものが大半を占め、淀川や寝屋川などが氾濫した場合、災害が生じる場合がある。また、大阪湾から生駒山地の間では比高の変化が小さいため、大阪湾に津波が来襲した場合には被害を受ける可能性がある。

丘陵地の人工地形は、主に宅地開発に伴う大規模造成による人工平坦地である。尾根部を切り取った土砂を、谷部に盛土として用いて平坦化した地区(谷埋め盛土)が各所に見られる。緩斜面や浅い谷を平坦化した土地になされた盛土地帯では、地震動による地盤の液状化や降雨による土砂災害などが起きる可能性がある。本図幅の千里丘陵には日本最初の大規模ニュータウンとして、1960年代から改変が行われた千里ニュータウンがある。地域改変と市街地の変遷を図 3-6 に示す。大規模な人工改変によりかつての景観が大幅に変わり、高野台・竹見台・津雲台といった新しい地名や新しい地域社会が作られている。しかし、経年変化による老朽化や少子高齢化などにより新たな問題が発生しているため、大阪府は千里ニュータウン再生計画を立て、土地利用の再検討をしている。このような大規模な改変が行われた地区では、過去の災害の実績がわからず、災害に脆弱な地域社会になりがちである。

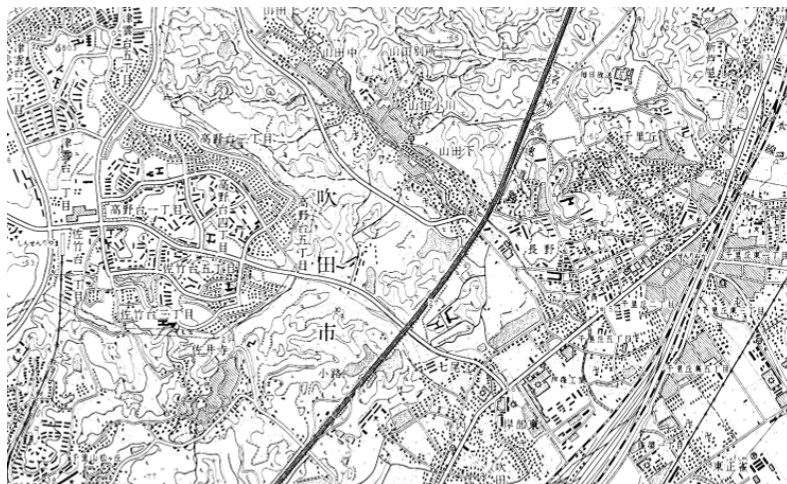


図 3-4 千里丘陵南部地域の変遷

1:25000 地形図「吹田」(上から)大正 12 年測図、昭和 42 年改測、平成 19 年更新

千里丘陵の改変の様子を示す。大正期は山田村、佐井寺の集落と東海道本線以外の大きな改変地はほぼ見られないが、昭和期には千里ニュータウンの造成が始まり、高野台・津雲台といった新地名ができ、山田村や佐井寺は吹田市に編入されている。また名神高速道路が丘陵地を北東から南西方向に貫いて建設され、関西大学などの公共施設も見られる。平成期には佐井寺周辺の開発が進み、千里山東や千里山西などといった新しい地名が見られる。

表 3-2 本図幅内の人工地形面積

(単位:km²)

分類	人工平坦地		盛土地	埋立地	切土地	変更工事中の区域	人工地形計(a)	自然地形計(b)	(a/b)%	
	宅地等	農地等								
丘陵地・山地	山地斜面等	57.52	7.59	0.12	-	0.47	2.37	68.07	134.42	50.6%
	麓斜面及び崖錐	0.66	0.22	0.06	0.00	-	0.07	1.00	2.82	35.5%
	土石流堆積地	0.28	0.02	-	-	-	0.00	0.30	0.97	30.9%
	山地・丘陵地 計	58.46	7.83	0.18	0.00	0.47	2.44	69.37	138.21	50.2%
台地	砂礫台地(更新世段丘)	6.75	0.08	0.47	0.01	0.04	0.01	7.36	29.81	24.7%
	砂礫台地(完新世段丘)	0.48	0.05	0.03	0.01	-	-	0.57	0.82	69.3%
	台地 計	7.23	0.13	0.51	0.01	0.04	0.01	7.93	30.63	25.9%
低地	緩扇状地	0.46	-	0.35	-	0.00	-	0.81	7.91	10.2%
	扇状地	0.21	0.01	0.03	-	-	-	0.25	3.70	6.8%
	谷底低地	6.40	1.31	13.91	0.00	0.18	0.45	22.24	35.64	62.4%
	氾濫原低地	0.26	-	102.00	0.02	0.00	0.00	102.28	112.84	90.6%
	自然堤防	-	-	0.11	0.00	-	-	0.11	18.11	0.6%
	旧河道	-	-	4.92	0.01	-	-	4.93	5.31	92.8%
	湿地	0.00	-	23.62	-	-	0.01	23.63	24.48	96.5%
	三角洲・海岸低地	-	-	1.94	-	-	-	1.94	1.95	99.5%
	砂州・砂堆(礫州・礫堆)	-	-	0.02	-	-	-	0.02	13.57	0.1%
	天井川及び因井川沿いの微高地	0.02	-	0.05	-	-	-	0.07	5.60	1.3%
	河原・河川敷	-	-	1.14	0.03	-	-	1.16	8.88	13.1%
	低地 計	7.35	1.32	148.09	0.06	0.18	0.46	157.46	238.00	66.2%
水部	現水部	0.03	0.01	0.26	0.30	-	0.01	0.62	13.46	4.6%
	旧水部	0.00	-	0.08	2.56	-	-	2.65	2.90	91.6%
	水部 計	0.04	0.01	0.35	2.87	-	0.01	3.27	16.36	20.0%
合計		73.07	9.29	149.12	2.94	0.69	2.91	238.02	423.20	56.2%

「自然地形及び人工地形分類図」の図上計測による

人工地形の面積を変更前の自然地形の分類別に集計したものを表 3-2 に示す。本図幅では約 56%が人工改変地であることがわかる。自然地形の中地形分類毎に改変率を見ると、山地・丘陵地で約 50%、台地で約 26%、低地で約 66%、水部で約 20%となっている。

山地・丘陵地では山地斜面の 50%以上が改変され、特に、宅地造成に伴う人工平坦地への利用が最も広く、約 58km²と山地・丘陵地での人工改変の 8 割以上を占めている。これは前述の千里丘陵の改変や生駒山・京阪奈丘陵での人工改変の広さを示している。改変工事中の地点も約 2.4 km²あるが、主に宅地造成のために改変されており、将来的に住宅地として利用されると考えられる。農地等の人工平坦地も約 7.8 km²と広い範囲で見られるがゴルフ場用地としての利用が主である。

台地でも山地・丘陵地と同様に宅地利用などの人工改変による平坦地が主な改変の要因となっているが、こちらは工業用地としての利用が主であり、交野台地などの図幅東側で見られる。また、台地上に見られる盛土は、台地上の浅い谷部分での盛土による改変を示している。

低地は主に盛土による改変がなされており、約 148 km²と広範囲で行われ低地での改変の 9 割以上にのぼる。氾濫原低地や三角洲・海岸低地を中心に盛土されており、旧河道や湿地でも改変率が 90%を超え高い値を示している。旧水部は全面積の約 92%が改変され、埋め立てが主である。旧水部の埋め立ては宅地造成や溜池の潰廃・河川流路の改修等が主な改変要因であり、このような場所は一般に地盤条件が悪い場合が多い。

3.4 地形と災害及び保全との関係

本図幅における地形条件と密接な関係を持つ自然災害には、地震による低地部の建物被害（軟弱地盤地での建物倒壊や地盤の液状化による被害など）、地形の人工改変による地盤災害（地震による造成地の崩壊、地盤変形など）、低地部の住宅地での水害被害（台風や梅雨前線などの豪雨時の河川氾濫による冠水など）があげられる。特に浸水被害では、淀川や寝屋川周辺地域などで被害が長期化する可能性のある箇所がある。

(1) 地震災害

調査地域はたびたび地震災害の影響を受けており、中でも 1891（明治 24）年の濃尾地震、1952（昭和 27）年の吉野地震、1995（平成 7）年の兵庫県南部地震など被害が大きい。兵庫県南部地震の際には、千里ニュータウンのある吹田市周辺で死者・負傷者が出ている他、全半壊した住宅が 300 棟以上あり、一部破損したものを含めると 10,000 棟を超える被害が出ている。（「吹田市耐震改修促進計画」吹田市、2008）

本図幅には千里丘陵など各地に自然地形を改変した新興の住宅地があり、地震による建物の倒壊や盛土部分の液状化などが生じる可能性がある。

(2) 水害

調査地域では 1934（昭和 9）年の室戸台風、1953（昭和 28）年の台風 13 号、1972（昭和 47）年の昭和 47 年 7 月豪雨など、降雨災害がたびたび生じている。特に本図幅は淀川が中央を流れ、旧河道や湿地帯が多く見られる低湿な低地に盛土がなされており、外水氾濫や内水氾濫の危険性が高い。1953（昭和 28）年の台風 13 号の際には寝屋川市で家屋の損壊・床上床下浸水合わせて 1,000 棟以上の被害が出ている（「寝屋川市地域防災計画」寝屋川市、2005）。

また、海拔標高が低く、大阪湾海岸からの浸水を遮る地形がほとんどない。そのため内陸部でありながら津波や高潮の被害など、降雨以外の水害についても備えておく必要がある。

4 土地利用の変遷の概要

4.1 過去の土地利用状況の概要

(1) 明治41（1908）年頃（現在から概ね100年前）の土地利用

本図幅において発行日が最も古い地形図は、国土地理院の地形図図歴リストによると、大正3（1914）年測図の5万分の1地形図「大阪東北部」¹である。この地域では、明治41（1908）～43（1910）年に2万分の1地形図も作られていた（「大阪東北部」図幅は明治41年測図、同44（1911）年発行）。2万5千分の1地形図はそれより10年以上後の大正13（1924）年頃に測図、昭和2（1927）年頃に発行された。

明治期の土地利用分類図（第1期）は、図歴リストの5万分の1地形図のうち図面状態が良好であり、修正は部分的で基本的な内容は測図時点が反映されている明治41年測図、大正3年第1回部分修正の5万分の1地形図「大阪東北部」と、明治42及3年測図、大正3年一部修正の5万分の1地形図「大阪西北部」（明治期の地形図図郭のずれを補正するため²）を選定して、地形図判読により土地利用分類を行ったものである（図4-1）。

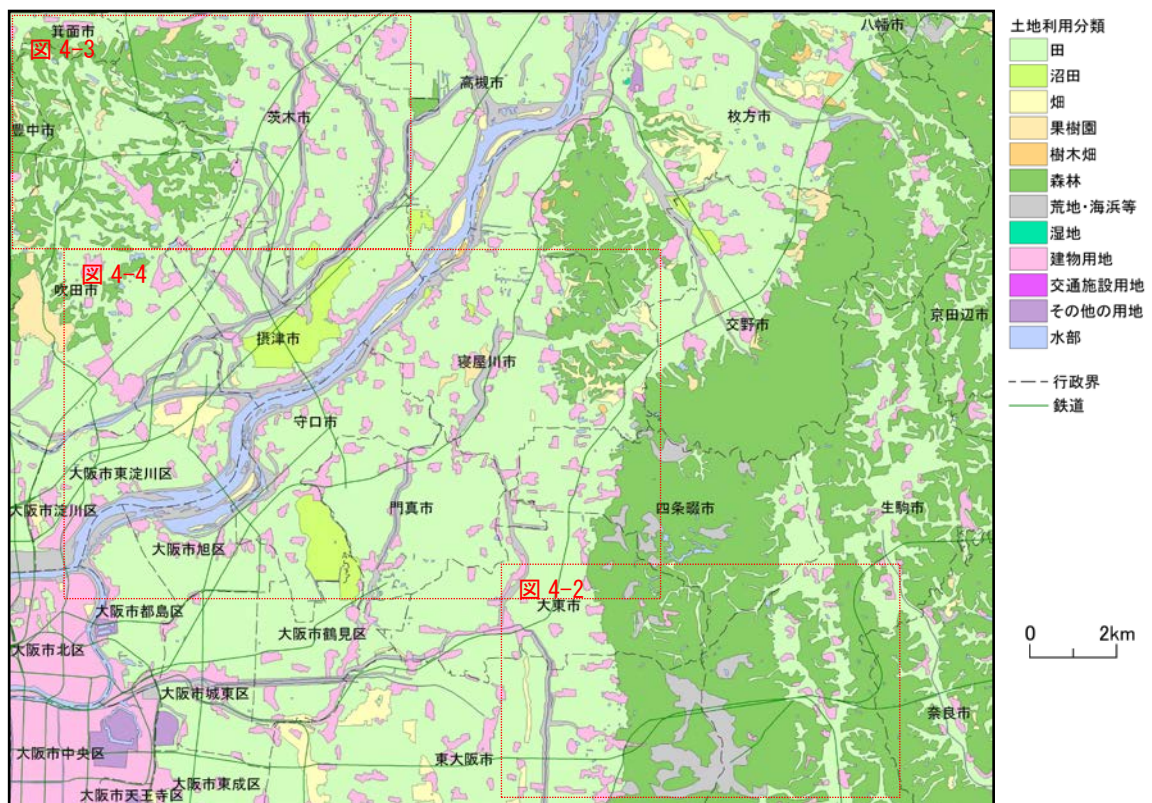


図4-1 大阪東北部における約100年前（明治41（1908）年頃）の土地利用

¹ 大正3年測図、同年発行の5万分1地形図「大阪東北部」は、入手した謄本では、擦れた不鮮明な地図描画であったため、本調査には使用しなかった。

² 明治期の地形図図郭は測量原点の違いにより、現在の地形図図郭より10秒4東側にずれている。そのため明治期の地形図を現行図に一致させるには、このずれの補正（該当範囲の隣接図からの拡充）が必要になる。

① 山地における土地利用

本図幅には、大阪府と奈良県の県境に南北に連なる**生駒山地**がある。この山地の標高は主峰生駒山が 642m のほかは大部分が 500m 未満と高くなく、また大阪の市街地に近い位置条件にあるが、僅かに狭小な谷底低地の水田と集落があるだけで、森林が広く分布している（図 4-2）。

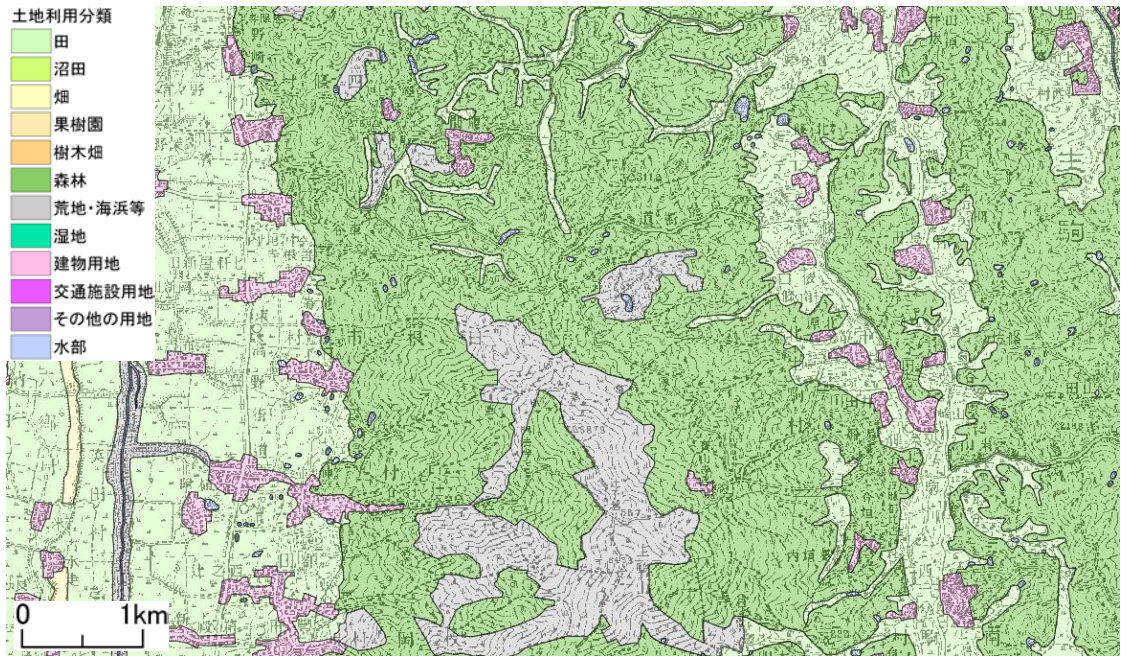


図 4-2 山地の土地利用

5 万分の 1「大阪東北部」明治 41 年測図を背景に、この図から取得した明治期の土地利用分類図を表示。

図中央の生駒山地には森林が広がるだけで、農地や集落等の土地利用がほとんど見られない。図下の生駒山には、荒地が広がっていて、明治期には地形図からレクリエーション施設など人工的な施設は確認できない。

②丘陵地・台地における土地利用

本図幅の丘陵地は、生駒山地の東側の京阪奈丘陵と北側の枚方丘陵があり、淀川の低地をはさんで北西部に千里丘陵がある。また台地は、枚方丘陵の北東に接する交野台地があり、南西部にわずかに上町台地がかかっている。京阪奈丘陵では、森林が広がっているが、富雄川など南流する河川沿いの低地部は水田として利用され、農業集落が点在する。畑と果樹園もわずかにある。枚方丘陵も森林と低地部の水田・集落という分布は変わらないが、京阪奈丘陵より標高の低い分、畑の利用が増えている。一方、千里丘陵は、他の丘陵よりも標高が低く、樹枝状に広がる低地部の面積が大きいため、田の土地利用が多くなっていて、畑も点在する。いずれの丘陵地も、農業利用のためのため池が点在する。交野台地は、標高50m未滿の土地のため、森林は少なく、水田を主として、畑・果樹園の農業的土地利用が多い。上町台地（本図幅では大阪城周辺の範囲）は、すでに明治期には全域が市街地化されていて低地と区別がつかない（図4-3）。

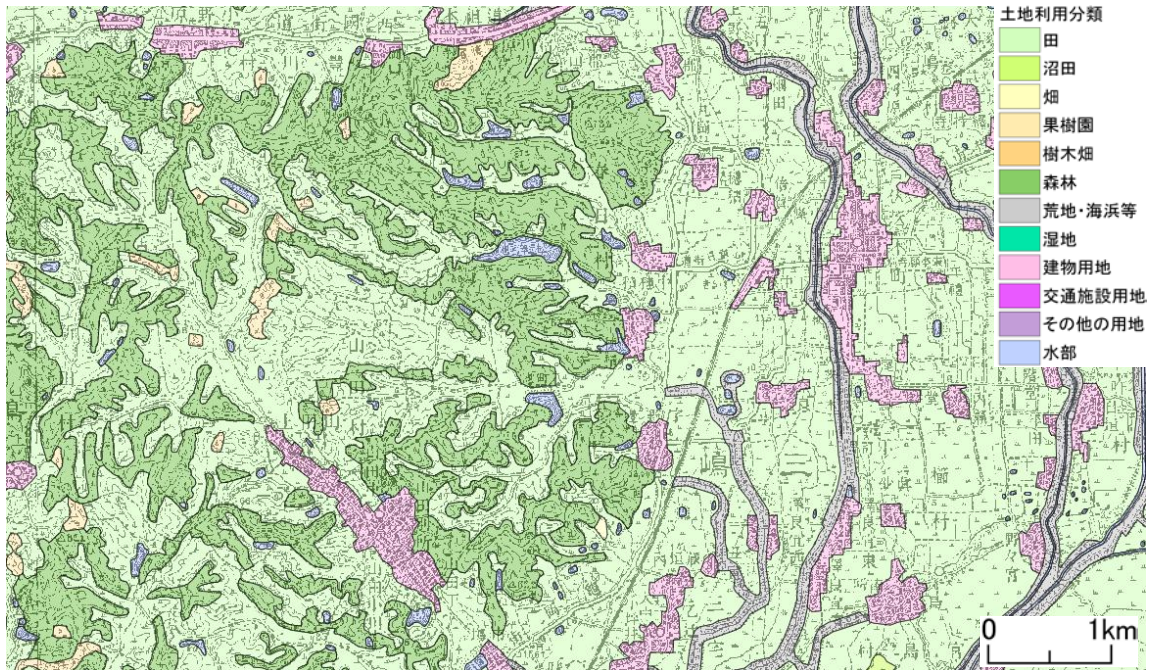


図4-3 丘陵地・台地の土地利用

5万分の1「大阪東北部」明治41年測図を背景に、この図から取得した明治期の土地利用分類図を表示。

図の千里丘陵では、樹枝状の低地に水田が広がっている。集落や畑も点在しているが、大阪の中心市街地に近い位置条件を活かした土地利用は明治期には見られない。

③低地における土地利用

本図幅の低地は、北部中央部から南西部に流れる淀川沿いの淀川低地と、その南に隣接する寝屋川低地があり、南西部はわずかに淀川下流の淀川三角州がかかっている。淀川低地、寝屋川低地では、畑が少し見られる以外は、沼田を含む水田が全面に広がっていて、集落が点在する。集落は、自然堤防の微高地や街道沿いに分布する傾向が見られるが、明治期にすでに開通していた鉄道との関連性は強くなく、淀川の水運に関係するもの以外はほとんどが農業集落であり、この範囲では農業的土地利用が主であったことを示している。淀川三角州の淀川左岸の範囲は、ほぼ全域が大阪市の市街地となっている（図 4-4）。

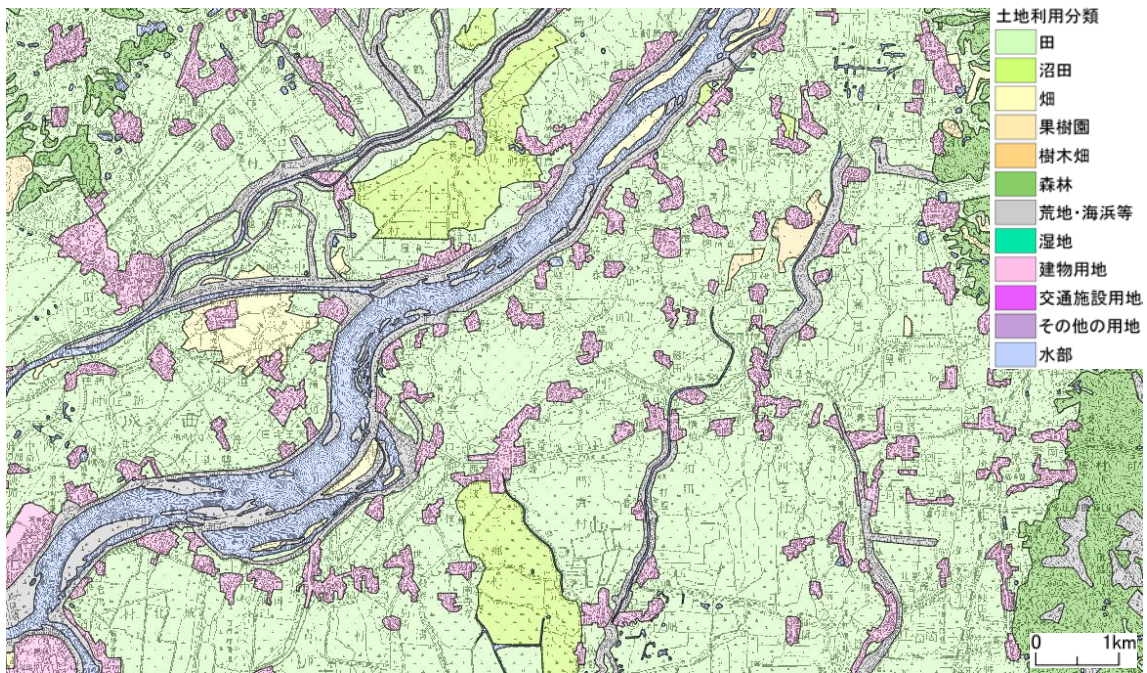


図 4-4 低地の土地利用

5万分の1「大阪東北部」明治41年測図を背景に、この図から取得した明治期の土地利用分類図を表示。中央を南西に流れる淀川沿いの低地には水田が広がっている。集落の分布には一定の傾向が見られるが、鉄道との関連性は強くない。大阪は古くから西日本の産業経済活動の中心として栄えてきたが、明治期はその大阪中心市街地に近い部分以外は農業的土地利用が主であり、後年の市街地の拡大と内陸工業地帯の発達はまだ見られない。

本図幅は、大阪の中心市街地に近接し、居住や生産活動に適した低地が広がっているが、明治期は水田を中心とした農業的土地利用が主であり、地形図からの判読では、人口の増加・流入により、工場や商業施設の進出を伴って大阪都市圏市街地が拡大していく直前の状態であると見ることができる。

(2) 昭和 43 (1968) 年頃 (現在から概ね 40 年前) の土地利用

昭和期の土地利用分類図 (第 2 期) は、昭和 43 (1968) 年に編集された 5 万分の 1 地形図「大阪東北部」を使用して、地形図判読により土地利用分類を行った (図 4-5)。昭和 44 年発行の 5 万分の 1 地形図「大阪東北部」は、同 42 年に空中写真測量により作成された 2 万 5 千分の 1 地形図を編集したものである。

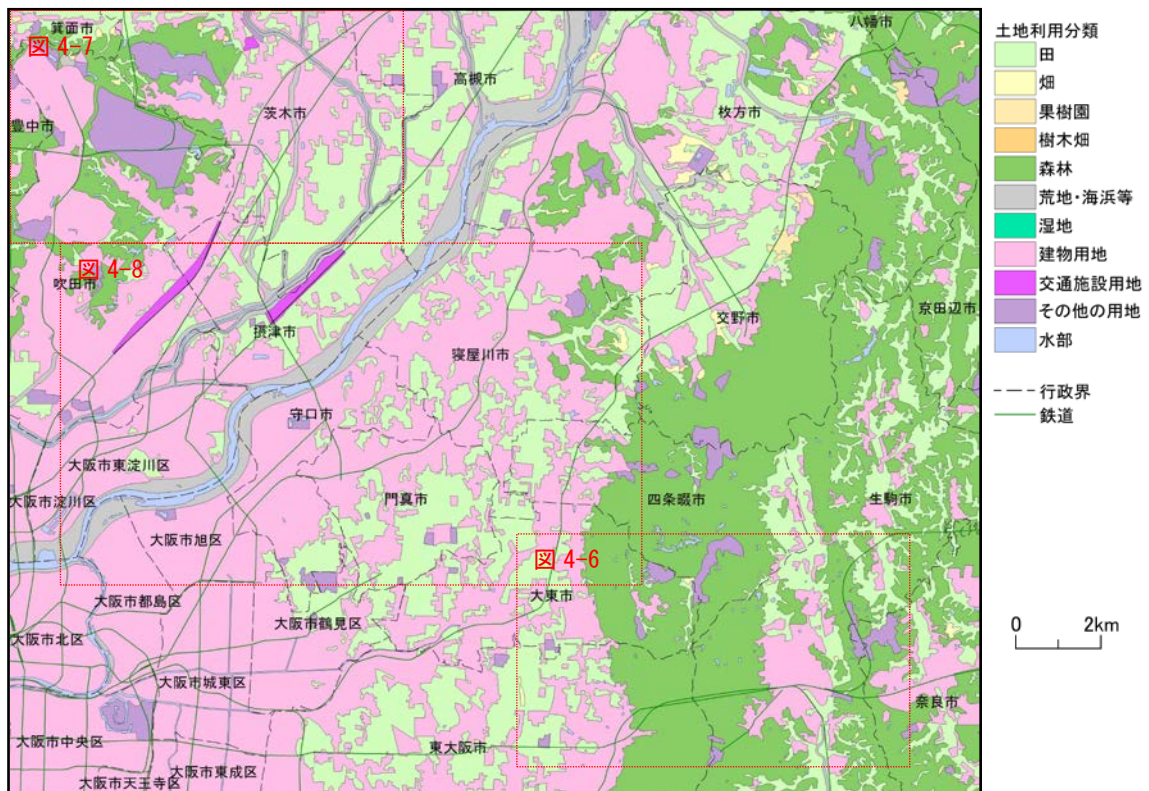


図 4-5 大阪東北部における約 40 年前 (昭和 43 (1968) 年頃) の土地利用

①山地における土地利用

生駒山地は、昭和期においても森林が拡がり、基本的な土地利用は明治期と比べて大きな変化はないが、その中で、山麓に建物用地の分布が多くなったこと、山中に「その他の用地」が増えたという変化が見られる。前者は、本図幅の低地に全面的に拡がった宅地化の影響によるものと考えられる。後者は、昭和期（昭和40年代）までに、山地を通る道路が整備されてこの範囲の交通利便性が向上し、ゴルフ場や遊園地、ハイキングコースなどのレクリエーション施設が建設されたことによるものである（図4-6）。



図 4-6 山地の土地利用

5万分の1「大阪東北部」昭和43年編集を背景に、この図から取得した昭和期の土地利用分類図を表示。生駒山地は明治期と同様に森林が拡がっているが、山麓の建物用地や、山中のその他の用地に土地利用の変化が現れている。

② 丘陵地・台地における土地利用

丘陵地・台地の土地利用は、昭和期に入って、建物用地と「その他の用地」が増加して森林が減少するという、大きな変化があった。京阪奈丘陵では、奈良市西部や生駒市南部の宅地開発が顕著であり、ゴルフ場も複数造成された。枚方丘陵、交野台地では、ほぼ全域で宅地化が進行し、森林はわずかに残るだけとなった。拡大した建物用地には、住宅以外に工場の進出も見られる。千里丘陵の変化はさらに顕著で、千里ニュータウンの建物用地、万国博覧会会場敷地やゴルフ場の「その他の用地」が一面に拡がり、森林はまだ残っているものの、田はほぼ姿を消した。このような土地利用の変化から、これまで低地に展開していた田を埋めて宅地等を造成したという地形の人工改変が顕著に進んだ地域の状況が分かる(図 4-7)。

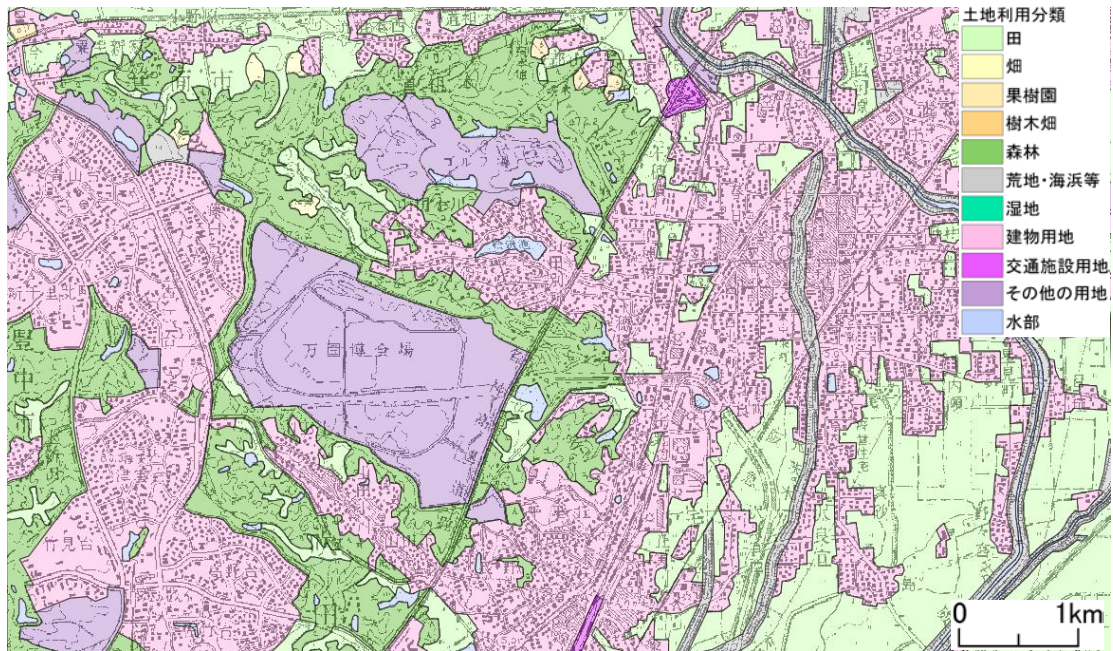


図 4-7 丘陵地・台地の土地利用

5万分の1「大阪東北部」昭和43年編集を背景に、この図から取得した昭和期の土地利用分類図を表示。丘陵地・台地では昭和期には宅地開発が活発に行われた。上図は千里丘陵で、大規模に開発された千里ニュータウンと万国博覧会場が見える。明治期の同じ範囲の図と(図 4-3)と比較すると、これらの開発が低地の田を埋めて行われたことが分かる。

③低地における土地利用

本図幅の低地では、昭和期に丘陵地以上に住宅地化が進んだ。淀川低地、寝屋川低地とも、大阪市中心から市街地が放射状に拡大し、明治期には広大な面積を占めていた水田が減少している。拡大した建物用地の分布を仔細に見ると、淀川低地の淀川右岸では、東海道本線と阪急京都線、淀川左岸では京阪本線、寝屋川低地では片町線、近鉄奈良線など、鉄道の沿線の分布が顕著で、鉄道と建物用地の関連性が考えられる。これらの建物用地は住宅以外にも、商業・業務系の利用も多く、また、大阪府東部の守口市、門真市、大東市、東大阪市では、弱電や機械などの工場も幹線道路沿いに立地している（図 4-8）。

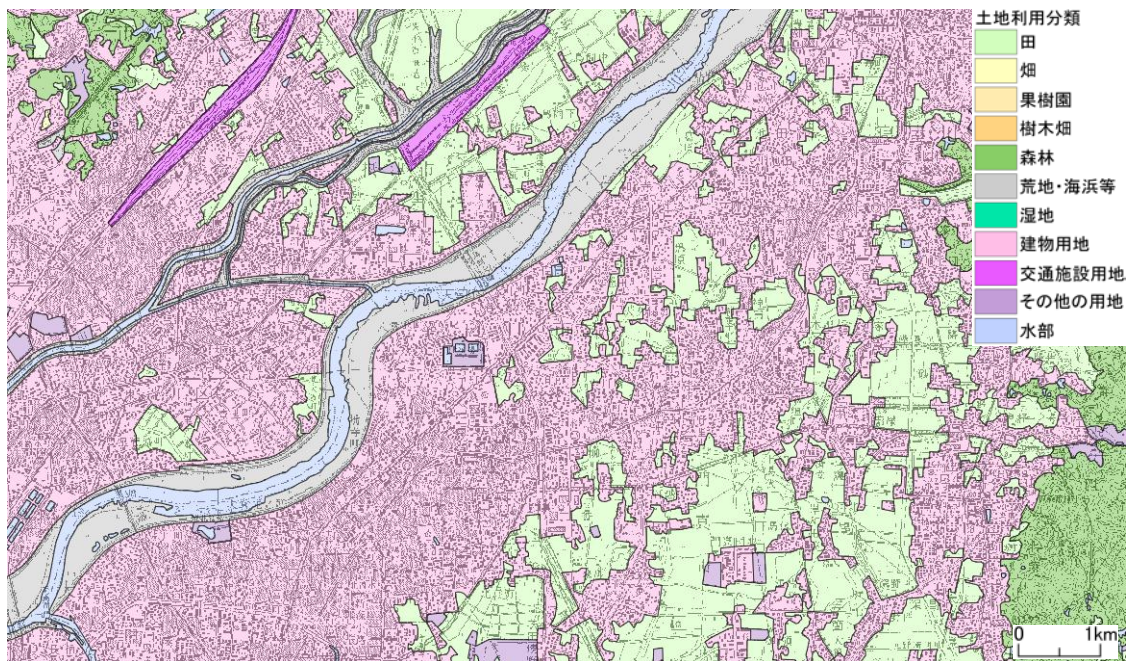


図 4-8 低地の土地利用

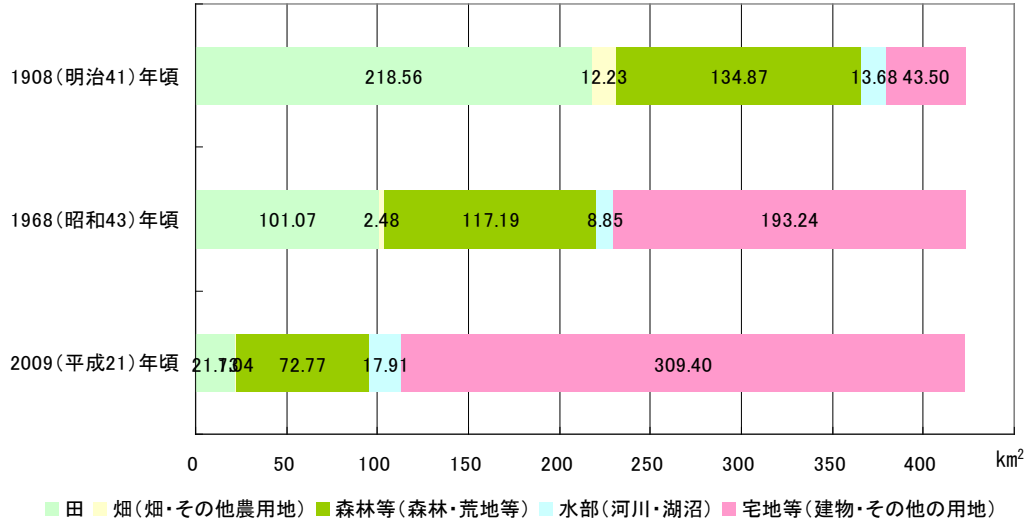
5万分の1「大阪東北部」昭和43年編集を背景に、この図から取得した昭和期の土地利用分類図を表示。低地では建物用地が大阪中心市街地から東側に大きく拡大した。明治期の同じ範囲の図（図 4-4）と比べると、水田が宅地や工場用地に転用されているのが分かる。これらの分布には鉄道や幹線道路との関連性が見られる。

本図幅における昭和期の土地利用は、大阪中心部に至近という位置条件から、丘陵地・台地・低地において水田から宅地への転換や、大規模な宅地開発が進行して大きく変化した。また、この地域では、主要な鉄道駅周辺での商業・業務系の土地利用もあり、大阪の内陸部には工場が進出した工業地帯も形成されている。昭和期にはまだ、低地に水田などの農地が若干残っていたが、これらも農地としての優位性は小さく、逆に、位置的には良好な住宅地となるところであったことから、平成期には宅地化がさらに進み、本図幅の水田は高槻市などにわずかに残されるだけとなった。

4.2 土地利用変遷の概要

(1) 土地利用面積の推移

図 4-9 と表 4-1 は現在から概ね 100 年前及び 40 年前の 2 時期の土地利用分類図と、土地利用細分メッシュデータ（国土数値情報、2009）から、調査地域における田、畑（畑・その他の農用地）、森林等（森林・荒地等）、水部（河川・湖沼）、宅地等（建物・その他の用地）の主要な土地利用 5 項目についての面積集計結果である。



土地利用分類の内訳は次の通り。（〔 〕は国土数値情報土地利用細分メッシュデータの分類）

田：田、沼田 〔田〕 畑：畑、果樹園、樹木畑 〔その他の農用地〕

森林等：森林、荒地・海浜等、湿地 〔森林、荒地、海浜〕 水部：水部（ただし海水域は除く）〔河川地及び湖沼〕

宅地等：建物用地、交通施設用地、その他の用地 〔建物用地、道路、鉄道、その他の用地、ゴルフ場〕

図 4-9 土地利用別面積の推移（1908、1968、2009 年）

表 4-1 土地利用別面積の推移（1908、1968、2009 年）

単位：km²

区分	市区町村	京都府				大阪府											
		八幡市	京田辺市	相楽郡精華町	府合計	大阪市都島区	大阪市西区	大阪市天王寺区	大阪市東淀川区	大阪市東成区	大阪市旭区	大阪市城東区	大阪市淀川区	大阪市鶴見区	大阪市北区	大阪市中央区	大阪市合計
1908 (明治41) 年頃	田	0.12	2.26	0.24	2.62	3.96	0.00	0.00	6.91	2.62	3.59	6.57	1.37	6.46	0.26	0.01	31.74
	畑(畑・その他農用地)	0.00	0.19	0.00	0.19	0.00	0.00	0.02	1.16	0.04	0.16	0.00	0.02	0.10	0.09	0.00	1.59
	森林等(森林・荒地等)	0.40	7.94	0.37	8.71	0.46	0.00	0.00	1.75	0.00	0.72	0.38	0.31	0.47	0.37	0.12	4.58
	水部(河川・湖沼)	0.00	0.04	0.00	0.05	0.61	0.01	0.00	1.72	0.00	1.18	0.09	0.05	0.10	0.75	0.48	4.99
	宅地等(建物・その他の用地)	0.00	0.27	0.13	0.39	1.05	0.05	0.69	1.73	0.55	0.68	1.32	0.15	1.03	5.12	7.07	19.43
1968 (昭和43) 年頃	田	0.02	2.08	0.15	2.25	0.00	0.00	0.00	0.76	0.00	0.11	0.00	0.00	1.73	0.00	0.00	2.61
	畑(畑・その他農用地)	△ 0.10	△ 0.19	△ 0.09	△ 0.38	△ 3.96	0.00	0.00	△ 6.15	△ 2.62	△ 3.47	△ 6.57	△ 1.37	△ 4.73	△ 0.26	△ 0.01	△ 29.13
	森林等(森林・荒地等)	0.00	0.06	0.00	0.06	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	水部(河川・湖沼)	△ 0.00	△ 0.12	0.00	△ 0.12	0.00	0.00	△ 0.02	△ 1.16	△ 0.04	△ 0.16	△ 0.00	△ 0.02	△ 0.10	△ 0.09	0.00	△ 1.59
	宅地等(建物・その他の用地)	△ 0.29	△ 7.59	△ 0.46	△ 8.33	0.61	0.00	0.00	1.94	0.00	0.64	0.00	0.34	0.00	0.17	0.00	3.71
2009 (平成21) 年頃	田	△ 0.11	△ 0.36	0.08	△ 0.38	0.16	0.00	0.00	0.19	0.00	△ 0.07	△ 0.38	0.03	△ 0.47	△ 0.20	△ 0.12	△ 0.87
	畑(畑・その他農用地)	0.00	0.04	0.01	0.05	0.28	0.00	0.00	1.33	0.07	0.44	0.26	0.07	0.09	0.64	0.31	3.49
	森林等(森林・荒地等)	△ 0.00	△ 0.00	0.00	△ 0.00	△ 0.33	△ 0.01	0.00	△ 0.39	0.07	△ 0.73	0.17	0.02	△ 0.02	△ 0.10	△ 0.18	△ 1.50
	水部(河川・湖沼)	0.21	0.93	0.13	1.27	5.18	0.71	9.24	3.14	5.11	8.11	1.49	6.35	5.77	7.38	52.52	
	宅地等(建物・その他の用地)	0.21	0.67	0.00	0.88	4.13	0.01	0.02	7.51	2.60	4.43	6.79	1.34	5.32	0.65	0.31	33.09

1. 1908 年及び 1968 年は土地利用分類図の図上計測値。2009 年は国土数値情報（土地利用細分メッシュ）による集計値。
2. 1968 年及び 2009 年の下段は、1908 年からの増減量。
3. 行政区域は 2012（平成 24）年 4 月 1 日現在の区域を当てはめた。

表 4-1(2) 土地利用別面積の推移 (1908、1968、2009 年) (続き)

単位: km²

大阪府														奈良県				合計
豊中市	吹田市	高槻市	守口市	枚方市	茨木市	寝屋川市	大東市	箕面市	門真市	摂津市	東大阪市	四条畷市	交野市	府合計	奈良市	生駒市	県合計	
0.79	20.93	11.63	9.75	23.77	17.28	15.76	10.73	1.31	10.58	9.84	19.52	5.88	8.54	229.80	3.32	14.55	17.87	218.56
0.08	1.73	0.62	0.02	3.12	0.11	1.41	0.01	0.05	0.00	0.24	2.23	0.00	0.65	13.45	0.19	0.00	0.19	12.23
0.92	8.25	2.45	0.87	19.41	6.31	4.58	5.94	0.78	0.42	2.22	7.75	11.81	15.06	95.92	9.23	25.57	34.81	134.87
0.02	0.57	2.25	0.89	1.28	0.68	0.54	0.12	0.02	0.14	1.28	0.16	0.22	0.13	18.26	0.14	0.23	0.36	13.68
0.05	2.11	1.11	1.18	3.21	2.50	2.39	1.46	0.22	1.15	1.27	2.92	0.77	1.14	60.35	0.41	1.78	2.19	43.50
0.11	2.23	8.04	2.30	14.09	8.91	7.44	5.33	0.91	5.61	5.77	11.40	3.56	6.71	87.59	2.42	11.42	13.84	101.07
△ 0.68	△ 18.71	△ 3.59	△ 7.45	△ 9.68	△ 8.38	△ 8.32	△ 5.40	△ 0.40	△ 4.98	△ 4.07	△ 8.12	△ 2.32	△ 1.84	△ 142.21	△ 0.90	△ 3.13	△ 4.03	△ 117.48
0.00	0.06	0.03	0.00	1.14	0.07	0.17	0.02	0.09	0.00	0.00	0.05	0.01	0.63	2.26	0.08	0.07	0.16	2.48
△ 0.08	△ 1.67	△ 0.59	△ 0.02	△ 1.98	△ 0.04	△ 1.24	0.01	0.04	0.00	△ 0.24	△ 2.18	0.01	△ 0.02	△ 11.19	△ 0.10	0.07	△ 0.03	△ 9.75
0.93	6.75	3.70	0.85	16.45	4.56	2.89	4.83	0.78	0.00	2.33	6.34	10.91	13.79	82.53	6.59	23.45	30.03	117.19
0.00	△ 1.50	1.25	△ 0.02	△ 2.96	△ 1.74	△ 1.69	△ 1.11	0.00	△ 0.42	0.11	△ 1.41	△ 0.90	△ 1.28	△ 13.39	△ 2.64	△ 2.13	△ 4.77	△ 17.67
0.03	0.48	1.29	0.40	0.71	0.56	0.15	0.09	0.03	0.01	0.74	0.09	0.21	0.14	11.91	0.06	0.33	0.39	8.85
0.01	△ 0.09	△ 0.96	△ 0.49	△ 0.56	△ 0.11	△ 0.39	△ 0.02	0.02	△ 0.13	△ 0.55	△ 0.07	△ 0.01	0.02	△ 6.35	△ 0.08	0.11	0.03	△ 4.83
0.80	24.08	5.01	9.16	18.39	12.78	14.03	7.99	0.57	6.68	6.02	14.70	3.99	4.26	233.49	4.14	6.86	10.99	193.24
0.75	21.97	3.89	7.98	15.18	10.27	11.64	6.53	0.35	5.53	4.75	11.78	3.23	3.12	173.14	3.73	5.08	8.81	149.73
0.00	0.04	1.96	0.00	5.29	1.23	1.09	0.24	0.07	0.30	0.26	0.16	0.94	2.33	13.93	0.65	5.73	6.38	21.73
△ 0.79	△ 20.89	△ 8.67	△ 9.75	△ 18.48	△ 16.05	△ 14.67	△ 10.49	△ 1.24	△ 10.29	△ 9.58	△ 19.36	△ 4.94	△ 6.21	△ 215.87	△ 2.67	△ 8.82	△ 11.49	△ 196.83
0.00	0.02	0.00	0.00	0.39	0.03	0.20	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.04	0.24	0.94	0.01	0.01	0.02	1.04
△ 0.08	△ 1.70	△ 0.62	△ 0.02	△ 2.72	△ 0.08	△ 1.21	△ 0.01	△ 0.04	0.00	△ 0.24	△ 2.23	0.04	△ 0.41	△ 12.51	△ 0.18	0.01	△ 0.17	△ 11.19
0.25	3.01	0.05	0.00	7.80	1.39	0.41	4.03	0.08	0.00	0.00	6.32	9.35	11.67	44.63	3.44	18.13	21.57	72.77
△ 0.67	△ 5.25	△ 2.39	△ 0.87	△ 11.61	△ 4.92	△ 4.17	△ 1.91	△ 0.69	△ 0.42	△ 2.22	△ 1.42	△ 2.46	△ 3.40	△ 51.30	△ 5.79	△ 7.44	△ 13.24	△ 62.10
0.03	0.56	3.65	1.11	1.85	1.07	0.86	0.06	0.00	0.00	2.16	0.02	0.13	0.10	23.87	0.02	0.14	0.16	17.91
0.01	△ 0.00	1.40	0.22	0.58	0.39	0.32	△ 0.06	△ 0.02	△ 0.14	0.88	△ 0.14	△ 0.10	△ 0.03	5.61	△ 0.12	△ 0.09	△ 0.21	4.23
1.58	29.96	12.44	11.60	35.48	23.18	22.13	13.92	2.22	12.00	12.43	26.01	8.22	11.18	334.42	9.17	18.10	27.26	309.40
1.53	27.85	11.32	10.42	32.27	20.68	19.73	12.46	2.00	10.84	11.16	23.08	7.46	10.04	274.07	8.76	16.32	25.08	265.89

1908 年には、**田**が最も多く約 219km²あり、次いで**森林**が約 135km²、**畑**は約 12km²と、農業的土地利用は全体の約 55%、**宅地等**は全体の約 10%の 44km²程であった。地域別では、**田**は、大阪府が約 32km²、枚方市が約 24km²、東大阪市が約 20km²と多く、茨木市、寝屋川市、生駒市、高槻市、大東市、門真市でも 10km²以上の面積があった。**森林等**は、生駒市が約 26km²、枚方市が約 19km²、交野市が約 15km²、四条畷市が約 12km²だった。**畑**は、枚方市が約 3km²と最も多く、東大阪市、吹田市、大阪府が約 2km²、寝屋川市が約 1km²であった。**宅地等**は、大阪府が約 19km²と最も多く、この地域の宅地面積の約 45%を占めていた。次いで枚方市、東大阪市、茨木市が約 3km²と多かった。

1968 年になると、**田**は約 101km²(明治期比 46.2%)と激減した。**森林等**は約 117km²(同 86.9%)と若干減少したものの、田よりも面積が大きくなった。**畑**は約 2km²(同 20.2%)と大きく減少した。一方で**宅地等**は約 193km²(同 444.2%)と大きく増加した。地域別では、**森林等**は、生駒市が約 23km²、枚方市が約 16km²、交野市が約 14km²、四条畷市が約 11km²だった。**田**、**畑**はほぼ全市町で減少し、このうち最も減少幅の大きかった大阪府の**田**は、明治期から約 29km²減少して約 3km²を残すだけとなった。10km²以上の田が残っているのは、枚方市、生駒市、東大阪市の 3 市だけとなった。**畑**は枚方市の 1km²が最も多く、他の市町はすべて 1km²未満で、大阪府は 0 になった。これに対して**宅地等**は全市町で増加し、特に増加幅の大きかった大阪府は約 53km²となり、吹田市が約 24km²、枚方市が約 18km²、東大阪市、寝屋川市、茨木市が 10km²以上となった。

昭和から平成にかけても、**田**は大きく減少して約 22km²を残すだけとなった。他にも、**森林等**が約 73km²、**畑**は約 1km²へと減少し、その分**宅地等**は昭和期の 1.6 倍、明治期の約 7 倍の約 309km²に拡大して本図幅の 73%の面積を占めるようになった。地域別では、**森林等**、**田**、**畑**はほぼ全市町で減少し、**森林等**が 10km²以上残っているのは生駒市、交野市の 2 市だけになり、**田**が 10km²以上残っている市町は無くなった。**畑**は最も多い枚方市でも約 0.4km²だけとなった。**宅地等**は明治期と比較して全市町で大幅に増加し、大阪府約 56km²、枚方市約 35km²、吹田市約 30km²、東大阪

市、茨木市、寝屋川市が20km²以上となった。これは明治期比で、大阪市で約3倍、吹田市では約14倍、枚方市は約11倍、茨木市、寝屋川市、東大阪市は約9倍に拡大したということである。

以上より、明治期から昭和期、平成期と都市化（宅地化）が大きく進行していることが分かる。

(2) 地形分類別土地利用面積の推移

図4-10と表4-2は、本図幅の明治期、昭和期、平成期の土地利用の面積を主要な自然地形分類項目ごとに集計した結果である。自然地形分類のうち水部は、現水部、旧水部であるが、水部以外の各土地利用においてこの自然地形を利用しているのは、造成によって陸地になった旧水部である。

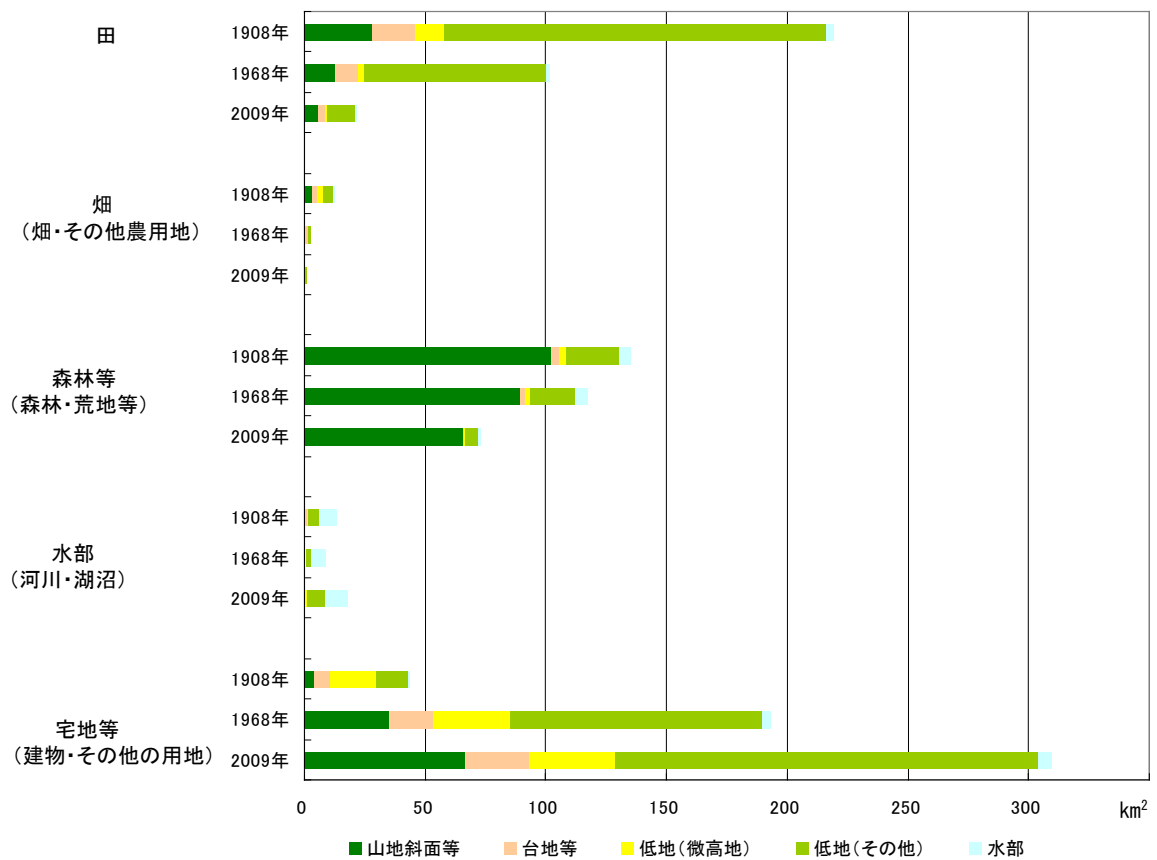


図4-10 地形分類別の土地利用面積の推移（1908、1968、2009年）

- 区分ごとの面積は、本調査成果図の自然地形分類図及び土地利用分類図（1908年、1968年）、国土数値情報の土地利用細分メッシュ（2009年）を2種類の分類で交差領域を作成し、各領域の面積を分類の組み合わせで積み上げ集計したもの。

- 地形分類の内訳は次の通り。

山地斜面等：山地斜面等、火山地斜面等、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地

台地等：岩石台地、砂礫台地、ローム台地

低地（微高地）：自然堤防、砂州・砂堆、砂丘、天井川及び天井川沿いの微高地

低地（その他）：緩扇状地、扇状地、谷底低地、氾濫原低地、三角州・海岸低地、旧河道、湿地、河原・河川敷、浜

水部：現水部、旧水部

土地利用ごとにみると、田は淀川低地や寝屋川低地の低地（その他）にあるもの

がほとんどである。台地や山地斜面にみられるものは、京阪名丘陵や千里丘陵の谷底低地にある場合と考えられる。畑は各地形分類にまんべんなく分布していた。田畑とも面積が減少しているが、田の減少のうち特に低地での減少割合が大きい。これはこの地域では、昭和期以降に宅地化が進展した際に、低地にある田がその主な土地供給源になったということであり、明治期までみられたこの地域の農業は昭和期に完全に衰退したといえることができる。

森林等は、減少しているものの、平成期でも明治期の50%以上の面積が残っている。これは、この土地利用分類に属する範囲が明治期から余り変化していない（別の土地利用に変化することが少ない）ためと考えられる。具体的には、生駒山地は平成期においても森林以外の土地利用はほとんど見られない。

宅地等は、山地斜面と低地（その他）での増加が目立つ。これは、山地斜面は京阪名丘陵や千里丘陵での、低地（その他）は淀川低地や寝屋川低地での宅地開発や市街地拡大によるものである。特に前者は、それまで農業的利用が主であった丘陵地や斜面で昭和期以降に大規模な住宅地開発が行われるなど、交通利便性のよい場所で宅地が新たに作られている。後者は、上記の通り、この地域の農業の産業としての位置付けがよく示されていると考えられる。

表 4-2 地形分類別の土地利用面積の推移（1908、1968、2009年）

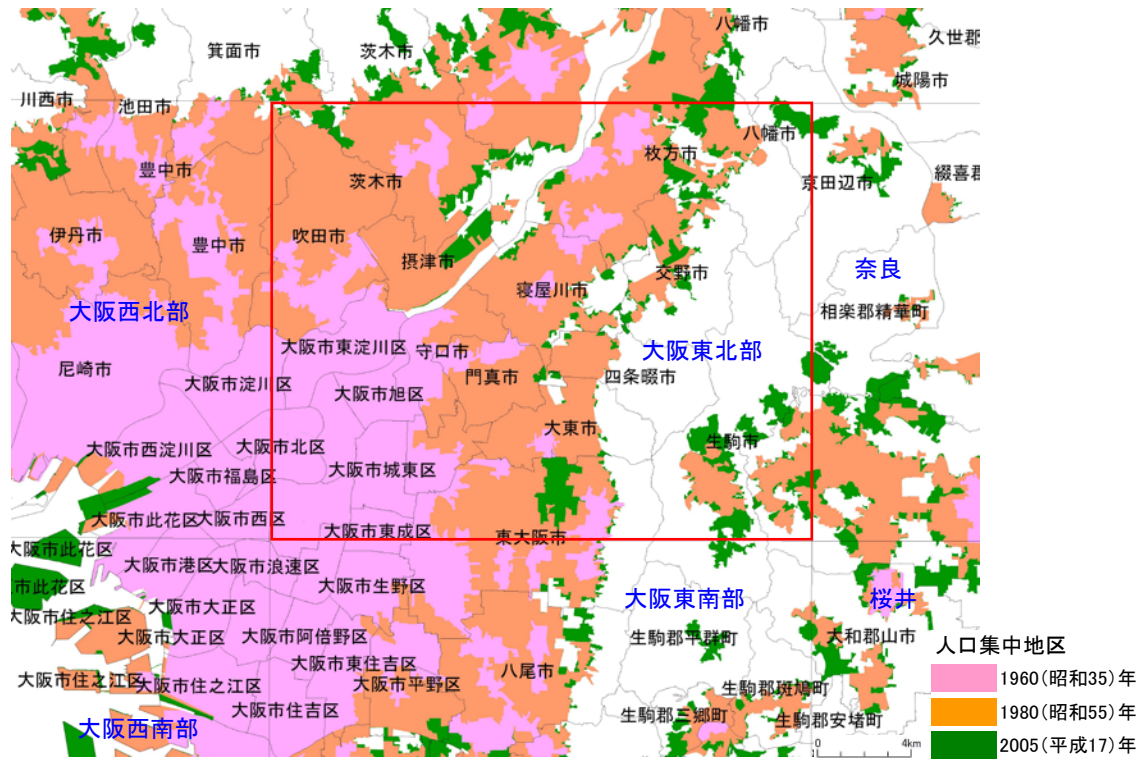
単位：km²

年代	区分	地形分類	山地斜面等	台地等	低地(微高地)	低地(その他)	水部	合計
1908(明治41)年頃	田		28.12	18.06	11.67	158.22	3.11	219.17
	畑(畑・その他農用地)		2.93	2.42	2.58	3.74	0.56	12.23
	森林等(森林・荒地等)		102.61	2.75	3.35	21.59	4.57	134.88
	水部(河川・湖沼)		0.62	0.20	0.59	5.02	7.26	13.68
	宅地等(建物・その他の用地)		3.96	7.09	19.14	12.57	0.74	43.51
1968(昭和43)年頃	田		12.68	9.52	2.75	75.53	1.14	101.63
			△ 15.43	△ 8.54	△ 8.91	△ 82.69	△ 1.96	△ 117.54
	畑(畑・その他農用地)		0.67	0.79	0.22	0.80	0.01	2.48
			△ 2.27	△ 1.64	△ 2.36	△ 2.94	△ 0.54	△ 9.75
	森林等(森林・荒地等)		89.45	1.90	1.96	18.69	5.18	117.19
			△ 13.16	△ 0.85	△ 1.39	△ 2.90	0.61	△ 17.69
2009(平成21)年頃	水部(河川・湖沼)		0.36	0.10	0.15	1.82	6.43	8.85
			△ 0.26	△ 0.11	△ 0.44	△ 3.20	△ 0.83	△ 4.83
	宅地等(建物・その他の用地)		35.08	18.23	32.24	104.30	3.46	193.30
			31.12	11.13	13.10	91.72	2.72	149.80
	田		5.66	2.99	0.45	12.36	0.28	21.73
		△ 22.46	△ 15.08	△ 11.22	△ 145.86	△ 2.82	△ 197.44	
2009(平成21)年頃	畑(畑・その他農用地)		0.34	0.19	0.08	0.41	0.02	1.04
			△ 2.60	△ 2.23	△ 2.50	△ 3.33	△ 0.54	△ 11.19
	森林等(森林・荒地・水面)		65.51	0.67	0.28	5.51	0.79	72.76
			△ 37.10	△ 2.08	△ 3.07	△ 16.08	△ 3.78	△ 62.12
	水部(河川・湖沼)		0.23	0.07	0.93	7.64	9.02	17.90
			△ 0.38	△ 0.13	0.34	2.63	1.76	4.22
2009(平成21)年頃	宅地等(建物・その他の用地)		66.47	26.60	35.57	175.17	6.12	309.93
			62.51	19.51	16.43	162.60	5.38	266.43

1. 表の区分ごとの面積は、調査結果の自然地形分類図及び土地利用分類図（1908年、1968年）、国土数値情報土地利用データ（2009年）から2種類の分類で交差領域を作成し、各領域の面積を分類の組み合わせ毎に積み上げて集計したもの。
2. 土地利用区分は、1908年、1968年は本調査の土地利用分類図、2009年は国土数値情報（土地利用細分メッシュ）による。
3. 地形分類の内訳は以下の通り。
 山地斜面等：山地斜面等、火山地斜面等、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地 台地等：砂礫台地、岩石台地、ローム台地
 低地(微高地)：自然堤防、砂州・砂堆、砂丘、天井川及び天井川沿いの微高地 低地(その他)：扇状地、緩扇状地、谷底低地、氾濫原低地、三角州・海岸低地、旧河道、湿地、河原・河川敷、浜 水部：現水部、旧水部
4. 1968年及び2009年の下段は、1908年からの増減量。

(3) 人口集中地区の変遷

図 4-11 および表 4-3 は国勢調査の人口集中地区（DID³）データから作成した、本図幅の1960（昭和35）年、1980（昭和55）年、2005（平成17）年の3時期にわたるDIDの変遷を示したものである。1960年のDIDは、大阪市以外で設定されている場所は周辺市の中心部のみで、その面積は小さかったが、1980年、2005年と大阪市から拡大するように徐々に広がり、2005年には大阪市から連続する居住可能な低地・丘陵地はほぼ大部分がDID地区となった。



国土数値情報（人口集中地区）1960、1980、2005年データから作成。図中の青字は、土地履歴調査を実施済みの5万分の1図幅名を表す。

図 4-11 調査地域周辺における人口集中地区の推移（1960、1980、2005年）

³ 人口集中地区（DID= densely inhabited district）：1960年国勢調査以降、新たに設定された統計表章地域。調査区（約50世帯）を単位として、原則として調査区の人口密度は1km²につき4000人以上あり、そのような調査区が互いに隣接して、その合計が5000人以上に達する場合に、これを一つの人口集中地区として区画する。実質的には市街地を形成する区域を表すといえる（浜、1989）。

表 4-3 地形分類別人口集中地区面積の推移

単位：km²

区域 \ 分類	山地	台地	低地(微高地)	低地(その他)	水部	合計
調査地域全域	138.24	30.53	37.33	201.14	16.23	423.46
1960年のDID	4.89	7.60	24.24	52.38	6.42	95.53
割合(%)	5.12	7.96	25.37	54.84	6.72	100.00
1980年のDID	42.99	21.58	34.63	158.35	11.16	268.72
割合(%)	16.00	8.03	12.89	58.93	4.15	100.00
2005年のDID	50.09	24.26	35.62	169.50	11.20	290.67
割合(%)	17.23	8.35	12.25	58.32	3.85	100.00

1. 自然地形分類図、国土数値情報（人口集中地区）1960、1980、2005年データより集計。
2. 地形分類の内訳は次の通り。
 - 山地：山地斜面等、火山地斜面等、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地
 - 台地：岩石台地、砂礫台地、ローム台地
 - 低地（微高地）：自然堤防、砂州・砂堆、砂丘、天井川及び天井川沿いの微高地
 - 低地（その他）：扇状地、緩扇状地、谷底低地、氾濫原低地、三角州・海岸低地、旧河道、湿地、河原・河川敷、浜
 - 水部：現水部、旧水部

1960年のDIDは、大阪市のほぼ全域と、吹田市等の周辺市の中心部（旧市街地）に設定されていて、元々合計の面積は大きかったが、その後のこの地域の都市化の動きは非常に大きく、鉄道網の発達もあって、大阪都市圏を形成する大阪市の周辺の市は人口・住宅が増加し、1980年のDIDは大阪市から連続して（途中でDIDでない場所がなく）東大阪市、大東市、寝屋川市、枚方市まで拡大した。平成に入ると、さらに宅地造成・住宅建築が進行し、2005年のDIDは1980年の範囲の周辺に拡大すると共に、新たに開発された住宅地がDIDに含まれるようになって、面積は1960年の3倍となった。この状況を地形分類図と土地利用を重ね合わせてみると、この地域の居住可能な低地・丘陵地のほとんどをDID地区が占めていることがわかる。

表4-3の地形分類別の推移を見ると、各時期とも低地（その他）の面積が多いが、1980年以降にDIDに含まれるようになった場所が割合的に山地・丘陵地で多くなっていることと、宅地に転用可能な低地が残り少なくなっている状況が読み取れる。

5 調査地域の災害履歴概要

5.1 災害履歴概説

(1) 地震

この地域に被害を及ぼす地震には、①陸域の浅いところで発生する地震、②太平洋沖合で発生する地震の2タイプが存在する（地震調査研究推進本部，2009）。

①のタイプの地震は陸域の活断層によってもたらされる地震で、1596年の慶長伏見地震（M7.1/2）や1995年の兵庫県南部地震（M7.3）などが該当する。特に兵庫県南部地震は1923年の関東地震（M7.9）以来都市部で最大の被害を及ぼした地震となった。また西日本では、東南海・東海地震の前後に内陸部で地震活動が活発化する傾向があり、東南海地震（1944年）、南海地震（1946年）から70年以上経ており、西日本で地震活動が活発化する活動期に入ったとの指摘もある。

②のタイプの地震は太平洋沖合の南海トラフ沿いで100～150年周期で発生するM8程度の巨大地震で1854年の安政東海地震（M8.4）や1944年の東南海地震（M7.9）、1946年の南海地震（M8.0）などが該当し、広い範囲に揺れや津波による被害をもたらす。

(2) 風水害

調査図幅の西北には千里丘陵、東方には生駒山地とそれに連なる交野台地・枚方丘陵が存在し、その間を淀川が西南の方向に流下し、淀川低地、淀川三角州を形成しており、淀川の三大洪水などで広範囲に浸水被害を生じている。

また淀川と南の大和川に挟まれた寝屋川沿岸の低湿地は、かつての河内湾入部にあたり、江戸時代中期まで深野池・箕輪池・新開池などの沼沢地が存在していた（国土地理院，1965）。江戸時代、1704年の大和川の付け替え工事によって、これらの地域の干拓が進み新田開発が行われた。この大和川の付け替え工事とそれに伴う干拓によって寝屋川低地の河川は洪水時の調節機能を失い、また元々の地盤が低い上に、戦前・戦後の地盤沈下の影響も加味され、内水氾濫による被害が頻発することとなった（国土交通省近畿地方整備局，2009）。

表 5-1 寝屋川流域における過去の浸水被害状況

年月日	気象要因	流域最大雨量			浸水被害			
		時間最大 (mm)	総雨量 (mm)	観測所名	面積 (ha)	床上 (世帯)	床下 (世帯)	計 (世帯)
1967/7/8~9	豪雨	55.6	215	大阪	-	12,277*	65,843*	78,120*
1972/7/12~13	梅雨前線	20.0	237.5	八尾	1,788	6,138	37,273	43,411
1972/9/15~16	台風 20 号	47.5	115.0	寝屋川工営所	1,697	8,902	52,505	61,407
1979/6/27~7/2	梅雨前線	25.0	268.5	中竹栈橋	798	1,044	12,043	13,087
1979/9/30~10/1	台風 16 号	66.0	96.0	枚方	1,035	4,045	23,691	27,736
1982/8/2~3	台風 10 号 低気圧	39.5	150.5	中竹栈橋	2,046	6,778	43,262	50,040
1989/9/2~3	低気圧	23.0	166.0	五軒堀橋	104	26	1,927	1,953
1989/9/14	秋雨前線	49.0	75.5	守口市役所	108	68	3,600	3,668
1989/9/19~20	台風 22 号	41.0	104.0	中竹栈橋	86	3	1,694	1,697

大阪府土木部 1987、大阪の気象 100 年から作成

*1967 年の浸水被害は大阪府全域の統

計

5.2 災害履歴詳説

(1) 地震

① 慶長伏見地震

慶長伏見地震は1596（慶長1）年9月5日午前0時ごろ発生した内陸型の地震である。地震の規模はM7 1/2で、有馬 - 高槻断層帯、および六甲・淡路島断層帯が活動したと考えられている（岡田，2012）。この地震によって近畿地方では京都、大阪、堺を中心として震度5～6の揺れが生じたと推定されており、堺では死者600余名、大阪では多数の家屋が倒壊し、京都では伏見城の天守閣が大破するなど600人近い圧死者が報告されている。全体では1,500人余りの死者が出たと推定されている（宇佐美，2003）。

② 平成7年（1995年）兵庫県南部地震

1995（平成7）年1月17日午前5時46分に発生した兵庫県南部地震は兵庫県南部から淡路島にかけて伸びる六甲・淡路島断層帯によって引き起こされた。この地震による震度は神戸海洋気象台と洲本測候所で震度6が記録されたが、地震後の現地調査で神戸市から宝塚市にかけて震度7の地域があったことが確認された（地震調査研究推進本部，2009）。

この地震によって死者・行方不明者6,437名、負傷者43,792名、住宅全壊104,906棟、半壊144,274棟（平成18年5月19日消防庁確定）の甚大な被害を生じ戦後50年で最大の被害となった。また地震の発生が早朝であり、都市部において非常に激しい揺れに見舞われたため、建物の倒壊と火災による死者が多かった。

大阪府内での被害は、死者31名、負傷者3,589名、住家全壊895棟、半壊7,232棟となっている（大阪府）。京都府での被害は、死者1名、負傷者49名、住家全壊3棟、半壊6棟（京都府）、また奈良県内では、負傷者12名、住家一部損壊15棟など相対的に被害は軽微だった（奈良県の気象百年，1997）。

本図幅関係地域においては、大阪市で死者18名、重軽傷者357名、住家全壊194棟、半壊2,148棟、一部損壊17,089棟の被害のほかライフラインで大きな影響が出た（大阪市）。枚方市で軽傷者4名、住家被害4棟の被害があった（枚方市）。

(2) 風水害

① 昭和36（1961）年9月降雨・高潮（第2室戸台風）

9月8日にマーシャル諸島付近で発生した第2室戸台風は西北西に進み、12日～13日にかけて中心気圧が900hPa未満の猛烈な強さの台風となった。進路を北寄りに変え、14日は沖縄の東海上を通過し、16日9時すぎ室戸岬西方に上陸した。13時過ぎには兵庫県尼崎市と西宮市の間に再上陸し、18時には能登半島東部を經由して日本海に出た。室戸岬付近で中心気圧930hPa、最大風速66.7m/s、最大瞬間風速84.5m/s以上を記録するなど強い勢力を保ったまま上陸した。

暴風や高潮による被害が大きく、大阪市では高潮により市西部から中心部にかけて31平方kmが浸水した（気象庁）。

大阪府では死者32名、住家全壊3,386棟、半壊21,356棟、住家浸水床上61,488

棟、床下 59,729 棟（大阪府地域防災計画）、兵庫県では死者 10 名、住家浸水床上 8,973 棟、床下 36,944 棟（神戸地方気象台）の被害があった。

本図幅においては、寝屋川市で負傷者 20 名、住家全壊 48 棟、半壊 226 棟（寝屋川市地域防災計画、また大阪市で死者 6 名、住家全壊 297 棟、半壊 1,429 棟、流出 31 棟、住家浸水床上 51,491 棟、床下 54,027 棟（大阪市地域防災計画）の被害があった。

②昭和 42（1967）年 7 月降雨（昭和 42 年 7 月豪雨）

本州の南岸に停滞していた梅雨前線に、大風 7 号から変わった熱帯低気圧から暖湿気流が流れ込み、前線の活動が活発化したため、九州地方から関東地方に多量の雨をもたらした。

大阪では 7 月 8 日～9 日の総雨量が 150.1mm、9 日には日降水量 83.3mm を記録し（気象庁）、死者・行方不明者 20 名、住家浸水床上 12,277 棟、床下 65,843 棟の被害が生じた（大阪の気象 100 年）。淀川・猪名川では警戒水位を上回り、大阪府北部の安威川、勝尾寺川、箕面川、千里川、南部の石津川、津田川、樫井川等の中小河川は増水し、堤防の決壊、氾濫、橋梁流出の大きな被害が発生した（淀川河川事務所ホームページより）。

本図幅においては、枚方市で住家浸水床上 152 棟、床下 1,636 棟、道路・堤防の決壊約 50 箇所の被害があった（枚方市地域防災計画）。

③昭和 47（1972）年 7 月降雨（昭和 47 年 7 月豪雨）

7 月 3 日～6 日にかけて、黄海から日本海北部に伸びた前線を伴った低気圧に暖湿気流が流れ込み、九州と四国に局地的な大雨をもたらした。9 日～13 日にかけては前線が南下し、本州南岸から四国、九州付近に停滞した。日本南海上には台風 6,7,8 号があり、この影響で前線が活発化し、西日本で 400～600mm、山間部で 1,000mm 前後の大雨となった。7/3～15 日の期間降水量は大阪で 331.0mm、神戸で 327.5mm を記録した。また淀川河川事務所の枚方出張所では警戒水位（4.50m）に対して最高水位は 3.99m に達したに過ぎず、大阪市内では大きな被害はなかった（淀川河川事務所ホームページより）。大阪府全域では住家浸水床上 6,186 棟、床下 40,346 棟の被害が発生し（大阪府地域防災計画）、寝屋川流域では各地で内水氾濫を生じ、総雨量 237.5mm、住家浸水床上 6,138 棟、床下 37,273 棟の被害があった（大阪府都市整備部、2012）。

本図幅においては、寝屋川低地の寝屋川市、守口市、門真市、大東市、東大阪市（大阪府）などで広く浸水被害があった。

④昭和 57（1982）年 8 月降雨（台風 10 号）

7 月 24 日に日本の南東海上で発生した台風 10 号は、8 月 1 日に紀伊半島の南海上を北上、2 日 0 時渥美半島に上陸し、翌早朝には富山湾から日本海に進んで温帯低気圧に変わった。この台風の影響で近畿地方では 7 月 31 日夜半から大雨となった（気象庁ホームページより）。大阪府では西除川および今井戸川（堺市、松原市）

で浸水被害が発生、奈良県では葛下川（王寺町）で浸水被害があった（国土交通省近畿地方整備局，2009）。

本図幅においては、寝屋川低地の東大和市、東大阪市（大阪府）で浸水被害があった。

⑤平成7（1995）年7月降雨（大雨）

6月から7月にかけて梅雨前線の影響が活発化し、東北から九州の広い範囲で大雨となった。7月1日から4日にかけては前線が西日本から東日本にかけて停滞し、7月4日には大阪で日降水量117.0mm、和歌山で164.5mmを記録するなど、近畿地方で100～150mmの降雨を記録している（気象庁）。

大和川流域では、2,513戸の建物被害と314haの浸水被害を生じ（国土交通省近畿地方整備局，2009）、本図幅においては、寝屋川低地の東大和市、東大阪市（大阪府）で浸水被害があった。

⑥平成9（1997）年8月降雨（豪雨）

8月3日～13日の間、前線が北海道から九州にかけて北上、南下を繰り返し、台風11号が6日～7日にかけて沖縄地方を通過し、8日に九州の西海上を北上した。前線活動の活発化、台風、低気圧の影響により全国各地で大雨となった。7日の降雨は大阪で51.5mm、枚方では日降水量58mmであった（気象庁）。

本図幅内においては、淀川低地の寝屋川市で住家浸水床上137棟、床下3,711棟などの被害があった（寝屋川市地域防災計画）。

⑦平成11（1999）年8月降雨（豪雨）

東海沖に進んだ熱帯低気圧が、8月10日21時過ぎに紀伊半島に上陸し、11日2時には奈良県と京都府の境まで進み近畿地方に大雨をもたらした（国土交通省近畿地方整備局，2009）。これにより11日には奈良で日降水量126.0mmの降雨を記録している（気象庁ホームページより）。

この降雨によって竜田川（生駒市）、曾我川（三宅町）、地藏院川（大和郡山市）なので内水による浸水被害が発生し、大和川流域では435戸の建物被害と、49haの浸水被害を受けている（国土交通省近畿地方整備局，2009）。

本図幅においては、竜田川低地の生駒市谷田町（奈良県）で浸水の被害があった。

(3) 地盤沈下

大阪市の地盤沈下は昭和3年（1928年）の水準測量で指摘され、昭和9年（1934年）の室戸台風により甚大な高潮被害を生じたことによって注目されるようになった。昭和10年～昭和17年には地下水需用の増加に伴い、年間沈下量の最大値が20cmを越えた。その後戦争末期と戦後にかけては沈静化するも、昭和25年以降の経済成長とともに再び沈下が激しくなり、昭和35年頃のピーク期には年間20cm以上の年間沈下量を記録しており、昭和36年（1961年）の第2室戸台風により大きな浸水被害をもたらしている。その後地下水の採取規制などの対策によって昭和

38年（1961年）以降は鈍化し、昭和40年代後半以降は沈静化している（環境省）。

本図幅内においては、寝屋川低地の大東市や東大阪市などで100cmから150cm弱、海岸低地の大阪市では150cm以上の累積沈下量が観測されている。

6 調査成果図の見方・使い方

6.1 地形分類図

(1) 自然地形分類図

自然地形分類図は、既存の地形分類図等を参考に、空中写真、地形図等を利用して、宅地造成等により土地の人工改変が行われる前の自然地形を含め、地形の形態・形成時期・構成物質等により土地を分類した地図である（表 6-1）。

これまでの地形分類図では、現状の人工地形が優先して表示される場合があり、改変前の自然地形の詳細が把握できない等の問題を抱えていた。そのため、この調査で提供する自然地形分類図は、地形改変により不明瞭になった地形界線を明確に定めると同時に、かつて存在していた池沼や河川の状況、盛土される前の低地の地形等を分類・復元することで、現在は失われた過去の地形を読み取ることができるようにしている。土地をその成り立ちや、生い立ち、形態等により分類した地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的可能性を知ることができる。

表 6-1 自然地形分類区分

	分類	定義
山地・丘陵地	山地斜面等	山地・丘陵地の斜面や台地縁辺の斜面等をいう。海岸の磯や岩礁、離れ岩等を含む。
	麓斜面及び崖錐	斜面の下方に生じた岩屑または風化土からなる堆積地形。
	土石流堆積地	岩塊、泥土等が水を含んで急速に移動、堆積して生じた地形で、溪床または谷の出口にあるもの。
台地	砂礫台地（更新世段丘）	更新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、表層が厚く、且つ未固結の砂礫層からなるもの。
	砂礫台地（完新世段丘）	完新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、形成時期が新しく、未固結の砂礫層からなるもの。
低地	緩扇状地	山麓部から氾濫原低地へと広がる、主として砂や礫からなる、傾斜の緩やかな扇状の堆積地域。
	扇状地	山麓部にあつて、主として砂や礫からなる、やや傾斜の急な扇状の堆積地域。
	谷底低地	山地、丘陵地、台地を刻む河川の堆積作用が及ぶ狭長な平坦地。
	氾濫原低地	扇状地と三角洲・海岸低地の中間に位置し、河川の堆積作用により形成された広く開けた平坦地で、自然堤防、旧河道または湿地を除く低地。
	自然堤防	河川により運搬されたシルト～中粒砂が、河道及び旧河道沿いに細長く堆積して形成された微高地。
	旧河道	過去の河川流路で、周囲の低地より低い帯状の凹地。
	湿地	自然堤防や、砂州等の後背に位置するため、河川の堆積作用が比較的及ばない沼沢性起源の低湿地。現況の湿地を含む。
	三角洲・海岸低地	河口における河川の堆積作用で形成された低平地。
	砂州・砂堆、礫州・礫堆	波、河流または潮流によって生じた砂または礫の堆積した微高地。
	天井川及び天井川沿いの微高地	堤防設置によって周囲の地形面より高くなった河床及びこれに沿って形成された微高地。
	河原・河川敷	現況の河原及び河川敷（低水敷・高水敷）をいい、堤内地の旧河原・旧河川敷を含む。
水部	現水部	現況が海、または河川、水路、湖沼等の水部。干潟を含む。
	旧水部	過去の海または湖沼等で、現存しないもの。
副分類	崖	長く延びる一連の急傾斜の自然斜面。
	凹地・浅い谷	細流や地下水の働きによって台地または扇状地等の表面に形成された凹地や浅い谷。

(2) 人工地形分類図

人工地形分類図は、宅地造成等に伴って地形が改変されている範囲を最近の空中写真や地形図等を利用して抽出し、土地の改変状況によって「人工平坦地」や「盛

土地」等に分類した地図である(表 6-2)。

昨今、特に都市地域では、市街地の拡大に伴って、従来の地形の多くが大きく改変されるとともに、開発から年月が経過し、最近は土地本来の自然の状況(自然地形)がわからなくなっている地域が各地で見られるようになっている。

丘陵地等で住宅団地の開発のため、切り盛り造成等により宅地整備が行われた「人工平坦地」の中には、現在ほとんど平坦な土地であっても、開発前には尾根や谷が入り組んだ起伏のある土地だったところがある。この調査では、そうした人工平坦地内について、かつて谷があった場所を、開発前の状況がわかる地形図や空中写真から調査し、「旧谷線」として表示している。

また低地では、かつて水田等に利用されていた低湿地等に土を盛って造成した「盛土地」や、池沼を埋め立てた「埋立地」等の人工地形を分類している。こうした情報を自然地形分類と組み合わせて活用することにより、土地の安全性に関する情報を得ることができる。

表 6-2 人工地形分類区分

大分類	小分類	摘要
人工平坦地 (切り盛り造成地)	宅地等	山地・丘陵地や台地等の斜面を切土または盛土により造成した平坦地や緩傾斜地のうち、主として住宅や工業団地等の造成によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	農地等	上記のうち、主に農地整備、ゴルフ場造成等によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	旧谷線	人工平坦化地内の山地・丘陵地にかつて存在した谷線。
改変工事中の区域		人工的な地形改変が進行している区域及び採石・採土場、採鉱地等及びその跡地。
盛土地		低地等に0.5m以上盛土して造成された土地、台地上の凹地・浅い谷部分の盛土地を含む。
埋立地		水部等を埋め立てして造成された土地。
切土地		山地・丘陵地や台地等の斜面を人工的に切土して生じた平坦地及び急傾斜の人工斜面。

(3) 地形分類図から見た土地の安全性

自然地形分類図及び人工地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的可能性を判断することができる。特に人工地形が分布する地域では自然地形分類を合わせて参照し、その土地の元々の地形条件を把握することにより、土地の安全性に関する詳細な情報を得ることができる。

例えば低地の盛土地は、谷底低地、氾濫原低地、旧河道・三角州・海岸低地・湿地といった、盛土施工前の地形を自然地形分類図から判断することにより、表 6-3 に示すような地震の揺れの大きさや液状化の可能性、高潮や洪水氾濫による浸水の可能性等を知ることができる。

表 6-3 地形分類と潜在的な自然災害の可能性

分類		地震に際して予想される災害	大雨・洪水に対して予想される災害		
自然地形が分布する地域	山地・丘陵地	山地斜面等	崖や急斜面の近くでは、斜面崩壊や落石の可能性はある。	急斜面等では斜面崩壊の可能性があり、上流部の地質や崩壊の状況により、豪雨時には谷沿いや谷の出口付近で土石流発生の可能性はある。	
		麓斜面及び崖錐	背後に崖や急斜面がある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	谷沿いや谷の出口付近では、上流部に崖錐や麓斜面が多数存在する場合、豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	
		土石流堆積地	傾斜のある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	
	台地	砂礫台地（更新世段丘）（完新世段丘）	台地の縁辺部の斜面では崩壊や地すべりの可能性がある。	通常は洪水時に浸水することはないが、凹地などでは浸水することがある。また、低地や近くの水路との間に十分な高さが無い台地では、洪水時に冠水することがある。逆に低地との間に高さがある台地では、縁辺部での斜面崩壊や地すべりの可能性がある。こうした地域では過去の浸水実績や土砂災害実績を知ることも有効である。	
		緩扇状地	一般的に地盤は良好だが、末端部では液状化の可能性はある。	豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上流部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性はある。	
	低地	扇状地	一般的に地盤は良好だが、末端部では液状化の可能性はある。	豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上流部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性はある。	
		谷底低地	低地の中でも堆積物の状況により地震の揺れが増幅される可能性がある。また、斜面の近くでは、斜面崩壊の危険性がある。	洪水時に冠水することもあるが、概ね排水は速やかである。斜面の近くでは、斜面崩壊の可能性はある。	
		氾濫原低地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。	河川洪水、内水氾濫の可能性はある。	
		自然堤防	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。	異常の洪水時に浸水することがあるが、周囲の氾濫原低地と比べ高く、排水も速やかである。	
		旧河道	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い地域である。	明瞭な凹地では洪水の通り道となる場合があり、排水状況も悪いため、浸水時には長く湛水することがある。	
		湿地	地震の揺れが増幅され、地盤変異の可能性はある。	盛土の状況により違いはあるが、洪水時には排水がきわめて悪く、長時間湛水する可能性がある。	
		三角洲・海岸低地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い地域である。また、津波により浸水することがある。	洪水時に湛水したり、高潮による浸水の可能性はある。	
砂州・砂堆、礫州・礫堆		地震の揺れが増幅され、砂州と砂州の間の低地では液状化の可能性はある。また、海岸沿いでは、津波の大きさによっては浸水することがある。	比高の小さい砂州・砂堆では洪水や異常の高潮等で冠水することがあるが、排水は速やかである。		
天井川及び天井川沿いの微高地		地震の揺れで天井川の堤防が崩壊、決壊等した場合、周辺の低地部への流水の可能性はある。	河川の増水による、周辺の低地部への流水の可能性はある。		
人工地形が分布する地域	山地・台地等	人工平坦地（宅地等）	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。	
		人工平坦地（農地等）	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。	
		変更工事中の区域	採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。	採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。	
	低地	盛土地	谷底低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、洪水時に浸水することがあるが、概ね排水は速やかである。
			氾濫原低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
			旧河道、湿地等の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。高い盛土地では、さらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
		埋立地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく液状化の可能性が特に高い土地である。	周囲の水面に比べ十分に盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫等により浸水する可能性がある。	
		切土地	切土斜面が半固結・未固結の場合、地震の揺れによる崩壊の可能性はある。	切土斜面が半固結・未固結の急斜面の場合、斜面崩壊の可能性はある。	
旧谷線	旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、地震の揺れが増幅され、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、異常降雨時には地盤が緩み、盛土部分が崩壊する可能性がある。			

6.2 土地利用分類図

土地利用分類図は、現在から概ね 100 年前（明治期）及び概ね 40 年前（昭和 40 年代）の 2 時期の旧版地図を判読し、地形図作成当時の土地利用を分類し、その分布状況を表示した地図である。

（第 1 期） 現在から概ね 100 年前の明治期の地形図には、当時の市街地や集落、森林・農地・河川等が詳細に描かれている。土地利用分類図では、それらを判読し、主要な土地利用ごとに色分けして表示している。

（第 2 期） わが国では、1960 年代後半から空中写真を利用した精度の高い地形図の整備が全国的に開始された。その時代の地形図から作成した土地利用分類図では、現在から概ね 40 年前の土地利用の状況を読み取ることができる。

なお、明治期、昭和期の 2 時期の土地利用分類図は、共通の凡例で分類している。そのため、現在の地形図を背景に 2 時期の土地利用分類図を見比べることにより、その都市の現在の市街地で、かつてどのような土地利用がなされていたかを知ることができる。

表 6-4 土地利用分類区分

分類	定義
田	水稲、い草などを栽培している田。季節により畑作物を栽培するものを含む。
沼田	泥が深く、ひざまでぬかるような田（この分類は明治期だけに適用）。
畑	麦・陸稲・野菜などを栽培する土地をいい、牧草地、芝地を含む。
果樹園	りんご・梨・桃・ブドウなどの果樹を栽培する土地。
樹木畑	桑、茶を栽培している土地。桐・はぜ・こうぞ・しゅろ等を栽培している畑を含む。
森林	高さ 2 m 以上の多年生植物の密生している地域。植林地においては樹高が 2 m 未満であっても森林とする。高さ 2 m 以下の竹、笹の密生している土地。
荒地・海浜等	自然の草地からなる土地及び露岩地、崩壊地、砂礫地などで植物に覆われていない土地。万年雪で覆われた土地を含む。
湿地	干上がった湖沼の跡などの排水の悪い土地で、雨期には水をたたえるところ。
建物用地	住宅や建物類の構築物、商業・業務・工業・公共・流通・通信・各種の処理施設等に利用されている土地。
交通施設用地	鉄道、道路、空港などに利用されている土地。
その他の用地	空地、公園緑地、墓地、採石地、採鉱地、自衛隊などの特別な用途に利用されている土地。
水部	河川、湖沼、ため池等の内水面および海面や干潟。

6.3 災害履歴図

災害履歴図は、国、地方公共団体、その他関係各機関等が調査した資料に基づき、地域に大きな影響を与えた災害の発生状況や、その被害の様子を示した地図で、災害の種類ごとに分けて作成している。この図では、比較的信頼性の高い情報のうち、最低でも縮尺 1/50,000（図上の 1 cm が現地の 500 m に相当）レベル以上の精度を持つ資料を選定して表示している。なお、地図には災害状況等の情報とともに、対象とした資料で扱った調査範囲を示している。引用する被害調査図等の資料が不十分なため、地図に掲載されていない災害があるほか、災害の種類や規模等の条件により、調査範囲外の地域でも被害が生じているような場合があり、この地図に全ての災害が表示されているわけではないことに留意する必要がある。

なお、災害履歴図の作成にあたり参照した資料の詳細や、被害の場所等を特定で

きない災害の状況等、その他参考になる事項を、この説明書に記述している。災害履歴図は、地形分類図や土地利用図等と見比べたり、さらに詳しい文献を調べたりすることで、その土地の安全性について理解を深めることができる。

なお、災害発生後の堤防整備や下水道整備、地盤の改良等の防災対策が行われている場合などには、災害発生当時に比べて、現在は土地の安全性が向上している可能性があることにも留意する必要がある。

6.4 成果図面の使い方

本図幅内で今後も想定される自然災害被害としては、本調査の災害履歴等からみて、台風や異常降雨時の高潮や河川氾濫等の浸水被害・土砂災害と、大規模地震発生時の建物倒壊や液状化等の地震災害、沿岸地域の津波災害等が考えられる。これらの被害想定については、国や各自治体が作成している各種ハザードマップにより、現時点で災害が発生した場合の被害の規模について、ある程度予測することが可能である。本図幅内で今後も想定される自然災害被害としては、本調査の災害履歴等からみて、異常降雨時の浸水被害・土砂災害と、大規模地震発生時の建物倒壊、液状化等の地震災害の、大きく2つが考えられる。これらの被害想定については、国や各自治体が作成している各種ハザードマップにより、現時点で災害が発生した場合の被害の規模について、ある程度予測することが可能である。

しかし、今後も地形変化をとまなう土地利用の変化が続くと仮定した場合、ハザードマップ等からでは、新たに地形変化が行われた場所でどのような災害被害が発生するかを予測することは困難である。また、すでに人工変化が行われているような場所でも、建築物の更新や再開発等が行われることも考えられる。

そのような場合において、その土地本来の地形や過去の災害履歴から、自然災害に対する危険度が高い地域なのかどうかを事前を知っておくことは非常に重要であり、災害が発生した場合でも被害を最小限に留めるための対策を取ることが可能となる。

本成果図面の使い方としては、一例として以下のような利用方法が考えられる。

- ・現在、本図幅内の土地に住む住民、あるいはこれから住まいを構える住民に対し、その土地の地形特性からみた災害に対する危険性をあらかじめ認識いただき、住民自ら、災害が発生した場合を想定した避難行動や被害を最小限にするための安全対策を考える機会を提供する。
- ・各地域における自治会や自主防災組織等が、自分たちが住む地域の自然災害に対する危険性や過去の被害状況を把握することにより、より具体的な災害状況を想定した避難訓練の実施や、防災物資等の備蓄に役立てることができる。
- ・学校教育や生涯学習等の場を通して、自分たちの住む地域の自然地誌を学ぶとともに、災害と地形との因果関係や過去の災害履歴等から、災害から身を守るための防災教育での資料として活用する。
- ・低地部で新たな開発等を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、軟弱地盤の土地においては、計画場所の変更や軟弱地盤対策工法の選択等、

事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地における過去の被害程度の把握ができることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。

- ・緩斜面で切り盛り造成等により人工改変を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、麓斜面や崖錐などの落石や地すべり等土砂災害の危険性が高い場所では、計画場所の変更や砂防対策の施工等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地と似た地形条件の場所の土砂災害発生履歴が分かることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。

防災に関しては、これまでは行政の側から語られることが多かったが、近年の市町村合併による行政単位の拡大や、行政改革にともなう行政職員の減少や防災関連費用の削減等により、行政のみではきめ細やかな防災対策の実施が困難な状況となっている。

また、近年では集中豪雨などによる災害の局所化、都市部への人口集中などによる被害の甚大化が予測され、事前の防災対策の必要性・重要性がますます高まっている。

そのため、上記で述べたように、本成果図面を活用することにより、行政だけでなく、地域住民が主体となった防災・減災対策を立てるとともに、新たな土地利用を計画する際に、事前に自然災害に対する危険性を予測し、計画の変更や防災・減災対策の導入に役立てることが望まれる。

7 引用資料及び参考文献

7.1 引用資料

(1) 人工地形及び自然地形分類図

地形分類図は、土地の「成り立ち・生い立ち・形」で色分けした地図であり、災害を引き起こす自然現象に対する土地の潜在的な可能性を知ることができる。土地履歴調査では、自然状態の地形によって土地を区分した地図（自然地形分類図）の上に、人間が造成した土地の状況を示した地図（人工地形分類図）を重ね合わせ表示した地図を「人工地形及び自然地形分類図」と呼んでいる。

大阪東北部地区の「人工地形及び自然地形分類図」は、以下の方法により作成した。

- ①「自然地形分類図」は、2万5千分の1土地条件図（国土地理院）を基本資料とし、以下の資料を引用または利用して編集した。編集にあたっては、空中写真の補足判読により一部修正を行った。

国土地理院（1981）：2万5千分の1 土地条件図「大阪東北部」。

大阪府（1978）：5万分の1 土地分類基本調査（地形分類図）「大阪西北部（大阪府）、大阪東北部（大阪府）」。

京都府（1981）：5万分の1 土地分類基本調査（地形分類図）「大阪東北部・奈良・上野」。

奈良県（1983）：5万分の1 土地分類基本調査（地形分類図）「奈良・大阪東北部・大阪東南部」。

判読に使用した空中写真は、

M265（昭22.4.1 米軍撮影）、M496（昭22.9.23 米軍撮影）、

M527（昭22.10.14 米軍撮影）、M540（昭22.10.8 米軍撮影）。

- ②「人工地形分類図」は、2万5千分の1地形図「枚方」「生駒山」（平成18年更新）「吹田」「大阪東北部」（平成20年更新）の読図及び空中写真（MKK-2003-1X, 国土地理院撮影）の補足判読により作成したもので、おおむね平成16年時点の地形の状況を反映している。

なお、本図の作成にあたっては、海津正倫（奈良大学教授（名古屋大学名誉教授））、加藤茂弘（兵庫県立人と自然の博物館主任研究員）、高田将志（奈良女子大学研究院教授）、三田村宗樹（大阪市立大学大学院教授）の各氏の指導をいただいた。

(2) 土地利用分類図

大阪東北部地区の「土地利用分類図」は、現在から約100年前（1910年頃）及び約40年前（1970年頃）の2時期を対象に、それぞれの年代に測量された地形図を資料として、当時の土地利用の状況を、資料とした地形図から読み取れる情報の範囲内で分類し、その結果を5万分の1の縮尺精度に編集したものである。本地区の「土地利用分類図」の作成にあたっては、以下の地形図を利用した。

【第1期（明治期、1910年頃）】

- ・5万分1地形図「大阪東北部」明治41年測図、大正3年第1回部分修正、大正6.5.30発行、図式は明治42年式地形図図式
- ・5万分1地形図「大阪西北部」明治42及3年測図、大正3年一部修正、大正5.3.30発行、図式は明治42年式地形図図式

【第2期（昭和期、1970年頃）】

- ・5万分1地形図「大阪東北部」昭和43年編集（資料：昭和42年改測1:25,000地形図、昭和43年10月地下鉄および地下式鉄道補入（昭和42年9月大阪市交通局作成の1:30,000路線図を使用）、昭和43年10月阪神高速道路大阪守口線補入（昭和35年9月阪神高速道路公団作成の1:3,000路線図を使用）、昭和43年10月万国博覧会場補入（昭和42年8月日本万国博覧会協会作成の1:500造成平面図使用））、昭和44.7.30発行、図式は昭和40年式1:50,000地形図図式
なお、本図の背景に使用した地形図は、調査時点の最新図（平成20年修正）である。

(3) 災害履歴図

災害履歴図の作成にあたっては、以下の資料を引用した。

【水害・土砂災害】

① 1961年9月災害

- ・昭和36（1961）年9月降雨・高潮（第2室戸台風）による浸水区域を、大阪府土木部（1991）『第二室戸台風の高潮による大阪市内浸水実績図』より編集。

② 1967年7月災害

- ・昭和42（1967）年7月降雨（昭和42年7月豪雨）による浸水区域を、国立防災科学技術センター『昭和42年7月8・9日豪雨による寝屋川流域洪水状況図』より編集。

③ 1972年7月災害

- ・昭和47（1972）年7月降雨（昭和47年7月豪雨）による浸水区域を、大阪府土木部（1987）『寝屋川流域浸水実績図』より編集。

④ 1982年7月災害

- ・昭和57（1982）年7月降雨（台風10号）による浸水区域を、大阪府土木部（1987）『寝屋川流域浸水実績図』、大和川流域総合治水対策協議会『大和川流域浸水実績図』より編集。

⑤ 1995年7月災害

- ・平成7（1995）年7月降雨（大雨）による浸水区域を、大阪府『寝屋川流域浸水実績図（平成7年～平成15年）』より編集。

⑥ 1997年8月災害

- ・平成9（1997）年8月降雨（豪雨）による浸水区域を、大阪府『寝屋川流域浸水実績図（平成7年～平成15年）』より編集。

⑦ 1999年8月災害

- ・平成 11 (1999) 年 8 月降雨 (豪雨) による浸水区域を、大和川流域総合治水対策協議会『大和川流域浸水実績図』より編集。

【地震災害】

① 1891 年濃尾地震被害

- ・液状化被害は、若松加寿江 (2011)『日本の液状化履歴マップ 745-2008 (DVD-ROM 付き)』より転載。

② 1995 年兵庫県南部地震被害

- ・液状化被害は、若松加寿江 (2011)『日本の液状化履歴マップ 745-2008 (DVD-ROM 付き)』より転載。

【地盤沈下】

- ・阪神地区地盤沈下連絡協議会『阪神地区地盤沈下調査広域水準測量の成果 (昭和 39 年～平成 21 年)』より編集。

なお、各地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の 5 万分の 1 地形図、空中写真、数値地図 50000 (地図画像)、数値地図 25000 (土地条件) 及び基盤地図情報を使用した。(承認番号 平 24 情使、第 534 号)

7.2 参考文献

本調査説明書の作成にあたっては、以下の資料、文献等を参考とした。

(地形分類・土地利用)

市原実 (1975) 大阪層群と大阪平野, アーバンクボタ, No. 11, 21~25.

市原実 (1978) 大阪平野の発達史, アーバンクボタ, No. 16, 2~15.

太田陽子・成瀬敏郎・田中眞吾・岡田篤正 - 編 (2004) 日本の地形 6 近畿・中国・四国, 東京大学出版会, 68-75, 88-90.

大阪府 (1978) 1/50,000 土地分類基本調査 (地形分類)「大阪西北部 (大阪府)、大阪東北部 (大阪府)」, 大阪府土木部都市整備局.

経済企画庁 (1973) 1/200,000 土地分類図 (奈良県), 経済企画庁総合開発局.

建設省 (1993) 淀川水害地形分類図 (その 2) 淀川水害地形分類図、建設省近畿地方建設局淀川工事事務所.

国土庁 (1976) 1/100,000 土地分類基本調査「大阪府」, 国土庁土地局.

国土地理院 (1981) 1/25,000 土地条件図 「大阪東北部」 昭和 56 年調査.

国土地理院 (1983) 土地条件調査報告書 (大阪地区), 国土地理院.

吹田市 (2008) 吹田市耐震改修促進計画, 吹田市都市整備部.

総理府 (2000) 阪神・淡路大震災復興誌, 総理府阪神・淡路復興対策本部事務局.

中央防災会議事務局 (2006) 中央防災会議「東南海、南海地震等に関する専門調査会」(第 26 回)中部圏・近畿圏の内陸地震の震度分布等の検討資料集, 中央防災会議事務局.

奈良県 (1983) 1/50,000 土地分類基本調査 (地形分類)「奈良 大阪東北部 大阪東南部 (いずれも奈良県域)」, 奈良県企画部.

寝屋川市 (2005) 寝屋川市地域防災計画, 寝屋川市人・ふれあい部危機管理室

三田村宗樹 (1992) 京阪奈丘陵の大阪層群の層序と地質構造, 第四紀研究, 31(3), 159-177.

宮地良典・田結庄良昭・寒川旭 (2001) 地域地質研究報告 1/50,000 地質図幅 大阪 東北部地域の地質, 地質研究所.

1/200,000 土地分類図 (地形分類図) 「奈良県」(昭和 48 年発行), 経済企画庁

1/100,000 土地分類図 (地形分類図) 「大阪府」(昭和 51 年発行), 国土庁

1/50,000 土地分類基本調査 「大阪西北部 (大阪府)、大阪東北部 (大阪府)」(表層地質図) (昭和 53 年発行), 大阪府

1/50,000 土地分類基本調査 「大阪西北部 (大阪府)、大阪東北部 (大阪府)」(地形分類図) (昭和 53 年発行), 大阪府

1/50,000 土地分類基本調査 「大阪西北部 (大阪府)、大阪東北部 (大阪府)」(土壌図) (昭和 53 年発行), 大阪府

1/50,000 土地分類基本調査 「奈良・大阪東北部・大阪東南部 (奈良県域)」(表層地質図), 奈良県

1/50,000 土地分類基本調査 「奈良・大阪東北部・大阪東南部 (奈良県域)」(地形分類図), 奈良県

1/50,000 土地分類基本調査 「奈良・大阪東北部・大阪東南部 (奈良県域)」(土壌図), 奈良県

1/50,000 地形図 「大阪東北部」 大正 3 年第一回部分修正測量 (大正 6. 5. 30 発行), 国土地理院.

1/50,000 地形図 「大阪東北部」 大正 3 年第一回部分修正測量 (大正 6. 5. 30 発行), 国土地理院.

1/50,000 地形図 「大阪東北部」 昭和 43 年編集 (昭和 44. 7. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 地形図 「吹田」 大正 12 年測量 (昭和 2. 1. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 地形図 「吹田」 昭和 42 年改測 (昭和 44. 2. 28 発行), 国土地理院.

1/25,000 地形図 「枚方」 大正 11 年測量 (大正 14. 1. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 地形図 「枚方」 昭和 42 年改測 (昭和 44. 1. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 地形図 「大阪東北部」 大正 13 年測量 (昭和 2. 1. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 地形図 「大阪東北部」 昭和 42 年改測 (昭和 44. 3. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 地形図 「生駒山」 大正 11 年測量 (大正 15. 1. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 地形図 「生駒山」 昭和 42 年改測 (昭和 44. 3. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 治水地形分類図 「吹田」 平成 24 年更新, 国土地理院. *

1/25,000 治水地形分類図 「枚方」 平成 24 年更新, 国土地理院. *

1/25,000 治水地形分類図 「大阪東北部」 平成 24 年更新, 国土地理院. *

1/25,000 治水地形分類図 「生駒山」 平成 24 年更新, 国土地理院. *

大阪府 千里ニュータウンの再生について (<https://www.pref.osaka.jp/jumachi/senri/index.html>)

(災害履歴調査)

宇佐美龍夫 (2003) 最新版日本地震被害総覧 416-2001. 東京大学出版会, 605p.

大阪管区气象台 (1982) 大阪の気象 100 年. 312p.

大阪市（2014）地域防災計画.

大阪府（1979）地下水採取規制図 累積沈下等量線図（大阪府の地盤沈下）.

大阪府（2012）大阪府環境白書 平成 24 年.

大阪府（2012）大阪府地域防災計画.

岡田義光（2012）日本の地震地図 東日本大震災後版. 東京書籍, 223p.

国土交通省国土地理院（1965）土地条件調査報告書（大阪平野）. 99p.

国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所（2009）大和川水系河川整備基本方針.

地震調査研究推進本部地震調査委員会（2009）日本の地震活動－被害地震から見た地域別の特徴, 第 2 版, 496p.

寝屋川市（2013）地域防災計画.

枚方市（2017）地域防災計画.

若松加寿江（2011）日本の液状化履歴マップ 745-2007（DVD＋解説書）. 東京大学出版会, 90p.

大阪府都市整備部（2012）「淀川水系寝屋川流域の当面の治水目標の設定等について」
(http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/4127/00081344/05h23_3shiryo3.pdf)

環境省ホームページ「全国地盤環境情報ディレクトリ（平成 23 年度版）」
(http://www.env.go.jp/water/jiban/dir_h23/index.html)（平成 24 年）

気象庁ホームページ「気象統計情報」
(<http://www.jma.go.jp/jma/menu/report.html>)

気象庁ホームページ「災害をもたらした気象事例」
(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/index.html>)

国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所ホームページ「淀川を知る 洪水の記録」
(<http://www.yodogawa.kkr.mlit.go.jp/know/old/flood/index.html>)

資料

災害年表（地震災害）

災害年表（風水害）

災害年表(地震災害)

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	大阪府		京都府		出典	記事	奈良県	出典
		北緯	東経		大阪府	京都府	奈良県					
827年8月11日 (天長4年7月12日)	京都	35	135 3/4	M6.5~7		家屋多くずれ余震が翌年に及んだ。		京都気象100年				
868年8月3日 (貞観10年7月8日)	播磨・山城	34 4/5	134.8	M≥7.0		山城、播磨諸郡の官舎堂塔ごとごとく破壊、京都で垣屋くずれる。		京都気象100年				
887年8月26日 (仁和3年7月30日)	五畿・七道	33.0	135.0	M6.0~8.5	大阪府地域防災計画	津波による死者多数。	庁舎転倒(京都東西両宗の虚舎)圧死者多数、余震は8月末まであった。	京都気象100年				
938年5月22日 (天慶1年4月15日)	京都・紀伊	35	135.8	M≥7.0			山城、大和、紀伊堂舎、舎屋倒壊死者あり、高野山伽藍破壊、8月6日にも強震、余震11月まで続く。	京都気象100年				
976年7月22日 (貞元1年6月18日)	山城・近江	34 8/9	135 4/5	M≥6.7			屋舎仏寺転倒多く、死者少なくなかった。余震連月止まず。	京都気象100年				
1185年8月13日 (文治1年7月9日)	近江・山城・大和	35	135.8	M=7.4			京都、特に白河辺の被害大社寺、家屋の倒壊破壊多く死者多数、宇治橋落ち余震。9月におよび230回を超える、近江の湖水激減す。	京都気象100年	京都、特に白河辺の被害大。社寺家屋倒壊破壊多く、死者多数。比叡山・醍醐寺にも被害。唐招提寺では千手観音破壊し、中門が倒れた。		奈良県の気象百年	
1317年2月24日 (文保1年1月5日)	京都	35.0	135.8	M6.5~7.0			白河辺の人家皆つぶれ死者5人、余震5月になっても止まなかった。	京都気象100年				
1361年8月3日 (正平16年6月24日)	畿内・土佐・阿波	33.0	135.0	M8 1/4~8.5	大阪府地域防災計画	四天王寺倒壊、津波による死者数百名。			諸国に堂塔の破壊破壊多く、奈良では葉師寺金堂の二階傾き、唐招提寺の九輪大破、廻廊倒れる。		奈良県の気象百年	
1449年5月13日 (宝徳1年4月12日)	山城・大和	35.0	135 3/4	M5 3/4~6.5			洛中堂塔被害多く、築地皆崩る。西山、東山で所々地裂ける。淀大橋、桂大橋落ちる、人馬の死んだものあり。	京都気象100年				
1510年9月21日 (永正7年8月8日)	摂津・河内	34.6	135.6	M6.5~7.0	大阪府地域防災計画	河内藤井寺、その他2社倒壊。人家の被害多数。			奈良の被害は小さい。		奈良県の気象百年	
1596年9月5日 (慶長1年7月13日)	畿内 (慶長伏見地震)	34.65	135.6	M7 1/2	大阪府地域防災計画	堺で死者600人、大阪も人家被害多数。	伏見大地震。三条より伏見の間被害最も多く、伏見城天守大破城中にて約600人圧死。東寺倒壊、天龍寺、二尊院、大覚寺倒れる。堺で死者600人余、余震翌年におよぶ。	京都気象100年	奈良では興福寺・唐招提寺・法華寺・海龍王寺など大被害、般若寺十三重塔上都落下。		奈良県の気象百年	
1662年6月16日 (寛文2年5月1日)	山城・大和・河内・和泉・摂津・丹後・若狹・近江・美濃・伊勢・駿河・三河・信濃	35.2	135.95	M7 1/4~7.6	大阪府地域防災計画	高槻城、岸和田城破壊。大阪で若干の死者。	京都で町屋倒壊1000、死者200人余、諸所の城破壊。	京都気象100年	奈良では2日間に約40回の地震とあ		奈良県の気象百年	
1707年10月28日 (宝永4年10月4日)	五畿・七道 (宝永地震)	33.2	135.9	M8.6	日本の地震活動一被害地震から見た地域別の特徴	大阪で死者約750人、家屋全壊1000棟余、他に津波による死者多数。	京都府の被害記述なし。	京都気象100年	大和国では死者63人、家屋損壊3219戸。興福寺・法華寺ほか多くの寺で被害。		奈良県の気象百年	

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	記事		出典	奈良県	出典
		北緯	東経		大阪府	京都府			
1830年8月19日 (天保1年7月2日)	京都および隣国	35.1	135.6	M6.5		御所、二条城、諸寺破損、京中の土蔵すべてこわれる、民家の倒壊0.1%以下と云う、京都で死280人、傷1300人、亀山、伏見、大津、伊丹などで被害、余震は翌年の1月までに600回。	京都気象100年		
1854年7月9日 (安政1年6月15日)	伊勢・伊勢・大和 及び隣国 (伊賀上野地震)	34.75	136.1	M7 1/4				奈良では死者280人、家屋壊壊700~800戸。春日大社などの寺社の灯籠は残らず倒れたという。	奈良県地域防災計画
1854年12月29日 (安政1年11月4日)	東海・東山・南海 街道 (安政東海地震)	34	137.8	M8.4	大阪府地域防災 計画	大阪で倒壊200軒。			
1854年12月24日 (安政1年11月5日)	畿内・東海・東 山・北陸・南海・ 山陰・山陽連 (安政南海地震)	33.0	135.0	M8.4	大阪府地域防災 計画	津波による死者多数、船舶被害 1800、落橋10。		奈良では春日大社の石灯籠が多く倒れたほか、東大寺一部破損、春日大社町家で破壊家屋あり。	奈良県の気象百年
1891年10月28日 (明治24)	岐阜県南西部 (濃尾地震)	35.6	136.6	M8	大阪府地域防災 計画	死者24人、負傷者94人、家屋全壊 1011棟、半壊708。	日本の地震活動 -被害地震から 見た地域別の特 徴-	奈良県では死者1人、負傷者2人、全 壊16戸。	奈良県の気象百年
1892年1月3日 (明治25)	岐阜県南東部 (濃尾地震余震)	35.3	137.1	M5.5	大阪府地域防災 計画	大阪市の震度4			
1894年1月10日 (明治27)	岐阜県南西部 (濃尾地震余震)	35.4	137.7	M6.3	大阪府地域防災 計画	大阪市の震度4			
1899年3月7日 (明治32)	三重県南部 (紀和地震)	34.1	136.1	M7	大阪府地域防災 計画	大阪砲兵工廠、小学校等損傷。		被害の中心は奈良県南東部と三重県南部。奈良県では北山筋、吉野郡方面で山崩れなど被害大。死者は三重県で7人だが奈良県は0人。春日大社石灯籠87基倒れる。	奈良県の気象百年
1909年8月14日 (明治42)	滋賀県東部 (江濃(姉川)地震)	35.4	136.3	M6.8	大阪府地域防災 計画	大阪市の震度4		琵琶湖東北岸 虎姫付近で被害最大。滋賀・岐阜両県で死者41人。奈良県は軽微。	奈良県の気象百年
1916年11月26日 (大正5)	兵庫県南岸	34.6	135	M6.1	大阪府地域防災 計画	大阪市の震度4			
1925年5月23日 (大正14)	兵庫県北部 (巨馬地震)	35.6	134.8	M6.8	大阪府地域防災 計画	大阪市の震度4	北但馬地震。北部(久美浜)で死者7人、負傷者30人、住家全壊20棟。	円山川流域で被害多く、死者428人、家屋全壊1295戸、焼失2180戸。奈良県の被害は軽微。	奈良県の気象百年
1927年3月7日 (昭和2)	京都府北部 (北丹後地震)	35.6	134.9	M7.3	大阪府地域防災 計画	死者21人、負傷者126人、全壊 127、半壊117。	峯山町全壊、死者1014人、負傷者1232人、地割、瓦落下、電線切断等。被害合計 死者2925人、負傷者7806人、家屋全壊12584戸、同半壊10841戸、焼失3711戸、鄉村断層、隆起、くい違い多く生ず。	奈良県の被害は軽微。	奈良県の気象百年

記事

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	大阪府	出典	京都府	奈良県	出典
		北緯	東経						
1936年2月21日 (昭和11)	奈良県地方 (河内大和地震)	34.5	135.7	M6.4	死者8人、負傷者52人、全壊18、半壊89。	大阪府地域防災計画		大阪・奈良の府県境で振動が強かった。死者は大阪府で8人。奈良県では死者1人、家屋の全半壊148戸、小さな崖崩れあり、法隆寺・唐招提寺・薬師寺で土崩の損壊などの被害あり。余震多数。余震分布から大和川断層の活動と考えられる。	奈良県の気象百年
1938年1月12日 (昭和13)	紀伊水道南部	33.35	135.04	M6.8				奈良県では十津川村などで小被害。紀伊水道沿岸部で地鳴り、井戸水位の増減有り。浅い地震。	奈良県の気象百年
1943年9月10日 (昭和18)	鳥取県東部 (鳥取地震)	35.5	134.2	M7.2	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画			
1944年12月7日 (昭和19)	紀伊半島沖 (東南海地震)	33.6	136.2	M7.9	大阪市内で死者6人、負傷者120人、全壊122、半壊(小破を含む)2500。	大阪府地域防災計画		奈良では死者3名、負傷者21名、全壊89戸。	奈良県の気象百年
1945年1月13日 (昭和20)	三河湾 (三河地震)	34.7	137.1	M6.8				奈良県の被害記録はなく、戦時中のため詳細不明。	奈良県の気象百年
1946年12月21日 (昭和21)	紀伊半島沖 (南海地震)	32.9	135.8	M8	死者32人、負傷者46人、全壊261、半壊217。	大阪府地域防災計画		奈良県では負傷者13人、全壊37戸、春日大社石灯笼約300基倒れる。	奈良県の気象百年
1948年4月18日 (昭和23)	紀伊半島沖	33.3	135.6	M7	津波の高さ：印南50cm、清水10cm	大阪の気象百年			
1948年6月15日 (昭和23)	紀伊水道 (日高川地震)	33.7	135.3	M6.7	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画		和歌山県・奈良県南部で小被害。全体で死者2人(十津川署管内)、家屋倒壊60戸、地滑り・崖崩れなど。奈良市では被害はなかったが、春日大社などの石灯笼3基倒れる。	奈良県の気象百年
1950年4月26日 (昭和25)	奈良県南部	33.55	135.4	M6.5				奈良県十津川村などでも民家半壊1戸などの小被害。春日大社の石灯笼10基倒れる。	奈良県の気象百年
1952年7月18日 (昭和27)	奈良県地方 (吉野地震)	34.5	135.8	M6.7	死者2人、負傷者75人、全壊9、半壊7。	大阪府地域防災計画		奈良県では死者3人、負傷者6人、半壊1戸、春日大社の石灯笼650基が倒れる。	奈良県の気象百年
1958年11月7日 (昭和33)	摂津島付近	44.3	148.5	M8.1	津波の高さ：串本42cm、大阪6cm	大阪の気象百年			
1960年5月23日 (昭和35)	チリ沖 (チリ地震津波)	39.5S	74.5W	M8.5	津波の高さ：串本308cm、大阪100cm	大阪の気象百年			
1962年1月4日 (昭和37)	和歌山県南部 (紀伊水道地震)	33.38	135.13	M6.4				奈良県でも南部で崖崩れ1ヶ所、落石による電話線の被害あり。	奈良県の気象百年
1963年3月27日 (昭和38)	福井県沖 (越前沖地震)	35.8	135.8	M6.9	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画			
1964年3月28日 (昭和39)	アラスカ南部近海 (アラスカ地震津波)	61.1	147.8	M8.5	津波の高さ：串本74cm、大阪22cm	大阪の気象百年			

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	記事				
		北緯	東経		大阪府	京都府	奈良県	出典	
1965年2月4日 (昭和40)	アリュージェン中部 (アリュージェン地震津波)	51.3	178.6	M7.5	津波の高さ：串本112cm、大阪80cm				
1969年9月9日 (昭和44)	岐阜県美濃中西部	35.8	137.1	M6.6	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画			
1985年1月6日 (昭和60)	和歌山県北部	34.2	135.5	M5.8	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画			
1995年1月17日 (平成7)	淡路島付近 (兵庫県南部地震)	34.6	135.0	M7.3	死者31人、負傷者3589人、全壊895棟、半壊7232棟	大阪府地域防災計画	死者1名、負傷者49名、住宅全壊3戸、住宅半壊6戸。	奈良県内の被害は負傷者12人、建物の一部損壊15件など比較的軽微。	奈良県の気象百年
1995年1月25日 (平成7)	兵庫県南東部	34.8	135.3	M5.1	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画			
2000年10月6日 (平成12)	鳥取県西部 (鳥取県西部地震)	35.3	133.3	M7.3	負傷者4人。	日本の地震活動 -被害地震から見た地域別の特徴-			
2000年10月31日 (平成12)	三重県中部	34.18	136.19	M5.7		日本の地震活動 -被害地震から見た地域別の特徴-		奈良県でも南部で一部落石、崩土があった。	奈良県地域防災計画
2004年9月5日 (平成16)	紀伊半島南東沖 (紀伊半島南東沖地震)	33.08	137.08	M7.4	負傷者10人。	日本の地震活動 -被害地震から見た地域別の特徴-	負傷者1人。	奈良県では、一部で道路の落石及び小規模崩土があった。負傷者6人。	奈良県地域防災計画
2004年9月7日 (平成16)	東海道沖	33.2	137.3	M6.4		日本の地震活動 -被害地震から見た地域別の特徴-		人的物的被害無し。	奈良県地域防災計画

参照 ①国立天文台編(2011)「理科年表 平成24年」丸善出版
 ②宇佐美龍夫(2003)「新編日本被害地震総覧[416]-2001」東京大学出版会
 ※地震の緯度・経度、規模などは①、②の資料も参照した。

災害年表(風水害)

和暦年	西暦	開始日	終了日	気象概要	大阪府				京都府				奈良県									
					気象値		事象	出典	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典						
					最大風速(m/s)	最大瞬間風速(m/s)			雨量(mm)	最大風速(m/s)			最大瞬間風速(m/s)	雨量(mm)								
明治	1	1868	5 22 7 19	霖雨洪水																		
明治	1	1868	7	明治元年7月洪水																		
明治	1	1868	9 3 9 4	風雨洪水																		
明治	3	1870	10 1	大風雨																		
明治	3	1870	10 12	大風雨洪水																		
明治	4	1871	7 4	大風雨洪水																		
明治	5	1872	10 3 10 30	洪水																		
明治	6	1873	8 30	大風雨洪水																		
明治	9	1876	10	暴風雨洪水																		
明治	13	1880	10 3	大風雨																		
明治	15	1882	8 5	暴風雨洪水																		
明治	16	1883	9 10	暴風雨																		
明治	16	1883	10 7	暴風雨																		
明治	17	1884	7 1	大雨洪水																		
					大和川大和橋の上流右岸の堤防決壊し、人家30戸を流亡。大北区曾根崎町付近一円が浸水。河内は浸水4尺。三島郡は五領村大字前島の堤防や同郡島本村大字広瀬の堤が決壊、耕地4百余町を浸し、人家5百余戸が漂蕩、8戸流出。同郡大冠村大字野中の字新開堤防を決壊、人家25戸家畜十数頭を流亡。	大阪の気象百年																
					梅雨前線が北上、南下を繰り返して大雨をもたらす。大和川右岸遠里尾、古市、円明、大井などで堤防決壊。安立町では民家30戸が流出。	河川整備基本方針(大和川水系)																
					淀川堤防破壊により高槻城内が溢水。川々の堤防決壊16ヶ所、又川筋の崩壊10ヶ所。被害は三島郡70ヶ村東成郡2ヶ村に及んだ。	大阪の気象百年																
					風雨により稲作一円に吹倒 水冠。	大阪の気象百年																
					淀川出水し、三島郡島本村大字広瀬宇冠口堤防を破壊、同村大字高浜以下12ヶ部落を併呑。芥川筋如是村大字芝生堤防が決壊、大冠村大字番田外14ヶ村を浸害。その向岸でも北河内郡牧野村大字渚の堤防を決して被害多し。この時大和川暴強して東成郡墨江村大字遠里小野において堤塘130間を崩壊。	大阪の気象百年																
					被害は摂河泉3国に及び、沿岸地方で大損害。摂津住吉郡若松新田が流失、溺死者40余人。同郡松原新田から堺港に至る一帯に互って汐入りし、堺町も浸水。北台場は大平破損、この周辺の流矢家屋173戸、朝家555戸。天保山辺は海嘯にて約百人が溺死、機織船等も村落に漂流され 大阪・神戸間の電信機も断切。	大阪の気象百年																
					淀川洪強し、三島郡上牧村字三ツ畑における堤防を崩壊して浸水60日間。被害の村落は五領細8ヶ村・171町余。作物は悉く腐臭。	大阪の気象百年																
					三島郡三ヶ牧村大字唐崎字外島の堤塘破壊、耕地20町余を浸害。	大阪の気象百年																
					淀川汎逸して三島郡前島村字一貫島堤防が決壊、耕作地及び宅地1百余町が浸水。神崎川では同郡味生村大字別府堤防が決壊、耕地364町余歩を浸して農作の被害甚大。	大阪の気象百年																
					摂津にて暴風雨。	大阪の気象百年																
					淀川の出水により、三島郡唐崎村字外島の堤塘2ヶ所を破り、耕地33町歩を漂蕩。同郡吹田村字下新田に於ける神崎川堤防も決壊、耕地165町歩を浸して水防夫1名溺死。	大阪の気象百年																
					雨量は1825英寸、各川の水量が増加。	大阪の気象百年																
					台風により、南海岸及び近畿地方暴風大。	大阪の気象百年																
					石津川の堤防破壊して浸水に侵入、大和川の堤防も亦危、橋上が浸水。地方への交通機関はほとんど絶。	大阪の気象百年																

開始日		終了日		大阪府				京都府				奈良県							
和暦	年	西暦	月	日	日	月	日	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典				
								最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)			最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)				
明治	18	1885	6	15	7	1					淀川洪水の記録								
											6月上旬より続いた降雨に加え、低気圧が相次いで大阪付近を襲い、6月15日夜半から豪雨となり、17日夜半までに淀川で183.3mmの雨量となった。さらに、6月25日頃から再び降り始め、7月1日には暴風も加わって、淀川は水位上昇。低気圧による洪水でも加わって、淀川は水位上昇。低気圧による洪水で27ヶ村（堺東区・旭区・都島区）に濁水が溢れ、計113ヶ町村、約9900戸、約4452.6haが水没。その後の暴風雨により、大阪市の東区28、南区46、西区174、北区92の計340町と、大阪城～天王寺間の一部高台を除くほとんどの低地部が水害を受け、被災人口は276,049人に達した。また、30余橋が流出。								
明治	18	1885	7	1						214	河川整備基本方針 (大和川水系)						河川整備基本方針 (大和川水系)		
明治	22	1889	8	20							淀川洪水、淀御牧、瀬島、八幡、大山崎地にて決壊。								
明治	29	1896	7	21	7	23					鳥本水位3.9m、三ヶ牧、大冠堤防決壊。								
明治	29	1896	9								前月末よりの雨で大和川の枯木・雷田・住道堤防、石川堤防決壊。								
明治	29	1896	9	6							前線降雨で淀川大洪水、唐島外島堤、大塚外島堤、三矢堤、広瀬堤決壊、右岸一帯浸水。								
明治	36	1903	4	11							死傷者3名。								
明治	36	1903	7	7	7	9			264		梅雨前線により四国東部から近畿一体に強い降雨。大和川の水位は5.3mとなり、流域全体で田畑、家屋の浸水、道路、堤防等の被害が多数。建物被害11,690軒。								
明治	43	1910	9	6	9	9					京阪以西で多量の降雨により河川氾濫。堤防決壊、橋梁流失、鉄道線路の破壊による交通一時杜絶、家屋の浸水等の被害有り。								
明治	44	1911	6	14	6	16					近畿地方かなりの被害あり。								
明治	44	1911	8	15	8	17													
大正	1	1912	9	22	9	23		37.0	158		大阪湾高潮。死者2名、家屋全半壊203棟、床上浸水2300戸、船舶破損沈没41隻。							奈良県の気象百年	
大正	4	1915	8	5				20.0	-									奈良県の気象百年	

開始日		終了日		大阪府				京都府				奈良県								
和暦	西暦	年	月	日	日	月	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典		
大正 6	1917	9	29	10	1	台風	台風豪雨により、淀川水系の各河川は急激に増水、淀川右岸の支川芥川と、淀川右岸の大塚堤防が決壊。その増水が右岸沿いに突進し、神崎川の支川安威川、山田川合流点、味玉村(三島町)味玉の堤防を破るなど決壊多数。三島郡の15町村、西成郡13町村(大塚から淀川沿線河口まで全郡)と北河内の3町村が水没。被害反別は5871.3ha、被災戸数は計15,358戸。死傷者40人。					淀川洪水の記録	淀川洪水の記録	淀川洪水の記録	八木 9.7		洞川454.7 菅野434.5 小森390.6 奈良(油 阪) 218.1 八木311.7	奈良県は、関東に比べて被害は僅少であるが、近府に比べて桁はずれの被害を受けた。雨量は県内平均的に降り、台風の来襲を受けるまでに各地は相当湿っていたため、被害が拡大した。県内の主な被害は、死者25名、行方不明5名、負傷者24名、家屋全壊53戸、半壊117戸、流失58戸、床上浸水3341戸、床上浸水6360戸等となっている。	奈良県の気象百年	
大正 7	1918	7	11	7	13	台風		大阪 18.9	大阪 24.2		大阪の気象百年									
大正 7	1918	8	29	8	30	台風		19.1	71		大阪の気象百年									
大正 9	1920	8	4	台風				24.0	82		大阪の気象百年									
大正 9	1920	8	20	8	21	台風		20.0			大阪の気象百年									
大正 10	1921	9	25	9	26	台風		25.0			大阪府地域防災計画関連資料集								平垣郡は特に風勢が猛烈で、山間部は雨勢の方が激烈であった。県内の主な被害は、死者5名、負傷者23名、建物被害21142戸(家屋全壊342戸を含む)等。その他、樹木、稲、果実などに多大の被害を受けた。	奈良県の気象百年
大正 12	1923	6	15	6	23	大雨					大阪の気象百年									
大正 14	1925	8	16	8	17	台風		16.0	56		大阪の気象百年									
昭和 3	1928	7	18	大雨							大阪府地域防災計画									
昭和 4	1929	7	27	大雨							京都府地域防災計画									
昭和 4	1929	8	15	台風							大阪の気象百年									
昭和 5	1930	7	31	8	1	台風					大阪の気象百年									
昭和 5	1930	8	15	大雨							大阪府地域防災計画									
昭和 6	1931	10	12	10	13	大雨					大阪府地域防災計画									
昭和 7	1932	7	1	7	2	大雨					大阪の気象百年									
昭和 7	1932	7	5	竜の瀬地すべり							河川整備基本方針(大和川水系)									
昭和 7	1932	7	7	7	9	大雨					大阪の気象百年									
昭和 8	1933	9	4	9	5	台風					大阪の気象百年									
昭和 8	1933	10	20	台風							大阪の気象百年									
昭和 9	1934	6	20	6	21	大雨					大阪の気象百年									
昭和 9	1934	8	1	雷雨							大阪の気象百年									
昭和 9	1934	9	20	9	21	室戸台風		48.4	60.0	223	大阪府地域防災計画	京都 28	八木 22.3	大台ヶ原 452.0 寺垣内 383.0 奈良(登大路町) 147.6 八木 41.8	死者1812名、行方不明者76名、負傷者8932名、家屋全壊14368棟、半壊15674棟、床上浸水142910棟、床上浸水40830棟、床上浸水4230棟、焼失家屋1戸。	奈良県の気象百年				

開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県								
和暦	年	西暦	月	日	日	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典		
昭和10	1935	6	29						水無瀬川、芥川等に大災害。8月の豪雨と合わせて死者160名、全半壊、流出家屋約600戸、浸水家屋50,000戸。	淀川洪水の記録			京都269.9	-	京都府地域防災計画							
昭和10	1935	8	9	8	11				台風。負傷20名、家屋倒壊・流失117棟、床上浸水3633棟、床下浸水43752棟。	大阪の気象百年												
昭和10	1935	8	10	8	11										向日町 294.4 京都213.9	京都府地域防災計画						
昭和10	1935	8	11			42.0	183		負傷者10名、家屋全壊・流失116棟、半壊74棟、床上浸水3632棟、床下浸水43669棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集												
昭和10	1935	8	27	8	30	13.8	21.6	74	床上浸水1304棟、床下浸水12994棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集												
昭和10	1935	8	31	9	2				低気圧。中河内郡死者9名、負傷26名、家屋流失6戸、大阪市内浸水家屋35312戸。	大阪の気象百年												
昭和11	1936	2	4	2	5				日本海低気圧。死者・不明者21名、負傷5名、住家全半壊30棟。	大阪の気象百年												
昭和11	1936	4	25						低気圧。床上、床下浸水300余戸、漁船転覆1隻。	大阪の気象百年												
昭和11	1936	9	1													京都気象100年						
昭和11	1936	9	11						京都11.6 11.6 17.9	京都108.8	負傷9名・全壊69戸・半壊336戸。				京都気象100年							
昭和11	1936	10	2	10	4				家屋浸水4300余戸、市電運休。	大阪の気象百年												
昭和12	1937	9	10	9	11				負傷2名、住家全半壊流失21戸、床上浸水824戸、床下浸水4351戸。	大阪の気象百年												
昭和13	1938	7	3	7	6				前線。死者・不明者19名、負傷2名、住家全半壊流失183棟、床上浸水456棟、床下浸水25106棟。	大阪の気象百年				西別院 410.3 京都240.1	死者6・家屋全半壊流出44・床上浸水2488。	京都気象100年						
昭和13	1938	8	1	8	2										京都府地域防災計画							
昭和13	1938	9	5			13.2	19.0	19	床上浸水1919棟、床下浸水13870棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集												
昭和14	1939	6	16	6	17				前線、熱帯低気圧。床上・床下浸水5500棟。	大阪の気象百年												
昭和15	1940	7	9	7	10			大阪 141.7	1時間降水量の最大63.8mm。死者7人 家屋倒壊7戸 同浸水11万7千戸 堤防決壊3ヶ所。	大阪の気象百年												
昭和15	1940	7	15						雨量120mmの集中豪雨、生駒山グライター場で山崩れ。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集												
昭和16	1941	6	25	6	29				梅雨前線。住家全壊2棟、床下浸水9130棟、がけ崩れ4ヶ所。	大阪の気象百年				京都139.5	死者1・家屋全半壊20・床上浸水130・堤防決壊60。	京都気象100年						
昭和17	1942	8	27	8	28				床上・床下浸水400棟。	大阪の気象百年					家屋全半壊225。	京都気象100年						
昭和17	1942	9	21	9	22				床上浸水70棟、床下浸水7025棟。	大阪の気象百年				京都152.5	死者2・床上浸水130・堤防決壊11。	京都気象100年						
昭和19	1944	9	7	9	8				大阪市内浸水3600戸、堤防決壊3カ所、船舶沈没3隻。	大阪の気象百年												
昭和19	1944	9	17			18.6	21.8	53	各地に豪雨被害大。床上浸水8591棟、床下浸水7266棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集												
昭和19	1944	10	7	10	8	18.6	21.8	52	死者58名、行方不明者45名、負傷者37名、家屋全壊・流失1132棟、半壊863棟、床上浸水5558棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集												
昭和20	1945	9	17	9	18	19.0	22.5	3	死者・不明者4名、床上浸水28234棟、床下浸水10800棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集												
昭和20	1945	10	9	10	13	19.0	15.5	3	死者1名、行方不明者3名、家屋全壊・流失805棟、床上浸水10034棟、床下浸水19550棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集				園部319.0	死者12・家屋全半壊84・床上浸水5822・堤防決壊74	京都気象100年						
昭和21	1946	7	29	7	30				台風。家屋半壊4戸、床下浸水200戸、堤防決壊1カ所。	大阪の気象百年												
昭和22	1947	7	9											下和知 197.0	-	京都気象100年						

開始日				大阪府				京都府				奈良県			
和暦	年	西暦	終了日	気象概要		事象	出典	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典
				最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)			最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)			最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)		
昭和	22	1947	9 14 9 15	カスリーン台風					岡山265.9 比叡山127.4	-	京都気象100年				
昭和	23	1948	7 23 7 24	大雨						床上・床下浸水177。	京都気象100年				
昭和	23	1948	8 24 8 26	大雨	熱帯低気圧。家屋半壊8棟、床下浸水30棟。		大阪の気象百年								
昭和	23	1948	9 11 9 12	大雨	日本海低気圧。床下浸水698棟。		大阪の気象百年								
昭和	23	1948	10 4 10 5	リピー台風	床上浸水14棟、床下浸水約500棟。		大阪の気象百年								
昭和	23	1948	11 5 11 6	大雨	南岸低気圧。床下浸水約500棟。		大阪の気象百年								
昭和	24	1949	6 20 6 23	デラ台風	台風デラと梅雨前線。住家全半壊流失11棟、床上浸水173棟、床下浸水14714棟、非住家被害7棟、がけ崩れ23ヶ所、鉄軌道被害8ヶ所。		大阪の気象百年		亀岡244.4	家屋全半壊10・床上浸水85・堤防決壊16	京都気象100年				
昭和	24	1949	7 28 7 29	ヘスター台風					和井490.0 京都235.3	桂川・由良川大洪水。死者11・家屋全半壊186、床上浸水1062・堤防決壊62。	京都気象100年		被害状況(奈良県)死者1、浸水家屋471。	奈良市災害史	
昭和	24	1949	9 22 9 24	大雨	二つ玉低気圧。負傷1名、床上浸水100棟、床下浸水2001棟。		大阪の気象百年								
昭和	25	1950	1 6	強風	季節風。大阪港機能麻痺。船舶被害1隻。		大阪の気象百年								
昭和	25	1950	1 30 1 31	強風	季節風。建物被害1棟、床下浸水330棟、船舶被害3隻。		大阪の気象百年								
昭和	25	1950	2 10	強風	季節風。死者1名、建物被害1棟、船舶沈没1隻。		大阪の気象百年								
昭和	25	1950	3 6 3 7	大雨	日本海低気圧。前線。床上浸水2棟、床下浸水2277棟、がけ崩れ1ヶ所。		大阪の気象百年								
昭和	25	1950	5 19 5 20	大雨	梅雨前線。二つ玉低気圧。建物被害3棟、床下浸水300棟、鉄軌道被害1ヶ所、電柱倒壊10数本。		大阪の気象百年								
昭和	25	1950	6 20 6 21	大雨	梅雨前線。建物全壊1棟、床下浸水2232棟。		大阪の気象百年								
昭和	25	1950	6 27 6 29	大雨	梅雨前線。床下浸水710棟。		大阪の気象百年								
昭和	25	1950	9 2 9 4	ジェーン台風	死者240名、行方不明者16名、負傷者21215名、家屋全壊・流失10625棟、半壊60708棟、床上浸水54139棟、床下浸水40025棟。	28.1 44.7 65	大阪府地域防災計画関連資料集		舞鶴161.0 京都28.8 綾部126.0 京都50.0	死者7人、行方不明者4人、負傷者364人、住宅全壊684戸、住宅流失3戸、住宅半壊3328戸、床上浸水353戸、床下浸水3053戸。	京都府地域防災計画	大台ヶ原850.9 河台432.2 奈良(肘塚町)19.6 27.5 39.7 橿原84.1	京阪神や四国、和歌山沿岸地方に大被害を与えた。県内の主な被害は、死者1名、負傷者15名、家屋全壊151戸、半壊1576戸、焼失9戸、床上浸水14戸、床下浸水122戸。非住家被害397戸。田流失・埋没25町、田冠水197町、畑流失・埋没2町、稲冠水117町、道路損壊144ヶ所、橋梁流失65ヶ所、堤防決壊1ヶ所、通信施設被害13ヶ所、電柱倒壊2000本等に上った。	奈良県の気象百年	
昭和	26	1951	7 1 7 2	ケイト台風	梅雨前線とケイト台風。床上浸水8棟、床下浸水8256棟。		大阪の気象百年			床上浸水7。	京都気象100年				
昭和	26	1951	7 7 7 9	大雨	梅雨前線。床下浸水2424棟。		大阪の気象百年								
昭和	26	1951	7 10 7 16	大雨	梅雨前線。行方不明1名、負傷4名、建物被害85棟、床上浸水681棟、床下浸水13671棟、がけ崩れ121ヶ所、船舶被害20隻。		大阪の気象百年								
昭和	26	1951	7 11	7月災害					亀岡141.0	龜山地方の豪雨で、平和池の決壊による篠村の被害甚大、京都市内の桂川はんらん、降雨は南山城ほじめ府内全域にわたった。死者79人、不明者35人、負傷者352人、住宅全壊52戸、住宅流失89戸、住宅半壊127戸、床上浸水2964戸、床下浸水12020戸。	京都府地域防災計画				
昭和	26	1951	7 15	大雨					比叡山119.0	床上浸水6・堤防決壊6。	京都気象100年				
昭和	26	1951	10 13 10 15	ルース台風	死者1名、負傷1名、床上浸水492棟、床下浸水2583棟。		大阪の気象百年		下和知79	家屋全半壊8。	京都気象100年				
昭和	27	1952	1 25	強風	季節風。床下浸水50棟、船舶被害1隻。		大阪の気象百年								

開始日		終了日		大阪府				京都府				奈良県								
和暦	西暦	年	月	日	日	月	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典		
昭和 27	1952	6	22	6	25	ダイナ台風						建物被害1棟、床下浸水3550棟、がけ崩れ2ヶ所、通信施設被害17回線。	大阪の気象百年				死者1・家屋全半壊2・床上浸水49・堤防決壊31。	京都気象100年	奈良県は、全域で暴風よりも豪雨に悩まされた。県内の主な被害は、家屋一部壊壊1戸、床上浸水4戸、床下浸水66戸、田流失・埋没10町、田冠水270町、畑冠水20町、道路損壊18件、橋梁流失3件、堤防決壊6件、山・崖崩れ7件、電柱倒壊1件、鉄軌道被害1件、木材流失2030石等となっている。	奈良県の気象百年
昭和 27	1952	7	1	7	3	大雨						死者1名、床上浸水491棟、床下浸水8166棟。	大阪の気象百年				奈良県の雨量は、通例の雨量分布と反対に宇陀郡・吉野郡などの山岳方面が少なく、大和平野に多かった。県内の主な被害は、負傷者1名、住家全壊1戸、半壊2戸、田冠水242町、畑冠水28町、道路損壊20件、橋梁流失5件、堤防決壊8件、山・崖崩れ14ヶ所、鉄軌道被害1件等になった。	奈良県の気象百年		
昭和 27	1952	7	9	7	11	7月豪雨	389					死者・不明者41名、負傷者454名、家屋全壊・流失187棟、床上・床下浸水19238棟。	大阪府地域防災計画 画閣運賃資料集				梅雨前線が活発化し、特に大和川流域で短時間に豪雨を生じ、総降水量からみたら以上に被害は甚大となった。県内の主な被害は、住家一部壊壊2戸、床上浸水8戸、床下浸水997町、田流失・埋没5町、田冠水1464町、畑流失・埋没90町、畑冠水21町、道路損壊6ヶ所、橋梁流失15ヶ所、堤防決壊5ヶ所、鉄軌道被害2ヶ所等となっている。	奈良県の気象百年		
昭和 27	1952	11	4	11	5	アグネス台風						床下浸水172棟。	大阪の気象百年							
昭和 28	1953					前線						大正池決壊により東近畿一帯で水害。死傷者1718名、住家全半壊流失1387棟、床上・床下浸水4208棟。	淀川洪水の記録							
昭和 28	1953	1	12	1	15	強風						季節風。大阪港機能麻痺。汽船沈没1隻。	大阪の気象百年							
昭和 28	1953	3	11			強風						寒冷前線通過。強風による架線切れにより、国鉄一時不通。	大阪の気象百年							
昭和 28	1953	5	29	5	30	大雨						瀬戸内海低気圧。床下浸水20棟。	大阪の気象百年							
昭和 28	1953	6	4	6	8	台風2号						負傷1名、住家全半壊86棟、床上浸水30棟、床下浸水3341棟、がけ崩れ3ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所。	大阪の気象百年							
昭和 28	1953	7	2	7	6	大雨						梅雨前線。死者1名、住家全半壊2棟、床下浸水1475棟。	大阪の気象百年						数時間にわたって雨量150ミリに達する豪雨があり、添上郡山間部や嵯峨郡の一部に被害があったが、柳生方面では河川氾らんし、橋が流され、家屋田畑が浸水した。	奈良市災害史
昭和 28	1953	7	17	7	20	大雨						梅雨前線。負傷1名、建物被害1棟、床下浸水3274棟。	大阪の気象百年						大塔、野迫川村では山崩れにより家屋が倒壊・埋没・流失して、死者27名（野迫川村20名、大塔村7名）を出すに至った。また、十津川は増水して木材・橋梁が流失し、至る所で崖崩れを生じた。一方、紀ノ川、大和川各支流も警戒水域を突破し、決壊寸前の状態になった。県内の主な被害は、死者31名、行方不明13名、負傷者30名、家屋全壊59戸、半壊117戸、流失169戸、一部壊壊1戸、床上浸水95戸、床下浸水1385戸、非住家被害79戸、田流失・埋没165町、水田冠水1483町、畑流失・埋没102町、堤防決壊25ヶ所、山・崖崩れ530ヶ所、鉄軌道被害20ヶ所等に及んだ。	奈良県の気象百年
昭和 28	1953	7	20	7	21	大雨						床下浸水83。	京都気象100年							

開始日			大阪府				京都府				奈良県			
和暦	西暦	終了日	気象概要		事象	出典	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典
			最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)			雨量 (mm)	最大風速 (m/s)			最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)		
昭和28	1953	8月14日			国・私鉄一時不通。床下浸水60棟。	大阪の気象百年			東和東680 清船428 大河原284	京都府地域防災計画				
昭和28	1953	8月15日			前線により府北部に局地的豪雨。住家全半壊5棟、床上浸水41棟、床下浸水1510棟。	大阪の気象百年			亀岡110	京都気象100年				
昭和28	1953	9月1日			寒冷前線通過に伴い阪神地方に強雷雨。鉄道交通混乱。負傷4名。	大阪の気象百年								
昭和28	1953	9月14日				大阪の気象百年								
昭和28	1953	9月24日	9月26日	台風13号	中河内地区の山崩れで堰堤満砂し、荻原、植林地崩壊。死者26名、行方不明者1名、負傷者453名、家屋全壊・流失877棟、半壊3354棟、床上浸水13434棟、床下浸水150354棟。	大阪府地域防災計画 画関連資料集	22.0	28.9	176	大台ヶ原 1017.3 河合748.2 前鬼509.4 奈良21.4 奈良163.6	京都府地域防災計画	奈良21.4 奈良29.7	奈良の気象百年	奈良県の気象百年
昭和29	1954	6月5日	6月7日	大雨	日本海低気圧。床上浸水20棟、床下浸水1205棟。	大阪の気象百年								
昭和29	1954	6月22日	6月23日	大雨	梅雨前線。死者1名、負傷者1名、建物全半壊2棟、床下浸水362棟。	大阪の気象百年			園部132 周山130 線部111	京都府地域防災計画				
昭和29	1954	6月28日	6月30日	大雨	梅雨前線。府下の中小河川に大被害。死者2名、負傷者1名、建物被害35棟、床上浸水532棟、床下浸水34686棟。	大阪の気象百年			周山121 京都115 田辺93.4	京都府地域防災計画				
昭和29	1954	7月4日	7月6日	大雨	梅雨前線。府北部を中心に被害。死者1名、建物全半壊11棟、床上浸水344棟、床下浸水16894棟。	大阪の気象百年			田辺154.4 木津145.7	京都府地域防災計画				
昭和29	1954	7月29日	7月30日	大雨	負傷者9名、床下浸水53棟。	大阪の気象百年			福知山138	京都気象100年				
昭和29	1954	8月17日	8月20日	台風5号	建物被害30棟、床下浸水224棟。	大阪の気象百年				京都府地域防災計画				
昭和29	1954	9月10日	9月14日	台風12号	負傷4名、建物被害8棟、床下浸水129棟、がけ崩れ1ヶ所。	大阪の気象百年			京都府地域防災計画					
昭和29	1954	9月17日	9月19日	台風14号	台風15号。死者2名、負傷者7名、建物全半壊87棟、床上浸水88棟、床下浸水239棟、鉄道被害4ヶ所。	大阪の気象百年	26.3		上林186 京都112.7	京都府地域防災計画				
昭和30	1955	4月14日	4月18日	大雨	前線停滞。建物被害5棟、床下浸水293棟。	大阪の気象百年				京都府地域防災計画				
昭和30	1955	6月18日	6月19日	大雨	梅雨前線。床下浸水1145棟、がけ崩れ2ヶ所。	大阪の気象百年								
昭和30	1955	7月22日	7月23日	大雨	熱帯低気圧。床下浸水70棟。	大阪の気象百年								
昭和30	1955	8月31日		大雨	日本海低気圧、前線。床下浸水230棟。	大阪の気象百年								
昭和30	1955	9月29日	10月11日	台風22号	床下浸水150棟。	大阪の気象百年								
昭和30	1955	10月19日	10月20日	台風26号	死者1名、床下浸水55棟、がけ崩れ3ヶ所、船舶被害3隻。	大阪の気象百年								

開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県									
和暦	年	西暦	月	日	日	気象概要	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典					
							最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)			最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)		最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)					
昭和	31	1956	2	27		強風				発達した低気圧が太平洋岸を通過。架線切れにより国・私鉄混雑。船舶被害1隻。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	3	18	3	大雨				低気圧が太平洋岸を通過。床下浸水650棟。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	6	7		大雨				梅雨前線。大阪市、堺市で床下浸水550棟。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	6	11	6	大雨				梅雨前線。低気圧。床下浸水2430棟。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	6	23		強風				日本海低気圧。船舶沈没1隻。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	7	23		大雨				寒冷前線通過。大阪の最大1時間降水量32.4mm。落雷により国・私鉄混雑。建物被害1棟、床下浸水1649棟。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	8	16	8	19	台風9号			死者1名、負傷者1名、建物被害7棟、床上浸水21棟、床下浸水109棟、船舶被害2隻。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	9	25	9	27	台風15号		106	台風自体の雨の他に寒冷前線の活動による降雨が重なり、最大雨量は石川流域で290mm、大和川上流域で210mm。三輪町で堤防が決壊、初瀬川流域では大輪町、大西領芝西地区で堤防が決壊、葛城川流域で広陵町藤之森、御所市南西部で柳田川が決壊し、大きな被害が発生。この洪水により大和川流域全体では建物被害が12435戸、浸水被害が1038ha。大阪府と奈良県合わせて死者・行方不明者4名、家屋全半壊18棟、床上浸水700棟、床下浸水11717棟。大阪府のみでは死者・行方不明者2名、家屋全半壊1棟、床上浸水141棟、床下浸水8075棟。	河川整備基本方針(大和川水系)												
昭和	32	1957	4	19	4	大雨				前線停滞。床下浸水300棟。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	6	27	6	28	台風5号	14.4	22.8	東大阪水害(6月水害)。雨量300mmの集中豪雨。生駒山系、枚岡市の山崩れにより水源産地の崩壊、溪流の荒廃。死者6名、負傷者4名、家屋全半壊流失20棟、床上・床下浸水121819棟。	大阪府地域防災計画関連資料集												
昭和	32	1957	7	10		大雨				梅雨前線。大阪府を中心に被害。落雷により私鉄混雑。建物全半壊7棟、床上浸水938棟、床下浸水24096棟。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	7	12		大雨				梅雨前線。床上浸水42棟、床下浸水2878棟。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	7	16	7	17	大雨			梅雨前線。大阪の最大1時間降水量60.0mm。床上浸水866棟、床下浸水23687棟、停電約50000世帯。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	7	28		大雨				前線。鉄道一時不通。停電。床下浸水900棟。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	8	12		大雨				床上浸水15棟、床下浸水745棟。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	9	7		台風10号				床上浸水1棟、床下浸水568棟。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	9	9	9	11	大雨			前線停滞。床上浸水15棟、床下浸水745棟。	大阪の気象百年												
昭和	33	1958	4	21	4	23	大雨			前線停滞。床上浸水16棟、床下浸水3146棟。	大阪の気象百年												
昭和	33	1958	7	21		大雨				前線停滞。床上浸水160、床下浸水1082。	京都気象100年												

和暦年	西暦	月	日	日	気象概要	大阪府			京都府			奈良県						
						開始日	終了日	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	
昭和 33	1958	8	24	8	26	台風17号				大原原137	家屋全半壊2・堤防決壊1。	京都気象100年	奈良 18.7	奈良 27.5	636.0	日出岳 780.0 河合672.6 山上ヶ岳 636.0 奈良129.9	東南海域を中心に大雨が降った。被害は県全域で死者2名、行方不明6名、負傷者2名、家屋全壊5戸、半壊44戸、一部破損73戸、家屋流失5戸、非住家被害17戸、床上浸水95戸、床下浸水471戸、田流失・埋没6町歩、田冠水85町、畑流失・埋没4町歩、畑冠水75町歩、道路損壊118ヶ所、橋梁流失29ヶ所、堤防決壊5ヶ所、山・崖崩れ70ヶ所、通信施設被害44ヶ所等に及んだ。	奈良県の気象百年
昭和 33	1958	8	27	8	28	大雨												
昭和 33	1958	9	15	9	18	台風21号												
昭和 33	1958	9	26	9	28	狩野川台風												
昭和 33	1958	10	15			大雨				下和知92	堤防決壊1。	京都気象100年						
昭和 34	1959	7	13	7	15	台風5号				峰山120	家屋全半壊1・床上浸水5・堤防決壊1。	京都気象100年						
昭和 34	1959	8	13	8	14	台風7号	199			花背503 周山330	台風7号の影響と前線の停滞による豪雨。死者14人、負傷者30人、住宅全壊42戸、住宅流失75戸、住宅半壊98戸、床上浸水5508戸、床下浸水26056戸。	京都府地域防災計画						
昭和 34	1959	9	26	9	27	伊勢湾台風				舞鶴287 峰山226 宮津243	死者9人、負傷者169人、住宅全壊114戸、住宅流失65戸、住宅半壊1051戸、床上浸水8176戸、床下浸水14760戸。	京都府地域防災計画	奈良 23.3	奈良 32.6	826.0	奈良県でも被害は全域に及び、死者88名、行方不明25名、負傷者104名、家屋全壊795棟、半壊1598棟、流失558頭、一部破損1056棟、非住家被害653棟、床上浸水6171棟、床下浸水4054棟、田流失・埋没421ha、田冠水1309ha、畑流失・埋没124ha、畑冠水668ha、道路損壊863ヶ所、橋梁流失381ヶ所、堤防決壊118ヶ所、山・崖崩れ1967ヶ所、鉄軌道被害6ヶ所、通信施設被害118回線、罹災者概数30221名等の上った。	奈良県の気象百年	
昭和 34	1959	11	2			大雨												
昭和 35	1960	4	19	4	20	大雨												
昭和 35	1960	5	18	5	19	大雨												
昭和 35	1960	5	27			大雨												
昭和 35	1960	6	21	6	22	豪雨												
昭和 35	1960	7	7	7	8	大雨												
昭和 35	1960	8	12	8	13	台風12号												
昭和 35	1960	8	28	8	30	台風16号				比叡山185	死者2。	京都気象100年						
昭和 36	1961	5	28	5	29	台風4号				花背386 周山362 園部314	桂川の溢流。死者11人、負傷者59人、住宅全壊47戸、住宅流失15戸、住宅半壊158戸、床上浸水3220戸、床下浸水7166戸。	京都府地域防災計画						
昭和 36	1961	6	24	6	30	豪雨	9.8	12.0	296	花背478 京都414	宇治川、木津川の内外、大谷川のはらん。負傷者1人、住宅全壊1戸、住宅半壊15戸、床上浸水330戸、床下浸水1507戸。	京都府地域防災計画						

開始日			大阪府			京都府			奈良県				
和暦	西暦	終了日	気象概要		事象	気象値		事象	気象値		出典		
			最大風速(m/s)	最大瞬間風速(m/s)		最大風速(m/s)	最大瞬間風速(m/s)		最大風速(m/s)	最大瞬間風速(m/s)			
昭和36	1961	7月9日	7月10日	大雨	寒冷前線通過、十三で強風により煙突倒壊、落雷により国・私鉄混雑、東大阪一帯で停電。6/24~7/10の全国にわたる大雨を「昭和36年梅雨前線豪雨」と名付けた。								
昭和36	1961	7月25日		大雨	日本海低気圧。床上浸水5棟、床下浸水25棟。								
昭和36	1961	9月15日	9月17日	第2室戸台風	死者32名、負傷者2392名、家屋の全壊・流失3386棟、半壊21356棟、床上浸水61488棟、床下浸水59729棟。	44	33.3	50.6	舞鶴 京都 34.3	府南部を通過、死者12人、負傷者251人、住居全壊941戸、住宅半壊4545戸、床上浸水5戸、床下浸水645戸。	京都府地域防災計画	奈良県でも全域で死者6名、負傷者142名、家屋全壊362棟、半壊988棟、流失3棟、床上浸水91棟、床下浸水66棟、一部破損10963棟、非住家被害2470棟、田流失・埋没454ha、田冠水665ha、畑流失・埋没2ha、畑冠水124ha、道路損壊192ヶ所、橋梁流失34ヶ所、堤防決壊10ヶ所、山・崖崩れ141ヶ所、鉄軌道被害8ヶ所、通信施設被害864回線、木材流失1510㎡に及んだ。	奈良県の気象百年
昭和36	1961	10月10日		大雨	寒冷前線通過、府下10万戸停電。床上浸水282棟、床下浸水1025棟、通信回線被害55000回線。								
昭和36	1961	10月26日	10月28日	大雨	低気圧が瀬戸内を通過。建物全半壊2棟、床上浸水187棟、床下浸水5923棟、がけ崩れ12ヶ所。	151			花背530 周山328	木津川、宇治川、桂川、由良川の増水と内水。死者3人、行方不明者1人、負傷者3人、住宅全壊3戸、住宅流失2戸、住宅半壊39戸、床上浸水2968戸、床下浸水3917戸。	京都府地域防災計画	県南東部を中心に大雨となった。県内の主な被害は、死者1名、負傷者1名、家屋全壊3棟、半壊2棟、一部破損12棟、非住家被害4棟、床上浸水17棟、床下浸水628棟、田流失・埋没31ha、田冠水771ha、畑冠水2ha、道路損壊89ヶ所、橋梁流失24ヶ所、堤防決壊6ヶ所、山・崖崩れ76ヶ所、通信施設被害3回線等となっている。	奈良県の気象百年
昭和37	1962	6月6日	6月7日	大雨	梅雨前線。床下浸水150棟。								
昭和37	1962	6月9日	6月10日	大雨	梅雨前線。死者1名、建物被害1棟、床下浸水1169棟。				綾部190 和知167 福知山164	床上浸水273戸、床下浸水451戸。	京都府地域防災計画		
昭和37	1962	6月12日	6月15日	大雨	梅雨前線。死者1名、負傷者5名、建物被害4棟、床上浸水30棟、床下浸水649棟、がけ崩れ14ヶ所。								
昭和37	1962	6月26日		大雨	梅雨前線。床下浸水50棟。								
昭和37	1962	7月4日	7月6日	大雨	梅雨前線。建物全壊6棟、床上浸水30棟、床下浸水649棟、がけ崩れ10ヶ所。								
昭和37	1962	7月26日	7月27日	台風7号	死者1名、負傷者15名、建物被害34棟、床下浸水11棟、船舶被害16隻、鉄軌道被害11ヶ所、停電30万戸。								
昭和37	1962	10月14日		大雨	寒冷前線通過。床下浸水600棟、通信施設被害1300回線。								
昭和38	1963	5月14日	5月15日	大雨	日本海低気圧、寒冷前線。床下浸水1574棟、鉄軌道被害1ヶ所。								
昭和38	1963	5月16日	5月17日	大雨	梅雨前線。床下浸水177棟、船舶事故1件。								
昭和38	1963	5月21日	5月22日	大雨	梅雨前線。床下浸水534棟、船舶事故1件(沈没)。								
昭和38	1963	5月27日	5月28日	大雨	梅雨前線。床下浸水1124棟、通信回線不通3000回線。								
昭和38	1963	6月2日	6月6日	台風2号	床下浸水1448棟、山崩れ1ヶ所。				宮津101	家屋全半壊3・床上浸水36・堤防決壊20。	京都気象100年		
昭和38	1963	6月13日	6月14日	台風3号	負傷1名、住家全半壊1棟。								
昭和38	1963	7月10日	7月11日	大雨					細見101	堤防決壊1。	京都気象100年		
昭和38	1963	7月22日	7月23日	大雨									
昭和38	1963	8月16日	8月17日	大雨	寒冷前線。床下浸水325棟。				比叡山127	床上浸水13・堤防決壊7。	京都気象100年		

開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県					
和暦	年	西暦	月	日	日	気象概要	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典	
							最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)			最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)					
昭和	38	1963	8	25		大雨				寒冷前線。大阪の時間降水量41.0mm、大阪市、布施市などで大規模な停電。床上浸水86棟、床下浸水2698棟。	大阪の気象百年								
昭和	38	1963	8	30	8	31				日本海低気圧。電線切断により9万戸停電。船舶沈没2隻。	大阪の気象百年								
昭和	39	1964	4	7	4	8				梅雨前線、日本海低気圧。建物被害2棟、床下浸水79棟、がけ崩れ3ヶ所、通信施設被害6000回線。	大阪の気象百年								
昭和	39	1964	6	19	6	20				梅雨前線。床上浸水3棟、床下浸水1760棟。	大阪の気象百年								
昭和	39	1964	6	25	6	27				陸上・海上・航空交通混乱。床下浸水23棟。	大阪の気象百年								
昭和	39	1964	7	14	7	16				昭和39年7月山陰北陸豪雨									
昭和	39	1964	8	24						台風14号									
昭和	39	1964	9	24	9	25	19.0	31.7	41	負傷者17名、家屋全壊・流失104棟、半壊15棟、床上・床下浸水10563棟。	大阪府地域防災計画関連資料集	京都 29.2 舞鶴 22.5	園部118 宮津108 久美浜79	負傷者7人、住宅全壊3戸住宅半壊11戸、床上浸水1戸、床下浸水165戸。	京都府地域防災計画				
昭和	40	1965	5	26	5	27				死者2名、負傷者2名、床上浸水182棟、床下浸水13134棟、がけ崩れ14ヶ所、通信施設被害4回線。	大阪の気象百年								
昭和	40	1965	6	19	6	21				梅雨前線。建物被害2棟、床下浸水79棟、がけ崩れ3ヶ所。	大阪の気象百年								
昭和	40	1965	7	6	7	7													
昭和	40	1965	7	22															
昭和	40	1965	7	23															
昭和	40	1965	9	9	9	11				死者1名、負傷者24名、建物全壊15棟、半壊28棟、床上浸水230棟、床下浸水566棟、建物一部破損137棟、非住家被害414棟、鉄軌道被害5ヶ所、通信施設被害1487回線、船舶沈没1隻。	大阪の気象百年	舞鶴 39.6 京都 25.8	久美浜273	死者3人、負傷者67人、住宅全壊75戸、住宅半壊355戸、床上浸水7戸、床下浸水1025戸。	京都府地域防災計画				
昭和	40	1965	9	13	9	18				死者3名、行方不明1人、負傷者16名、建物全壊13棟、半壊34棟、流失1棟、床上浸水436棟、床下浸水12009棟、建物一部破損165棟、非住家被害99棟、がけ崩れ194ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所、通信施設被害1929回線、木材流失180m。	大阪の気象百年	京都 36.7 舞鶴 33.1	知井518	死者1人、負傷者34人、住宅全壊29戸、住宅半壊167戸、床上浸水2088戸、床下浸水8682戸。	京都府地域防災計画				
昭和	40	1965	11	9						床下浸水270棟、国鉄嵯峨線一時不通。	大阪の気象百年								
昭和	41	1966	6	30	7	2				梅雨前線。床上浸水3600棟、床下浸水30000棟、非住家被害13棟、がけ崩れ43ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所。	大阪の気象百年								
昭和	41	1966	7	1	7	2				梅雨前線。道路浸水、堤防決壊、陸空の交通混乱。床上浸水3000棟、床下浸水4400棟。	大阪の気象百年								
昭和	41	1966	8	13	8	21				南岸低気圧上り前線。水田冠水、道路損壊、山くずれ発生。床下浸水22000棟。	大阪の気象百年								
昭和	41	1966	9	16	9	19													
昭和	41	1966	9	17	9	19													

和暦	年	西暦	月	日	日	気象概要	大阪府			京都府			奈良県						
							開始日	終了日	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	
昭和42	1967	2	1			昭和42年龜の瀬地すべり													
昭和42	1967	6	28	6	29	大雨													
昭和42	1967	7	7	7	10	昭和42年7月豪雨			152		死者5名、不明者2名、負傷者170名、家屋全壊・流失62棟、半壊110棟、床上浸水16684棟、床下浸水119976棟。	大阪府地域防災計画関連資料集					奈良県でも、全域で被害があったが、特に平野部で家屋の浸水・田畑の冠水等の被害が発生した。県内の主な被害は、床上浸水141棟、道路損壊54ヶ所、橋梁流失3ヶ所、堤防決壊7ヶ所、山・崖崩れ44ヶ所、耕地冠水346ha、農業被害3467ha等の上った。	奈良県の気象百年	
昭和42	1967	7	12			大雨					梅雨前線。主として北摂地域に被害。床下浸水1400棟。	大阪の気象百年							
昭和43	1968	7	2			7月豪雨			200		台風3号による梅雨前線の刺激。床上浸水1200棟、床下浸水24083棟。	大阪府地域防災計画関連資料集							
昭和43	1968	7	5	7	6	大雨					梅雨前線。道路損壊、堤防決壊、水田冠水発生。床下浸水1300棟。	大阪の気象百年					主に北部で被害が発生した。県内の主な被害は、負傷者1名、家屋半壊1棟、床上浸水595棟、床下浸水4524棟、非住家被害4棟、田冠水1935ha、畑冠水11ha、山・崖崩れ77ヶ所、道路損壊67ヶ所、河川損壊18ヶ所、橋梁損壊2ヶ所等の上った。	奈良県の気象百年	
昭和43	1968	7	15	7	16	大雨													
昭和43	1968	8	18			大雨					死者1・床上浸水1435・家屋全半壊8。	京都気象100年							
昭和43	1968	8	25	8	29	台風10号					がけ崩れ発生。床下浸水6棟。	大阪の気象百年					県全域で被害が発生した。県内の主な被害は、住宅一部破損1棟、非住家被害1ヶ所、堤防決壊1ヶ所、山・崖崩れ19ヶ所等となっている。	奈良県の気象百年	
昭和44	1969	6	25	6	26	大雨					梅雨前線。建物破損2棟、床上浸水157棟、床下浸水9167棟、がけ崩れ13ヶ所。	大阪の気象百年					西日本付近の梅雨前線の活動が活発になって、奈良県でも大雨が降った。このため、県全域で床下浸水315棟、畑冠水259ha、道路損壊8ヶ所、堤防決壊4ヶ所、山・崖崩れ11ヶ所等の被害があった。	奈良県の気象百年	
昭和44	1969	6	28	7	2	大雨					梅雨前線。負傷者1名、建物全壊1棟、半壊6棟、流失2棟、床上浸水186棟、床下浸水3898棟、建物一部破損2棟、非住家被害30棟、がけ崩れ41ヶ所、鉄軌道被害8ヶ所、船舶沈没2隻。	大阪の気象百年							
昭和44	1969	7	1	7	2	大雨												県北部で被害が発生した。県内の主な被害は、床上浸水58棟、床下浸水441棟、田冠水322ha、山・崖崩れ15ヶ所、道路損壊28ヶ所、河川損壊5ヶ所等となっている。	奈良県の気象百年

和暦年	西暦	月	日	日	終日	大阪府				京都府				奈良県			
						気象概要		気象値		事象		出典		気象値		事象	
和暦年	西暦	月	日	日	終日	最大風速(m/s)	最大瞬間風速(m/s)	雨量(mm)	事象	出典	最大風速(m/s)	最大瞬間風速(m/s)	雨量(mm)	事象	出典		
昭和44	1969	7	4	7	5	大雨			梅雨前線。がけ崩れ4ヶ所。	大阪の気象百年				小坪瀬 320.0 伯母子岳 226.0 玉置山 217.0 奈良72.0	県全域で大雨が降った。県内の主な被害は、死者1名(十津川村で落石による)、家屋一部破損1棟、床下浸水77棟、田冠水8ha、山・崖崩れ45ヶ所、道路損壊50ヶ所、鉄軌道被害1ヶ所等であった。	奈良県の気象百年	
昭和44	1969	7	7	7	8	大雨											
昭和44	1969	8	2			大雨			伏見112	京都気象100年							
昭和45	1970	6	14	6	16	大雨			和知271	京都気象100年							
昭和45	1970	6	25	6	26	大雨								伯母子岳 161.0 寺垣内 157.0 立里156.0 奈良72.0	県全域で大雨となった。このため、山添村で林道崩壊により住宅が全壊して負傷者4名が出たのをばしめ、県内全域で家屋全壊3棟、一部損壊1棟、床下浸水12棟、田冠水23ha、山・崖崩れ13ヶ所、道路損壊6ヶ所、河川損壊5ヶ所等の被害があった。	奈良県の気象百年	
昭和45	1970	7	4	7	6	台風2号			負傷者13名、建物全壊1棟、床下浸水23棟。	大阪の気象百年				葉師平 557.0 日出岳 545.0 竹の平 538.0 奈良39.0	十津川村で飯場が倒壊して死者1名が出たのをばしめ、県全域で家屋全壊1棟、半壊4棟、一部破損8棟、非住家被害30棟、道路損壊7ヶ所、山・崖崩れ9ヶ所、通信施設被害1810回線、また農作物被害や強風による果樹被害、倒木(奈良公園他)も発生した。	奈良県の気象百年	
昭和45	1970	9	18			大雨			宇治133	京都気象100年							
昭和45	1970	9	22	9	23	大雨			家屋壊2・床上浸水4。	京都気象100年							
昭和46	1971	7	18			豪雨			京都1時間最大雨量30.5mm。床上浸水1。	京都気象100年							
昭和46	1971	7	27			大雨			京都1時間最大雨量14.5mm。床上浸水58。	京都気象100年							
昭和46	1971	8	28	9	1	台風23号			舞鶴 28.3 京都 19.8	京都府地域防災計画				洞川217.0 風屋206.0 曹備200.0 奈良86.0	大雨による被害は県全域に及んだが、特に大宇陀、東吉野、十津川の山間部に集中した。県内の主な被害は、死者3名、行方不明8名、負傷者4名、家屋全壊3棟、半壊2棟、流出1棟、床上浸水69棟、床下浸水1211棟、一部破損1棟、非住家被害2棟、田流失・埋没2ha、田冠水47ha、畑流失・埋没1ha、畑冠水15ha、山・崖崩れ116ヶ所、道路損壊90ヶ所、堤防決壊17ヶ所、橋梁流失11ヶ所、鉄軌道被害2ヶ所等に上った。	奈良県の気象百年	
昭和46	1971	9	2	9	5	異常潮位			鞍馬山320	京都気象100年							
昭和46	1971	9	5	9	7	豪雨			大河原106	京都気象100年							
昭和47	1972	6	7	6	9	大雨											
昭和47	1972	7	3	7	13	豪雨	300		前線の停滞による豪雨。死者8人、負傷者17人、住宅全壊15戸、住宅半壊33戸、床上浸水230戸、床下浸水4576戸。	京都府地域防災計画				三浦峠 457.0 小坪瀬 404.0 前鬼381.0 奈良266.0	県全域で大雨となり、各地で水害が発生した。県内の主な被害は、死者4名、負傷者3名、家屋全壊1棟、半壊4棟、一部破損9棟、非住家被害2棟、床上浸水47棟、床下浸水544棟、田冠水411ha、畑冠水63ha、山・崖崩れ70ヶ所、道路損壊91ヶ所、堤防決壊16ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所等に及んだ。	奈良県の気象百年	
昭和47	1972	7	27			異常潮位			国鉄桜島線24本運転休止。								

開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県					
和暦	年	西暦	月	日	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典			
昭和	47	1972	9	13	9	20			118	死者3名、負傷者9名、家屋全壊・流出8棟、半壊90棟、床上浸水9283棟、床下浸水60146棟。	大阪府地域防災計画関連資料集				この台風は風雨共に強く、特に台風の通過した県南部・東部に被害が多かった。県内の主な被害は、負傷者2名、家屋全壊9棟、半壊13棟、床上浸水3棟、床下浸水110棟、耕地流失・埋没188ha、耕地冠水539ha、山・崖崩れ84ヶ所、道路損壊121ヶ所、堤防決壊15ヶ所、橋梁流失3ヶ所、鉄軌道被害1ヶ所等となっている。	奈良県の気象百年			
昭和	48	1973	5	1	5	2				日本海低気圧。床上浸水67棟、床下浸水2528棟。	大阪の気象百年						奈良市内でも土砂崩れなどの被害があった。	奈良市災害史	
昭和	48	1973	7	14															
昭和	48	1973	8	19															
昭和	48	1973	10	13						寒冷前線。床下浸水430棟。	大阪の気象百年								
昭和	49	1974	4	7	4	9				前線停滞。阪和線一時不通。床下浸水390棟。	大阪の気象百年								
昭和	49	1974	6	17	6	18				二つ玉低気圧。大阪、守口、東大阪で浸水被害。床上浸水23棟、床下浸水666棟。	大阪の気象百年								
昭和	49	1974	6	21															
昭和	49	1974	7	3	7	11													
昭和	49	1974	9	8	9	9				貝塚市、泉佐野市で浸水被害。床下浸水10棟。	大阪の気象百年								
昭和	50	1975	6	25						梅雨前線。東大阪で床下浸水200棟。	大阪の気象百年								
昭和	50	1975	7	3	7	4				梅雨前線による大雨。床上浸水1933棟、床下浸水22493棟。	大阪府地域防災計画関連資料集								
昭和	50	1975	7	24															
昭和	50	1975	8	6	8	7				寒冷前線。床上浸水135棟、床下浸水2479棟、がけ崩れ2ヶ所。	大阪の気象百年								
昭和	50	1975	8	21	8	24				負傷者2名、床上浸水182棟、床下浸水3777棟、非住家被害3棟、がけ崩れ2ヶ所、鉄軌道被害1ヶ所、通信施設被害1ヶ所。	大阪の気象百年								
昭和	50	1975	9	18															
昭和	51	1976	4	23															
昭和	51	1976	6	8	6	11				梅雨前線。死者1名、床上浸水42棟、床下浸水2009棟、がけ崩れ9ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所。	大阪の気象百年								
昭和	51	1976	7	7						国鉄・地下鉄一時不通。大東市で停電2600戸、床下浸水770棟。	大阪の気象百年								
昭和	51	1976	7	19															
昭和	51	1976	7	21						停電700戸。床上浸水9棟、床下浸水500棟。	大阪の気象百年								
昭和	51	1976	7	21															

開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県			
和暦	年	西暦	月	日	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	
昭和	51	1976	7	26	7	28	大雨			停電で、国・私鉄及び地下鉄一時不通。大阪府北東部で降雹。死者1名、負傷者1名、床上浸水5棟、床上浸水1150棟。	大阪の気象百年				西吉野村、下市町、五條市等で強雨と突風を伴い大豆大の雹が降った。県内の主な被害は、家屋全壊(落雷)2棟、床上浸水109棟、床上浸水2265棟、道路71ヶ所、山・崖崩れ1ヶ所、堤防決壊1ヶ所、農業被害1億9769万円(294ha)、電力障害409件等に及んだ。	奈良県の気象百年	
昭和	51	1976	9	8	9	17	台風17号			死者1名、建物全壊1棟、半壊1棟、床上浸水22棟、床上浸水3893棟、建物一部破損5棟、がけ崩れ31ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所。	大阪の気象百年				全域で長期間大雨が降った。県内の主な被害は、家屋一部損壊5棟、床上浸水96棟、田流出・埋没7ha、田冠水368ha、畑流失・埋没4ha、山・崖崩れ11ヶ所、道路損壊42所等となった。	奈良県の気象百年	
昭和	52	1977	7	4	7	5	大雨			床上浸水6棟、床上浸水171棟。	大阪の気象百年				日出岳 1145.0 河合839.0 山上ヶ岳 757.0 奈良217.0		
昭和	52	1977	7	17		大雨											
昭和	52	1977	7	18		大雨				梅雨前線。行方不明1名、負傷者23名、床上浸水1棟、床上浸水536棟、がけ崩れ7ヶ所。				大宇陀 63.0 高見山 35.0 日出岳 11.0 奈良6.5	局地的な短時間強雨が降った。このため、特に桜井市を流れる寺川が各所で溢れ、2戸が床上浸水、329戸が床上浸水した。県内の主な被害は、負傷者1名、床上浸水3棟、床上浸水339棟、田冠水4ha、山・崖崩れ4ヶ所、道路損壊34ヶ所、河川損壊5ヶ所等となっている。	奈良県の気象百年	
昭和	52	1977	11	16	11	17	大雨										
昭和	53	1978	6	22	6	23	大雨			梅雨前線。停電1万戸、私鉄ダイヤ乱れ、大阪空港49便欠航。死者1名、負傷者1名。				大宇陀 171.0 荒神岳 151.0 風屋151.0 奈良119.5	県中部・南部を中心に被害が発生した。県内の主な被害は、家屋全壊1棟、床上浸水10棟、床上浸水1058棟、耕地冠水325ha、山・崖崩れ13ヶ所、道路損壊18ヶ所、橋梁損壊3ヶ所、鉄軌道被害1ヶ所に上った。	奈良県の気象百年	
昭和	53	1978	7	10		大雨				国・私鉄のダイヤ乱れ、大阪の1時間降水量65mmは解説以来の記録。床上浸水827棟。							
昭和	54	1979	5	7	5	8	豪雨			瀬戸内低気圧。床上浸水1688棟。							
昭和	54	1979	5	26		大雨				日本海低気圧。停電1万戸、私鉄ダイヤ乱れ、大阪空港49便欠航。死者1名、負傷者1名。							
昭和	54	1979	6	26	7	2	6月豪雨	497		梅雨前線による大雨。家屋全壊・流出3棟、半壊1棟、床上浸水1336棟、床上浸水22865棟。	大阪府地域防災計画 画閣連資料集				県北部を中心に水害が発生し、死者1名、家屋全壊2棟、半壊5棟、床上浸水17棟、床上浸水2670棟、道路損壊268ヶ所、河川損壊348棟、橋梁損壊2ヶ所、鉄軌道被害1ヶ所等の被害があった。	奈良県の気象百年	
昭和	54	1979	9	24	10	2	台風16号			前線。床上浸水7202棟。							
昭和	54	1979	9	26		大雨				死者1名、負傷者5名、家屋半壊19世帯、床上浸水5088棟、床上浸水41489棟。	大阪の気象百年 大阪府地域防災計画 画閣連資料集						
昭和	54	1979	9	30	10	1	台風16号	149		陸海空の交通混乱。公立学校、幼稚園では19日臨時休校。							
昭和	54	1979	10	14	10	20	台風20号			冬型。泉大津市沖で砕石運搬船転覆して死者3名。南海高野線一時不通。大阪府淀川区と堺市で降雹、大きなもの直径3cm。床上浸水27棟、床上浸水624棟、がけ崩れ1ヶ所。	大阪の気象百年						
昭和	55	1980	2	1		強風											
昭和	55	1980	6	1	6	3	豪雨										

開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県							
和暦	年	西暦	月	日	日	月	日	時	分	秒	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	
昭和	55	1980	7	6	7	12															
昭和	55	1980	8	22	8	27															
昭和	55	1980	8	31																	
昭和	55	1980	9	6	9	8															
昭和	56	1981	7	29	8	1															
昭和	56	1981	10	7	10	9															
昭和	57	1982	8	1	8	3				13.4		209									
昭和	58	1983	6	20	6	21															
昭和	58	1983	9	24	9	30															
昭和	59	1984	6	25	6	27															
昭和	59	1984	7	16																	
昭和	60	1985	6	18	7	6															

開始日			大阪府			京都府			奈良県						
和暦	年	西暦	月	日	気象概要	気象値			事象	出典	気象値			事象	出典
						最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)			最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)		
昭和 61	1986	7 20	7 23	大雨					宇治市322 長岡京市311 京都市194	梅雨前線による大雨。死者1人、負傷者2人、住宅全壊12戸、住宅半壊162戸、床上浸水162戸、床下浸水2471戸。	京都府地域防災計画				
昭和 62	1987	7 12	7 21	大雨				京都市242 (7/14-15) 京都市132 (7/19-20)	梅雨前線による大雨。住宅半壊1戸、床上浸水6戸、床下浸水515戸。	京都府地域防災計画					
昭和 62	1987	10 13	10 18	台風19号				宮津市207 夜久野町195 福知山市170	負傷者1人、床上浸水42戸、床下浸水208戸。	京都府地域防災計画					
昭和 63	1988	8 24	8 25	豪雨				久美浜町211 宮津市186 網野町186	負傷者2人、住宅半壊1戸、床上浸水94戸、床下浸水1077戸。	京都府地域防災計画					
平成 1	1989	9 2	9 3	豪雨				周山202 亀岡158	秋雨前線による大雨。床上浸水12戸、床下浸水118戸。	京都府地域防災計画					
平成 2	1990	9 16	9 20	台風19号				美山町391 久美浜町356	負傷者5人、住宅全壊1戸、住宅半壊6戸、床上浸水52戸、床下浸水560戸。	京都府地域防災計画		日出岳 1043.0 上北山 838.0 山上ヶ岳 579.0 奈良286.0	奈良県の気象百年	このため、吉野川支流や十津川が増水して、家屋浸水等の被害が発生した。県内の主な被害は、家屋半壊・破損5棟、床上浸水46棟、床下浸水105棟、山・崖崩れ6ヶ所、堤防決壊2ヶ所等があった。	奈良県の気象百年
平成 3	1991	7 27		大雨								大宇陀 95.0 曽爾87.0 奈良5.0	大宇陀町、菟田野町、榛原町等で落雷や大雨による被害が発生した。県内の主な被害は、負傷者1名、家屋半壊1棟、床上浸水4棟、床下浸水45棟、河川損壊71ヶ所、道路損壊63ヶ所等となっている。日最大1時間降水量 大宇陀43.0mm (27日14時)、曽爾35.0mm (27日15時)、奈良10.0mm (27日00時40分)	奈良県の気象百年	
平成 3	1991	9 24	10 1	台風19号					負傷者15人、住宅全壊1戸、住宅半壊2戸、床下浸水8戸。	京都府地域防災計画					
平成 4	1992	8 11		大雨								田原本 66.0 奈良30.5	県北部を中心に雷を伴い激しい雨が降った。このため、県北部、特に桜井市を中心に、床上浸水11棟、床下浸水97棟等の被害があった。また、桜井市で線路が冠水し、電車が一時不通となった。日最大1時間降水量 田原本55.0mm (11日18時)、奈良20.0mm (11日18時20分)	奈良県の気象百年	
平成 4	1992	8 17	8 20	台風11号				京都市332 京北町232	死者1人、住宅全壊1戸。	京都府地域防災計画					
平成 4	1992	8 24		大雨								曽爾63.0 針59.0 奈良31.5	県北部を中心に激しい雷雨となった。このため、特に、王寺町、平群町、榛原町等の県北部で、床上浸水5棟、床下浸水282棟、道路損壊1ヶ所等の被害があった。また、落雷により、斑鳩町、王寺町、奈良市で約1900戸が停電した。日最大1時間降水量 曽爾40.0mm (24日15時)、奈良27.5mm (24日16時10分)	奈良県の気象百年	

開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県					
和暦	年	西暦	月	日	日	月	日	日	日	月	日	日	月	日	日	月	日	日	日
気象概要						気象値		事象		出典		気象値		事象		出典			
						最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)				最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)					
平成	15	2003	7	11	7	14													
平成	15	2003	8	14	8	15													
平成	16	2004	8	7															
平成	16	2004	9	24	9	30													
平成	16	2004	10	17	10	21													
平成	19	2007	7	16															

①中央気象台(1900-2002)「気象要覧」

②国立天文台編(2011)「理科年表 平成24年」丸善出版

※期間、気象値などは①、②の資料も参照した。

土地分類基本調査（土地履歴調査）
説明書

大阪東北部

平成25年3月

国土交通省国土政策局国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）の成果は、国土交通省
ホームページからご利用いただけます。